

# 博士論文

リズム感で育む幼児の運動能力の研究

平成 28 年度

仲山 正志

大阪総合保育大学大学院

児童保育研究科 児童保育専攻

## 目次

序章 .....	1
第1節 問題設定 .....	1
第2節 保育所・幼稚園における幼児の運動能力の取り組み .....	1
1. 体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」 .....	1
2. 幼児期運動指針 .....	2
3. 親子で楽しくパワーアップ .....	2
第3節 幼児の運動能力についての課題 .....	3
第1章 幼児の運動能力の現状	
第1節 幼児の運動能力の現状 .....	4
第2節 幼児の体力・運動能力に関わる環境 .....	12
第3節 幼児の運動能力の構造 .....	13
第4節 幼児の運動能力評価・測定方法 .....	13
第5節 運動の自己評価 .....	14
第6節 運動有能感・被受容感 .....	14

第2章 運動能力についての教育・保育の4つの考え方.....	17
第1節 小学校学習指導要領 体育科の目標の転換.....	17
1. 昭和43年学習指導要領 .....	17
2. 昭和52年学習指導要領 .....	17
第2節 幼稚園教育要領「健康」の目標の転換.....	20
1. 昭和39年幼稚園教育要領「健康」 .....	20
2. 平成元年幼稚園教育要領 .....	22
第3節 幼児の運動能力類型化.....	23
1. 目的 .....	23
2. できる体育 .....	23
3. 楽しい体育 .....	23
4. 系統性.....	23
5. 主体性 .....	24
6. 類型化の4つの区分.....	24
第4節 力強さ追求型.....	25
1. 小林寛道の研究内容「幼児の発達運動学」 .....	25
2. 柳沢プログラム .....	26
第5節 たのしさ追求型 .....	26
第6節 しなやかさ追求型.....	28

1. 小学校学習指導要領体づくり運動「体ほぐし」 .....	28
2. つるまき体操 .....	29
第7節 ここちよさ追求型.....	30
1. 原田碩三の研究内容 .....	30
2. 幼児期運動指針 .....	30
第8節 まとめと本論文の視点 .....	31
第9節 運動能力についての新たな方向 内なるリズム .....	32
第3章 本論文の課題と方向 .....	34
第1節 本論文の課題 .....	34
第2節 本論文の目的 .....	34
第3節 本論文の仮説 .....	35
第4章 幼児の運動能力と運動有能感・被受容感の関連（調査I） .....	36
第1節 調査Iの研究の目的 .....	36
第2節 量的運動能力基準・質的運動能力基準 .....	37
1. 量的運動能力基準.....	37
2. 質的運動能力基準.....	37

第3節 調査Ⅰの仮説.....	38
第4節 調査Ⅰの研究手法.....	39
1. 予備調査について.....	39
2. 本調査について.....	41
第5節 結果.....	44
1. 運動能力・運動有能感・被受容感の得点について.....	44
2. 運動能力高低群による運動有能感・被受容感の平均値について.....	44
3. 男児・女児の運動能力と有能感・被受容感との相関につて.....	45
4. $\chi^2$ 検定結果.....	47
5. 重回帰分析結果.....	50
第6節 考察.....	50
1. 幼児の運動能力と運動有能感・被受容感の相関について.....	50
2. $\chi^2$ 検定について.....	51
3. 重回帰分析.....	51
第5章 幼児の運動能力と運動の好き嫌いとの関連（調査Ⅱ）.....	53
第1節 運動の好き嫌いについて.....	53
第2節 調査Ⅱの研究の目的.....	54
第3節 研究の仮説.....	54

第4節 調査方法.....	54
1. 予備調査について.....	54
2. 本調査について.....	55
第5節 結果.....	56
第6節 考察.....	58
第6章 幼児の運動能力と内なるリズムとの関連（調査Ⅲ）.....	59
第1節 調査Ⅲの研究内容.....	59
1. チビラダーのリズム運動への活用.....	59
2. リズムについての先行研究.....	60
第2節 調査Ⅲの目的.....	61
第3節 調査Ⅲの仮説.....	61
第4節 調査Ⅲの研究方法.....	61
1. 研究方法.....	61
2. 運動能力質的評価基準の設定.....	64
3. 質的運動能力評価の方法.....	67
第5節 結果.....	68

1 質的運動能力（走）とリズム（ラダー運動による）の関連.....	68
2 質的運動能力（跳）とリズム（ラダー運動による）の関連 .....	69
3 質的運動能力（投）とリズム（ラダー運動による）の関連.....	69
第6節 考察.....	70
1. 質的運動能力とリズム感 .....	70
2. リズムの変化への対応.....	71
第7章 リズム運動プログラムと内なるリズムとの関連（調査Ⅳ） .....	73
第1節 運動プログラムについて .....	73
第2節 調査Ⅳの研究の目的 .....	73
第3節 調査Ⅳの仮説.....	73
第4節 調査Ⅳの研究方法.....	74
1 調査対象：被験者.....	74
2 実験群について .....	74
3 統制群について .....	75
第5節 結果.....	76
第6節 考察.....	85
第8章 内なるリズムを生かした運動プログラム試案の提案 .....	87

第1節 幼児の運動能力向上の国・自治体の取り組み .....	87
1. 文部科学省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」 .....	87
2. 豊岡市の保育・教育スタイルの提言 .....	87
第2節 運動プログラム試案の提案 .....	88
第3節 自己コントロール .....	92
第4節 運動プログラムの内容 .....	93
1. 子どもが行う外的行動の特徴の捉え方 .....	93
2. 自己コントロール .....	93
3. 内なるリズム .....	93
4. 保育者による子ども理解の特徴 .....	93
5. 保育者の支援の特徴 .....	94
6. 評価 .....	94
7. 課題 .....	94
第5節 運動プログラムの保育での活用 .....	94
第9章 結論 .....	96
第1節 各章の内容 .....	96
1. 序章 .....	96
2. 第1章 幼児の運動能力の現状 .....	96
3. 第2章 運動能力についての教育・保育の4つの考え方 .....	96



4. 第3章	本論文の課題と方向 .....	97
5. 第4章	幼児の運動能力と運動有能感・被受容感の関連 .....	98
6. 第5章	幼児の運動能力と運動の好き嫌いとの関連 .....	98
7. 第6章	幼児の運動能力と内なるリズムとの関連.....	98
8. 第7章	リズム運動プログラムと内なるリズムとの関連 .....	99
9. 第8章	内なるリズムを生かした運動プログラム試案の提案.....	99
10. 第9章	結論.....	99
第2節	内なるリズム運動プログラムの活用 .....	100
第3節	今後の課題 .....	100
引用文献	.....	102
謝辞	.....	109

## 序章

### 第1節 問題設定

以前、保育士から保育者として、次のような悩みを聞いたことがある。「保育士として子どもの運動能力の差をどのように捉えて指導していったらいいか悩んでいます。少しの練習ですぐにコツをつかんで、できるようになる子がいる一方、練習してもなかなかできるようにならない子がいます。その時に、できない子に対して、できるようになるために支援をすることは大切なことであると思うのですが、簡単にできてしまう子は、難しい技にチャレンジしてより自信を持たせることも大切であると思います。そこで、できる子とできない子の差が出てしまうのですが、それは、仕方のないことなのでしょうか？それとも幼児期では、あまり差がでないような指導をしていくことが大切なのでしょうか？」

この保育士の悩みは、保育現場において保育者が悩まされる課題の一つであると思われる。

この保育現場での悩みを背景とし、本研究は、幼児の運動能力を育むため、先行研究に基づいて、まず、幼児の運動能力の捉え方を検討する。その知見に基づいて、幼児の運動能力を育むための新たな方向性を提案するものである。更に、その結果、どのような課題が見えてくるかを検討したいと考えている。

### 第2節 保育所・幼稚園における幼児の運動能力への取り組み

#### 1. 「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」

平成19年から21年度にかけて、文部科学省は、全国21市町村の幼稚園・保育所の幼児とその保護者を対象として、「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」を実施し、幼児の運動能力や生活習慣に対する運動実践の効果を調べている。その結果、普段から運動遊びをする幼児ほど運動能力テストの得点が高く、やる気がある。幼児の運動量や生活習慣の改善のためのプログラムを実施した幼稚園・保育所を卒園した子どもは、小学校就学以後も運動への好感度が高いことなどが明らかとなったと報

告している。

## 2. 幼児期運動指針

2012年、文部科学省により幼児期運動指針が示された。それに伴い、幼児期運動指針ガイドブックが2013年に発行されている。幼児期運動指針普及用パンフレットによると、3つのポイントが示されている。

①多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れる、②楽しく体を動かす時間を確保する、③発達の特性に合った遊びを提供する、としている。

①については、「トレーニングのように特定の動きばかりを経験したり、運動の頻度や強度が高過ぎ、特定の部位にストレスが加わるけがにつながったりしないように注意が必要です。」とあり、特定のスポーツや運動に偏って、身体的な無理がないように注意喚起を行っている。②については、「室内を含め1日の生活の中で「毎日、合計60分以上」と設定しています。」とし、具体的数値目標を挙げて体を動かす重要性を示している。③については、「幼児期に早急な結果を求めるのではなく、小学校以降の運動や生涯にわたってスポーツを楽しむための基盤を育成することを目指すことが重要です。」としている。これらの提案は、幼児が自発的に様々な運動遊びに取り組めるよう適切な環境構成を行くことが必要であることを示していると思われる。

## 3. 親子で楽しくパワーアップ

全国国公立幼稚園長会は、2008年に「親子で楽しくパワーアップ」という冊子を刊行している。「今なぜ、体力向上が大切か」の項目で、25m走・体支持持続時間のデータを挙げ、1973年と2002年を比較し、体支持持続時間・25m走について、その運動能力低下の様子を示している。その上で、親と子が一緒に行く運動、早寝早起き朝ごはんといった生活リズムについての提案を行っている。運動の継続を提案し、3週間で運動プログラムの効果検証をする項目が設けられている。幼児ばかりではなく、保護者にとっても運動することへの提案になっている。

### 第3節 幼児の運動能力についての課題

幼児の運動を育むことについては、上記の提案がなされている。「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」では、幼児の運動能力を育む具体的な内容が示されており、幼稚園・保育所の精力的な取り組みによる成果が見られる。幼児期運動指針では、具体的な数値目標を挙げ、運動遊びの取り組みを喚起している。「親子で楽しくパワーアップ」は、日常の親子の触れ合いの中で自然に運動能力が育まれ、幼児の運動への意欲も高まっていくものと思われる。

しかし、第1節で触れた、保育者の悩み、運動能力の差をどのように考えていけばよいのかについては、上記のプログラムからは、その答えを見出すことは難しい。

さらに、幼児期の運動能力は、やる気や対人関係などにも影響を与え、幼児の将来に亘って、負の影響があることが危惧されている。金ら〈2011〉は、幼児期の運動経験と学童期の生活状況との関連を調査し、幼児期に「体を動かすことが好き」・「それ以外」とし、小学生に回答を求めて、 $\chi^2$ 検定により比較している。(p .661) その結果、次の項目に2群の有意差が認められたことを報告している。学校が楽しい ( $p < 0.01$ )、勉強が楽しい ( $p < 0.05$ )、体育の授業が楽しい ( $p < 0.001$ )、休み時間によく遊ぶ ( $p < 0.01$ )。この結果から、幼児期の身体活動は、その後の幼児の生活に大きく影響があることを報告している。

この研究結果からも、少しの練習ですぐにコツをつかんで、できるようになる子がいる一方、練習してもなかなかできるようにならない子を、その双方の運動能力を育むことは重要な課題であると考ええる。

# 第1章 幼児の運動能力の現状

## 第1節 幼児の運動能力の現状

子どもの身体的な能力の低下が教育の場で課題になってから数十年が経過している。文部科学省平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等の調査結果によると男児は、立ち幅跳び、ソフトボール投げが平成20年度以来、最低の数値を記録したことを報告している。女児はソフトボール投げが男児と同様に平成20年度以来、最低の数値を記録した。反復横跳び・50m走は、平成20年度以来、最高値を示したことを報告している。(表1101)

小学校

表1101 平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果

男子

	握力 (kg)	上体起こし (回)	長座 体前屈 (cm)	反復横とび (点)	20m シャトルラン (回)	50m走 (秒)	立ち幅とび (cm)	ソフトボール 投げ (m)
平成27年度	16.45	19.58	33.05	41.60	51.64	9.37	151.27	22.51
平成26年度	16.55	19.56	32.87	41.61	51.67	9.38	151.71	22.89
平成25年度	16.64	19.54	32.73	41.42	51.40	9.38	152.09	23.18
平成24年度	16.71	19.44	32.59	41.59	51.60	9.36	152.36	23.77
平成22年度	16.91	19.28	32.58	41.47	51.28	9.38	153.45	25.23
平成21年度	16.96	19.28	32.55	40.81	50.06	9.37	153.66	25.41
平成20年度	17.01	19.12	32.68	40.99	49.39	9.39	153.96	25.39

女子

	握力 (kg)	上体起こし (回)	長座 体前屈 (cm)	反復横とび (点)	20m シャトルラン (回)	50m走 (秒)	立ち幅とび (cm)	ソフトボール 投げ (m)
平成27年度	16.05	18.41	37.45	39.56	40.70	9.62	144.80	13.76
平成26年度	16.09	18.26	37.22	39.37	40.30	9.63	144.79	13.89
平成25年度	16.14	18.06	36.89	39.07	39.67	9.64	144.59	13.92
平成24年度	16.23	17.93	36.70	39.24	39.95	9.63	144.94	14.21
平成22年度	16.37	17.75	36.79	39.18	39.68	9.65	145.28	14.55
平成21年度	16.34	17.65	36.64	38.49	38.74	9.64	145.14	14.61
平成20年度	16.45	17.63	36.64	38.77	38.72	9.64	145.77	14.85

※最高値はピンク、最低値はブルーで網掛けしている。  
 ※50m走は、値が小さいほど記録が優れている。

文部科学省 平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果より引用

内閣府の平成 25 年度子ども・若者白書にも「子どもの体力・運動能力をみると、新体力テストの合計点は過去 10 年間では、どの年代でもおおむね緩やかな上昇傾向となっている。50m 走やソフトボール投げ、ハンドボール投げといった基礎的運動能力は、この 10 年で横ばい、または向上傾向にあるものの、体力水準の高かった昭和 60 (1985) 年度と比較すると、総じてみれば依然として低い水準にある。」(p.6) としている。(第 1 部人口 第 2 章健康 第 1 節発育)

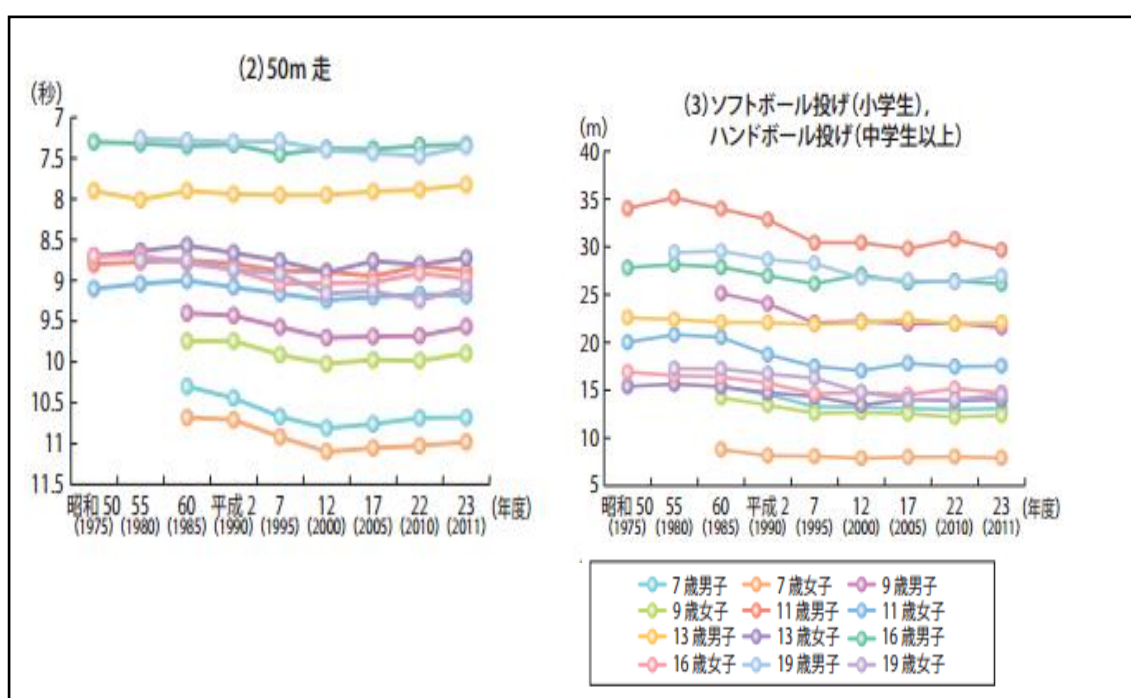


図 1101 新体力テスト 10 年間の推移(平成 25 年度子ども・若者白書より引用)

幼児の運動能力の現状について、日本学術会議提言「子どもを元気にするための運動・スポーツ推進体制の整備」(2008) は、次のように述べている。

「近年、子ども達の体格が大きくなっているのに反して、体力・運動能力は低下している。それは、体力・運動能力の個人差が広がって、より低いレベルにある子どもが増加したことによる。また、運動の基本となる動作パターンの発達が未熟な子どもが増えていることも指摘されている。しかし、運動やスポーツを実施する頻度の高い子ども達の体力・運動能力は低下せず、顕著な低下を示しているのは、実施頻度の少ない子ども達においてである。したがって、運

動・スポーツを実施することが、子どもの体力・運動能力の発達や維持に重要であることは明らかである。」(p.ii)と報告している。これは、子どもの運動能力の高い子どもと低い子どもの2極化を指摘している。

幼児期の体力運動能力測定は、文部科学省が小学生以上を対象に全国的に実施している「体力・運動能力調査」のように、全国共通の測定項目や実施方法が規定されていないため、幼児の体力・運動能力の比較検討が困難であるが、文部科学省による「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」には、「3年間、追跡できた幼児の事業参加年数による比較では、実践園における25m走、立ち幅跳び、ボール投げ、両足連続跳び越しにおいて、3年目が1年目を大きく上回る傾向が示された。」と報告している。(p.18)

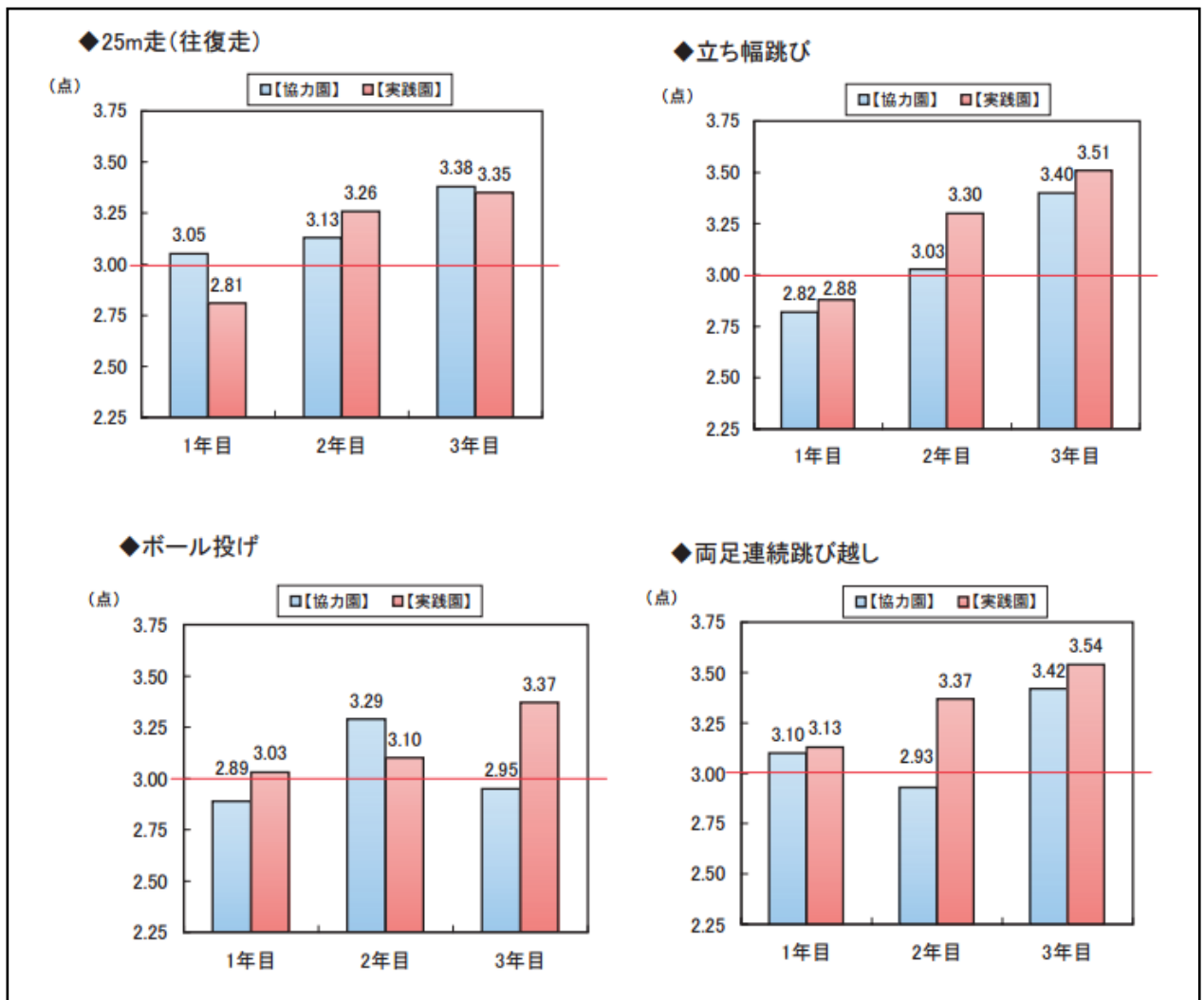


図 1102 文部科学省 体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書（2011）より

穂丸らは、1999年に4,233名、1989年に977名の3～6歳児を対象に愛知県において体格と幼児の運動能力の調査を行い、1969年に2,471名、1979年に4,092名、1969年に2471名を対象にした調査と比較検討を行っている。身長は5歳後半男児で1.1cm、体重は1.2kgの増加が見られ、体格が向上している。20m走や、立ち幅跳び、反復横跳びなどは、むしろ向上している。

一方、持久力を測定する懸垂やある程度の運動経験を要する投球能力・テニスボール投げ、片足立ちなどは大幅な低下傾向が見られた。更に定性的（課題が達成できるかどうかを判定する）運動能力として測定した逆上がり・テニス



ボール的当て・ボールけり・ボール受け・でんぐり返しは、全ての項目で能力の低下が見られたことを報告している。(p.136-139) 1969年から1999年の30年間の幼児の体力・運動能力の変化は、これらのデータから見ると、すべての項目について幼児の運動能力が低下しているとはいえない結果となっている。

一方、神奈川県教育委員会教育局スポーツ課は2006年～2009年の4年間に4回にわたり合計11,369名の幼児の運動能力測定を行った。2009年度測定結果によると、「神奈川県データにおける男女の立ち幅跳び、テニスボール投げ、両足連続跳び越しの記録は、森ら(2008)が示す全国平均値以上のレベルを示した。2009年度の神奈川県データ(新規園、継続園ともに)は、過去最高値を示している1986年と比較すると、これまでの3年間のデータと同様に男女児ともテニスボール投げは、劣っていたが立ち幅とびは有意に優れた値を示した。」「保護者によって『身のこなしがよい』と評価された幼児のTスコアは、『悪い』および『非常に悪い』と評価された幼児より全種目(25m走、立ち幅跳び、テニスボール投げ、両足連続跳び越し、後方ハイハイ走)において有意に高かった。」(p.10)つまり、幼児の体力・運動能力のすべてが低下しているわけではないが、「身のこなしの不器さ」といった幼児の運動能力の特徴の一端が伺える結果となっている。

【神奈川県幼児の体力・運動能力】

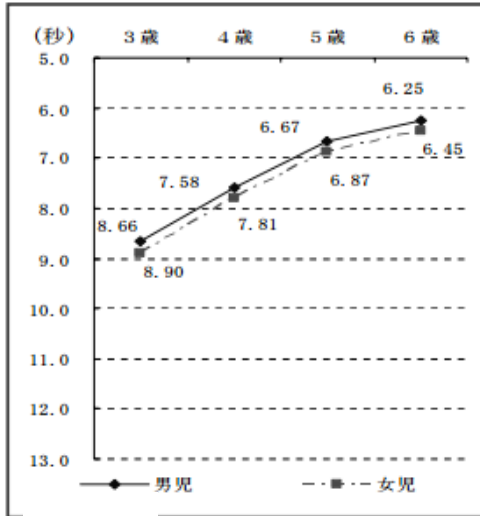


図 1103 25m走男女別平均値

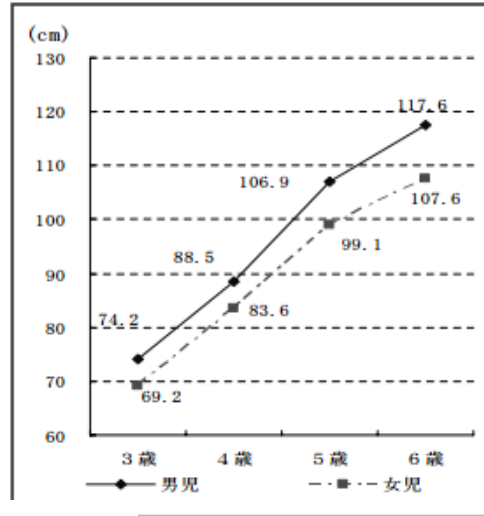


図 1104 立ち幅跳び男女別平均値

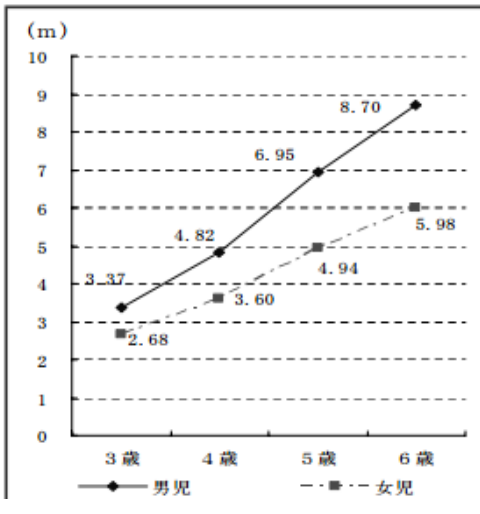


図 1105 テニスボール投げ男女別平均値

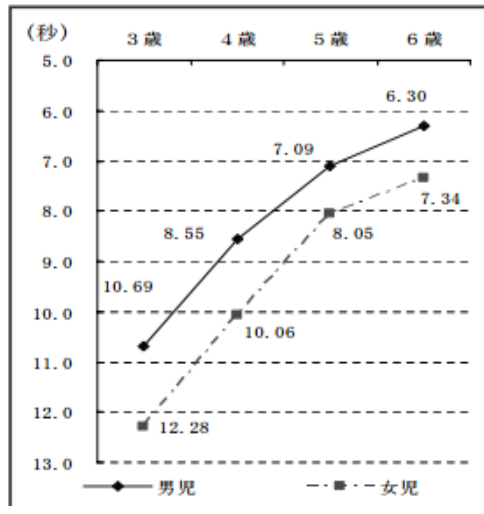


図 1106 後方4m走男女別平均値

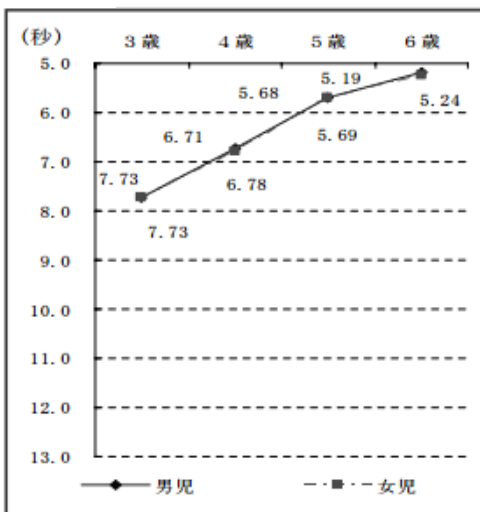


図 1107 両足連続跳び越し男女別平均値

神奈川県立体育センター研究発表会幼児の運動能力測定総括  
(2010) より

今まで述べてきた幼児の運動能力についての現状から、移動系の運動能力と操作系の運動能力の2軸により運動能力の類型化を図ることにした。

移動系の運動とは、幼児期運動指針によると「基本的な動きには、立つ、座る、寝転ぶ、起きる、回る、転がる、渡る、ぶら下がるなど『体のバランスをとる動き』や、歩く、走る、はねる、跳ぶ、登る、下りる、這う、よける、すべるなどの『体を移動する動き』、持つ、運ぶ、投げる、捕る、転がす、蹴る、積む、こぐ、掘る、押す、引くなどの『用具などを操作する動き』があります。」(p.8)とある。『体を移動する動き』を「移動系」とした。また、『用具などを操作する動き』を「操作系」とした。

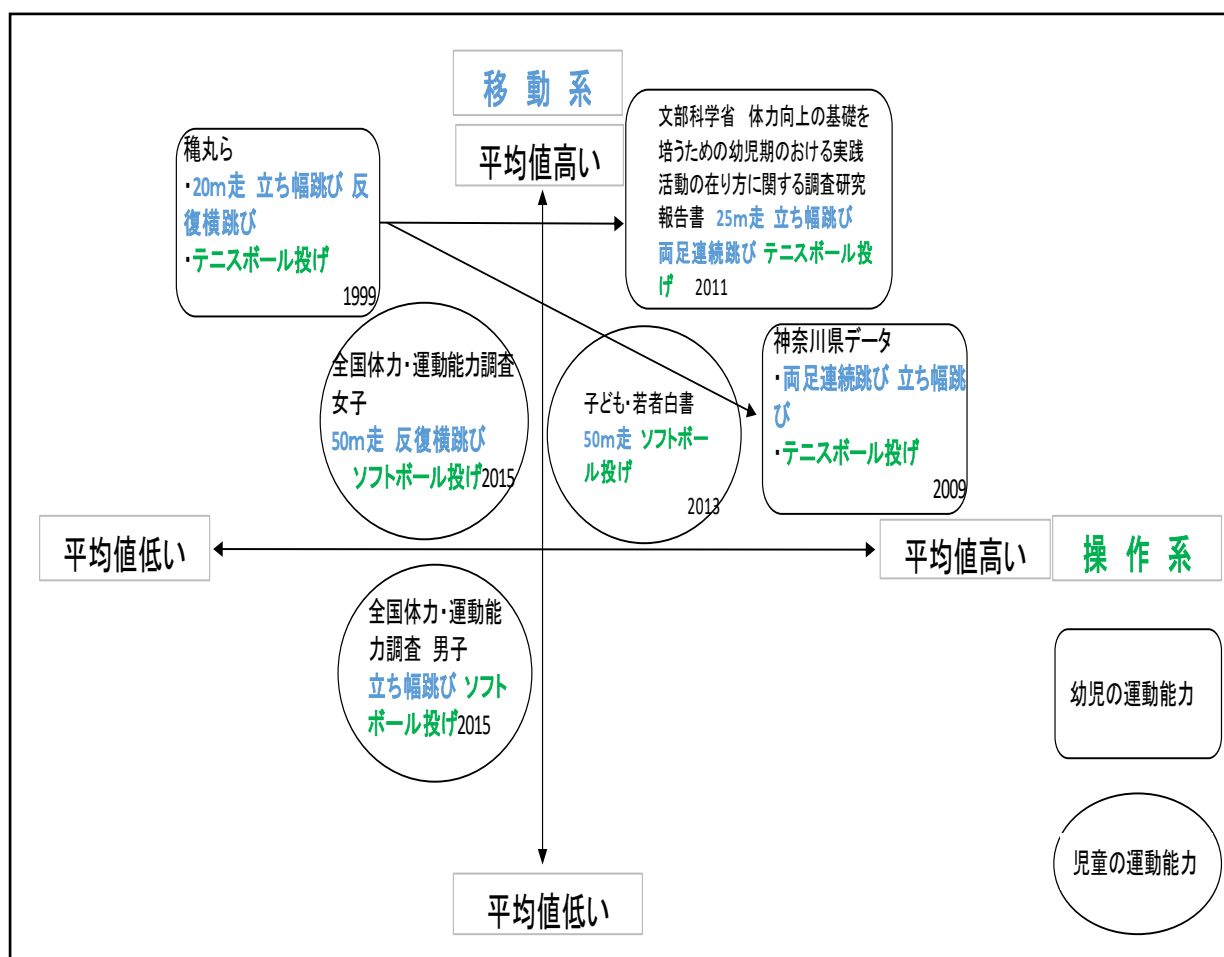


図 1108 幼児を含む運動能力の類型化

図 1108 の類型化によると、幼児は移動系の運動能力については低くはないことが示されている。操作能力（テニスボール投げ）については、種丸らの1999年調査では、低い結果となっているが、2009年神奈川県調査結果、2011

年文部科学省調査結果と経年変化をみると操作能力は高くなっていることが示されている。その成果には、次のような取り組みがあったことも一つの要因であると思われる。

「子どもを元気にする運動・スポーツの適正実施のための基本指針」(2008)には、「幼児を含む子どもの運動能力は、ピーク時に比べて依然として低いものの、関係者の努力によって、ここ数年の間に、保育所、幼稚園、小中高校等の教育機関や、国、地方自治体、民間団体等において、子どもの健康・体力向上のためのさまざまな取り組みが行われるようになり、その基盤となるエビデンスも増加しつつある」(p.ii)と記述されている。その取り組みの一つとして、文部科学省は、2007年～2009年の3年間、前述の幼児の体力向上実践事業「体力の向上の基礎を培うための幼児期における実践事業の在り方に関する調査研究(以後、文部科学省調査という。)」を全国規模で幼児の体力に関する現状把握とその対策を検討している。

その結果を基に、幼児期運動指針では次のように記述している。「前述の文部科学省調査では、外遊びをする時間が長い幼児ほど、体力が高い傾向にありましたが、4割を超える幼児の外遊びをする時間が1日1時間(60分)未満でした。」(p.10)(図1109参照)

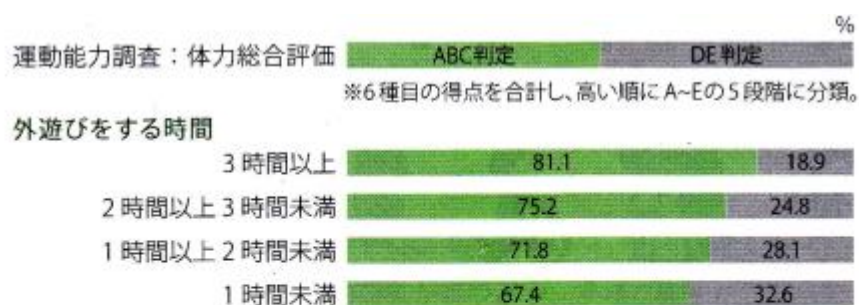


図1109 幼児の運動能力調査：体力総合評価

文部科学省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」(2011)より引用

このように調査研究を検討すると幼児の体力の現状は、様々な取り組みがなされるようになり、幼児の体力向上への意識は高まっている。しかし、幼児の運動能力の2極化や外遊びの現状からみると、幼児教育指針に示された通り、更

に体力向上への積極的な取り組みが欠かせない状況であることが示される結果となっている。

## 第2節 幼児の体力・運動能力に関わる環境

体力とは、中央教育審議会 2002（第24回）配布資料 資料5-2によると、「運動をするための体力とは、調整力、瞬発力、持久力などを要素とする運動をするための基礎となる身体的能力のことを指している・・・。」としている。これは、運動や労働を有効に進めていくための能力を示していると思われる。よって、体力は、体力テストで測定する項目に準じている。身長・体重などの身体的形態も含む場合がある。

次に、運動能力とは、小学校学習指導要領解説 体育編 p.10、2008年8月文部科学省によると、「運動に親しむ資質や能力とは、運動への関心や自ら運動をする意欲、仲間と仲よく運動をすること、各種の運動の楽しさや喜びを味わえるよう自ら考えたり工夫したりする力、運動の技能などを示している。」と記述されている。

よって、体力は、運動するための基礎的身体能力と考えられる。また、運動能力は走、跳、投といった体力に、運動やスポーツに必要な基本的なスキルを加味した能力を意味するとも考えられる。これらの知見を基に、本論文では、運動能力を体力も含め運動能力とするものである。

山下ら（2014）は、幼児の運動能力を体位・生活・環境との関連において検討し、研究結果として、「ボール投げの変化と園児の運動嗜好性（0.236、 $p < 0.05$ ）及び休日の運動習慣（0.223、 $p < 0.05$ ）には、正の相関がみられた。一方、25m走と立ち幅跳びの変化については、他の項目と相関関係は認められなかった。」「25m走（走能力）や立ち幅跳び（跳能力）の発達は生活習慣より、発育に伴う体位の変化や日常生活の活動量の増加に関連しているのに対し、ボール投げ（投能力）の発達はさらに運動を好み、園生活では行わないような運動あそびを休日に実施するという質的・量的に豊富な活動が関与していることが示された。」（p.29）と報告している。高德（2014）は、「日常的に様々な基本的動作を取り入れることで、各動作間の相互作用により、多様な動作の獲得が進むと推察される。」（p.29）と述べている。このように、走・跳運動能力

については、体位の向上や運動量が関係していると思われる。投能力については、普段の遊びでは経験しない、家庭での投運動の質と量が関係していることを示している。さらに、投運動については、投運動に係わる経験の有無が関係していることが示唆される結果となっている。

三村ら（(2009) は、幼児の接地足跡測定により、「25m 走と接地足跡の関係を見た結果、25m 走上位者の足裏には標準型（土踏まずが形成されている）が多く見られた。」（p.220）と報告されている。

上記の研究は、いずれも運動遊びによる多様な動きの獲得が、幼児の運動能力の向上に関わっていることを示している。

### 第3節 幼児の運動能力の構造

村瀬・出村（1990）は、「幼児の運動能力は、パワー、柔軟性、筋力、平衡性及び筋持久力の下位領域から構成されると考えられる。」（p.213）と述べている。

出村（1993）は、幼児の体力の構造も明らかにしている。「体格及び体力の11変量からなる相関行列に主因子解、ノーマル・バリマックス法による直交回転を施し、多因子解を求めた結果、全分散量の約81%を説明する4因子が解釈された。体格因子、協応性因子、平衡性因子、及びパワー因子の4つの因子である。」（p.347-348）としている。発育発達の間から幼児期（3歳から6歳）は、神経系発達が著しく、基本的運動能力習得時期であるとされている。よって、運動能力の発達変化が大きい時期といえることから、先の因子による幼児の運動能力構造は、幼児の運動能力の理解や測定に生かすことができる内容となっている。

### 第4節 幼児の運動能力評価・測定方法

郷司・出村（1992）は、移動型（後方歩き・180度方向転換・スキップ・台上登り）・操作系（テニスボール受け・テニスボール投げ・ドッジボール転がし）・安定型（両足爪先立ち・身体静止）の9項目による各領域別の運動成就組テストにより、運動能力の領域別の評価を作成している。「運動課題の判定基準を十分に把握し、幼児の日ごろの行動を注意深く観察すれば、実際に測定

を行わなくても彼らの運動能力をかなりの精度で推定しうる可能性がある。」

(p.132) と報告している。勝二・田村 (2011) らは、知的障害児における基本運動の発達に注目し、基本運動の段階的評価票の作成を行っている。レーダーサーチ様式の票により、児童の運動の実態が視覚的に分かる票を作成している。さらに、勝二 (2012) は、基本運動開始時期の段階表改訂版の作成を行っている。(p.66)

これらの評価により、幼児の個々の運動能力を把握することで、幼児の運動能力の特徴や課題を見出すことに繋がり、運動能力を育むための示唆を得ることができると思われる。

## 第5節 運動の自己評価

幼児の運動の自己評価については、次のような研究報告がある。

桜井ら (1985) は、先行研究をもとに幼児の自己評価を作成している。その尺度を、学習面の有能感・運動面の有能感・仲間からの受容感・母親からの受容感としている。さらに、面接時に幼児に提示する絵カードを作成している。

(p.54) その結果、「幼児は、自分のコンピテンスを単にある事物をするのが得意か否かという側面から考えている。」(p.58) ことを報告している。

河本 (1985) は、歯磨き行動において幼児の自己評価を行わせ、その効果について検証している。歯磨きの後、歯磨きの時間と磨いた歯の部位数について、3種類のはんこ (太陽を具現化した3種類の顔 ①笑っている顔 ②普通の顔 ③泣いている顔) を幼児に押させる調査を行っている。その結果、「自己評価によって、歯磨き時間と磨いた歯の部位数が増加した。(中略) この結果は、自己満足によって支えられていると考えられる。」(p.312) 「自己評価によって幼児の歯磨き行動の変容は可能であった。」(p.314) と報告している。このように、幼児に提示する行動基準や方法を工夫することにより、自己評価は可能であることを示唆していると思われる。

## 第6節 運動有能感・被受容感

運動有能感とは、岡沢ら (1996) によると、『身体的有能さの認知』『統制感』『受容感』の3因子から構成されている。『身体的有能さの認知』とは、

『自分はできる』という自信のことである。『統制感』とは、『がんばればできるようになる』という自信である。『受容感』とは、『みんなに受け入れられている』という自信である」と述べている。(p.148)

本論文では、被受容感とは、「受容感」「みんなに受け入れられている」という自信であると捉え、受け入れられるのは、幼児自身であるため、被受容感と読み替えている。

岡澤祥訓ら(1996)は、被受容感について、「体育授業においては、自己の運動有能感は、教師や周囲の友達に受容されることと大きく関係があると思われる。すなわち、運動能力や技能レベルに関わらず、すべての子どもたちは、教師や友達に肯定的に受容されることによって、運動有能感を高めることができると思われる。体育授業では、すべての子どもたちに運動有能感を感じとらせる必要がある。」(p.147)とし、被受容感と運動有能感との関係を示唆している。本論文では、被受容感は、運動能力に影響があることを検討するため、岡澤祥訓らの被受容感の項目を調査項目とした。本論文では、幼児が感じとる受容感という意味で、同じ内容であるが、岡澤祥訓らの「受容感」を「被受容感」と表現することとした。

岩崎ら(1992)は、運動能力と運動有能感・被受容感との相関を調べている。

その結果、全体では低い相関が認められた。しかし、年中児では認められず、年長児と女児に認められた。(中略)仲間からの受容感と運動能力の相関は認められなかったが大人からの受容感には認められた。」(p.252)と報告している。

岩崎ら(1998)は、運動有能感に関しては、「男女ともに年齢による有意な差は認められず、性差もなかった」としている。また、「5歳児後半の運動能力検査と運動有能感では、男児はすべての項目で、女児は25m走( $p < 0.05$ )の1種目と相関があった」と報告している。(p.584)

中澤ら(2009)の研究結果からは、「男児は運動能力と受容感との相関がみられたが運動有能感との相関は見られなかった。女児は運動能力と有能感・受容感共相関は見られなかった」と報告している。(p.141表6)

このように先行研究においては、結果に相違が見られる結果となっている。これは、先行研究の自己評価についての方法に相違が見られるためではないかと思われる。



岩崎(1998)は、運動が上手に行われている絵・行われていない絵、3 コマの絵が組になっているものを使用する研究、中澤ら (2009) は、「2 枚 1 組の図版を用いて、それぞれの絵の下に大小 2 つの円が書かれており、最初の絵を選択し、その上でその程度を円の大きさで選択できるようになっており、この 2 段階により 4 段階評定を行うことができる。」(p.139)としている。この方法の違いが、幼児の自己評価に影響したのではないかと思われる。本研究では、この先行研究を踏まえて、自己評価の方法を更に検討したいと考えている。

## 第2章 運動能力についての教育・保育の4つの考え方

### 第2節 小学校学習指導要領 体育科の目標の転換

#### 1. 昭和43年学習指導要領について

友添（2002）は、「運動による教育」について次のように述べている。「体育科では、1958年要領で教科の系統を運動技術と捉え、基礎的運動能力や運動技能の向上をめざす技能的目標が強調されるようになった。」「1958年要領の基礎的運動能力は基礎体力と理解され、1968年要領では、総則の第三で、学校教育活動全体を通じて体力の向上を図ることがうたわれる。と同時に『体力づくり』をめざす体力的目標を吸収し、技能的目標、社会的目標に先立って重点目標として強調された。」（p.41～43）としている。つまり「運動による教育」とは、運動を通じて体力、運動能力や社会的態度の育成を図るものであると考えられる。表2101には、指導要領の具体的な指導内容について「体力の向上」「運動の仕方や技能を習得」「公正な態度を育成し、進んできまりを守り、互いに協力して自己の責任を果たす」といった系統主義により、効率的に技能を身につけさせ、その結果、体力の向上が図られ、運動能力や社会的態度の育成を図るという目標が示されていることが分かる。

「体力の向上」「運動のしかたや技能を習得」という記述から、系統主義により効率的に技能を身につけ、その結果、体力の向上が図られ、社会的態度の育成を図るという目標が明らかにされている。系統性、できる体育への傾向が強いと思われる。

#### 2. 昭和52年学習指導要領について

「運動の教育」とは、友添（2002）によれば、「楽しさを重視した目標は、1970年代以降始まった工業化社会から脱工業化社会への転換により、人々の生活を大きく変えると同時に、スポーツが社会や文化の重要な一領域として認知される契機を生み出した。具体的には、ヨーロッパを中心に始まった『スポーツ・フォー・オール』運動は、スポーツや運動を健康のためだけでなく、生涯の楽しみとして享受すべきとする生涯スポーツの理念に結実していく。」（p.41～43）と述べている。

このようなスポーツや運動への人々の需要の変化は、運動を手段として用いる『運動による教育』から運動やスポーツそれ自体の価値を承認する『運動・スポーツの教育』への体育概念の転換をもたらし、この転換は、日本の要領にも大きく反映されていった。」(p.41～43)としている。

「運動の教育」は、運動に親しむこと、運動の楽しさを知ることなどが強調され、さらに、一人一人の子ども能力に応じて学習ができるよう、個を大切に学習指導が重要視されるようになったと考えられる。表 2101 によると

「運動に親しませる」あるいは、5, 6 年生の学年の目標に運動の楽しさという表現が加えられた。「各種の運動の楽しさを体得するとともに、その特性に応じた技能を養い、体力を高める。」という表現があり、運動の持つ特性に触れ、運動を楽しむことが目標として挙げられている。長谷川(2015)は、「この体育のとらえ方は、『楽しい体育』論と呼ばれ、昭和 52 年学習指導要領では、体力や運動技能の目標、社会的目標は、従来同様に重視されながらも運動に対する愛好的態度や生涯スポーツを志向することが、より重要な目標として設定された。」としている。

上記の通り、昭和 43 年学習指導要領と昭和 52 年学習指導要領には違いが認められる。「運動による教育」は、系統主義により、効率的に運動技能を高めることを目標にした。その結果、体力の向上や社会的態度の育成が図られるとしているのに対して、昭和 52 年学習指導要領では、「運動の教育」として、運動の持つ特性に触れ、運動の楽しさを味わうことを目標としている。

表 2101 昭和 43 年・52 年学習指導要領の比較

	昭和 43 年学習指導要領 体育	昭和 52 年学習指導要領 体育
目標	<p><u>適切な運動の経験や心身の健康について</u>の理解を通して、健康の増進と<u>体力の向上を</u>図るとともに、健康で安全な生活を営む態度を育てる。</p> <p>このため、</p> <p>1 <u>運動を適切に行わせること</u>によって、<u>強健な身体を育成し、体力の向上を</u>図る。</p> <p>2 <u>運動のしかたや技能を習得</u>させ、<u>運動に親しむ習慣を</u>育て、生活を健全にし、明るくする態度を養う。</p> <p>3 <u>運動やゲームを通じて、情緒を安定させ、公正な態度を育成し、進んできまりを守り、互いに協力して自己の責任を果たす</u>などの社会生活に必要な能力と態度を養う。</p> <p>4 <u>健康・安全に留意して運動を行う能力と態度を</u>養い、さらに、健康の保持増進についての初歩的知識を習得させ、健康で安全な生活を営むために必要な能力と態度を養う。</p>	<p>適切な運動の経験を通して<u>運動に親しませるとともに</u>、身近な生活における健康・安全について理解させ、健康の増進及び<u>体力の向上を</u>図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。</p> <p>※5, 6 年生の学年の目標に運動の楽しさという表現が加えられた。</p> <p>[第 6 学年]</p> <p>1.目標</p> <p>(1) 各種の<u>運動の楽しさ</u>を体得するとともに、その特性に応じた技能を養い、体力を高める。</p>

(下線、筆者)

## 第2節 幼稚園教育要領「健康」の目標の転換

### 1. 昭和39年幼稚園教育要領「健康」

昭和39年幼稚園教育要領「健康」の領域では、ねらいとして次のものが挙げられている。

表 2201 昭和39年・平成元年幼稚園教育要領「健康」ねらいの比較

	昭和39年幼稚園教育要領「健康」	平成元年幼稚園教育要領「健康」
ね ら い	健康な生活に必要な習慣や態度を身に付ける いろいろな運動に興味をもち、進んで行うようにする 安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける	「ねらい」 <u>明るく伸び伸びと行動し充実感を味わう</u> 自分の身体を十分に動かし、 <u>進んで運動しようとする</u> 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける

(下線、筆者)

昭和39年幼稚園教育要領の「教育課程の編成」には、「幼稚園における望ましい幼児の経験や活動を選択し配列して、適切な指導ができるように配慮しなければならない。」と記述されている。保育者は、幼児に対して幼児の経験や活動を組織し、あらかじめ教育の在り方を設定し、各領域が示す「ねらい」から経験や活動を保育者が選択し配列する事、そして、保育者が選択し配列したものを行わせることによってねらいに迫ることを示唆している。このように昭和39年幼稚園教育要領は、石垣ら(2002)によると、「『望ましい経験や活動の選択と配列』という表現は、昭和31年幼稚園教育要領の『望ましい経験の組織』よりも系統主義の特徴を一層明確にしているといえます。」(p.22-23)とし、系統主義の考え方が反映されている事を示唆している。

望ましい経験や活動の内容については、「健康」を例にとり、表2202に示した。

表 2202 昭和 39 年・平成元年幼稚園教育要領「健康」内容の比較

内容	昭和 39 年幼稚園教育要領「健康」	平成元年幼稚園教育要領「健康」
	<p>いろいろな方法で、<u>歩く、走る、とぶ</u>などの運動をして遊ぶ</p> <p>いろいろな方法で、<u>投げる、押す、引く、あるいはころがる</u>などの運動をして遊ぶ</p> <p><u>かけっこ、とびっこ、なげっこ、ならびっこ</u>などして遊ぶ</p> <p><u>鬼遊び</u>など集団遊びをする</p> <p><u>すべり台、ぶらんこ</u>などで遊ぶ</p> <p><u>ボール、綱、箱車</u>などを使って遊ぶ</p> <p><u>のびのびとリズムカル</u>に運動する</p> <p>いろいろな運動器具の<u>使い方を</u>知り、<u>くふうして</u>使い、<u>またあとかたづけ</u>をする</p> <p><u>だれとでも仲良くし、きまりを守</u>って遊ぶ</p> <p>「これらの事項の指導にあたっては、<u>幼児の興味や能力</u>に応じて、<u>地域や季節</u>などを考慮して<u>いろいろな種類の運動</u>を<u>のびのびと積極的</u>に行わせ、<u>身体諸機能の調整的発達</u>を促すとともに、<u>運動能力を高め</u>、また、<u>社会生活に必要な態度の芽ばえ</u>をつちかうようにすること</p>	<p>「内容」</p> <p>先生や生徒と<u>触れ合い</u>、<u>安定感</u>をもって行動する</p> <p>いろいろな遊びの中で<u>十分に体を動かす</u></p> <p><u>進んで戸外</u>で遊ぶ</p> <p>様々な活動に<u>親しみ、楽しんで</u>取り組む</p> <p>健康な生活のリズムを身につける</p>

(下線、筆者)

このように昭和 39 年幼稚園教育要領は、幼児が様々な運動や運動遊びを通じて培うべき能力の具体的な内容を提示している。よって、これらの内容を選択し、配列することにより運動能力を育むことが保育者として考慮すべきこと

になっている。

## 2. 平成元年幼稚園教育要領

平成元年に改定された教育要領には「幼稚園教育の基本」として「環境を通して行われるものである。」と示された。「ねらい」と「内容」が示され、「ねらい」は幼稚園教育で培うべき「心情、意欲、態度」を示し、「内容」は「ねらい」に迫るための指導事項であると考えられる。それまでの6領域であった「ねらい」と「内容」が「幼児の発達の側面」により、5領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」に変更された。「健康」のねらいは表 2201 に示したものである。

「健康」領域には、表 2202 に示した通り、運動の内容について、具体的記述は提示されていない。昭和 39 年幼稚園教育要領における教育課程編成では「望ましい経験や活動を選択し配列すること」とされていたが、平成元年幼稚園教育要領では「活動は教師が選択して与えるものではなく、幼児が自ら環境に関わって生み出していくものである。」また、環境構成においても、昭和 39 年幼稚園教育要領には「幼児に与えたい活動を教師が選択し、その活動を行うためにどのような環境を用意するのが課題」とされていたが、平成元年幼稚園教育要領では「ある特定の活動を想定してその活動がうまく展開するためのものではない」としている。石垣ら（2002）は、平成元年幼稚園教育要領について次のように述べている。「①環境の構成が保育者の最も重要な役割であること、②具体的な活動の選択と展開は環境との関わりを通して幼児が主体的に行うものであること、③心情・意欲・態度を培う事が幼稚園教育の具体的な目標であることを強調している点に特徴があります。これらは保育の過程における『主体的契機』を基本的に重視しているものであり、『児童中心主義』の特徴を表しているといつてよいでしょう。」(p.24-25) この二つの幼稚園教育要領には、系統主義的教育から児童中心主義への大きな転換があることがわかる。

小学校指導要領、幼稚園教育要領ともある時点を境に、教える側が系統的に指導内容を選択し、配列することから、幼児・児童が主体的に運動課題に取り組む方向へと転換されていることが分かる。

### 第3節 幼児の運動能力類型化

#### 1. 目的

幼児の運動能力に関わる先行研究において、その研究内容から幼児の運動能力をどのように捉えているかについて、小学校学習指導要領の検討から、できる体育（運動による教育）・楽しい体育（運動の教育）という視座を得た。また、幼稚園教育要領から系統性と主体性という視座を得た。この2つの視座に基づいて、いくつかの、幼児に関わると思われる運動の捉え方・考え方について類型化することを目的とした。類型化することにより、様々な幼児に関する運動能力についての考え方の特徴を捉え、比較することができると考えた。

#### 2. できる体育（図2301の中では「a」と表記）

「運動による教育」とは、運動を通じて体力の育成、運動能力や社会的態度を図るものであると考えられる。効率的に技能を身につけ、その結果、体力の向上が図られ、社会的態度の育成を図るという目標が示されている体育

#### 3. 楽しい体育（図2301の中では「b」と表記）

「運動の教育」は、運動に親しむこと、運動の楽しさを知ることなどが強調され、運動の持つ特性に触れ、運動を楽しむことが目標として挙げられている体育

以下の系統性・主体性の項目については石垣（2002）を参考にしている。（p.4-7）

#### 4. 系統性（図2301の中では「K」と表記）

系統性については、子どもの系統的な発達を重要視し、教育内容を系統的に配列し、社会の知識、技術を伝える考えから、子ども発達段階に即して順序良く効果的、効率的に教育内容を伝える考え方



5. 主体性（図 2301 の中では「S」と表記）

子どもの側から考えるという立場から、あらゆる種類の生活や遊び経験を取り入れた子どもの自己活動であり、子どもの興味・関心を元に子どもの内発的動機付けが重視される考え方

6. 類型化の 4 つの区分

幼児の運動能力の考え方、捉え方は、上記の①系統性・主体性、②できる体育・楽しい体育の 2 軸で 4 つの類型となった。その 4 つの類型について、その内容から各類型を次のように名称をつけ、区分することとした。

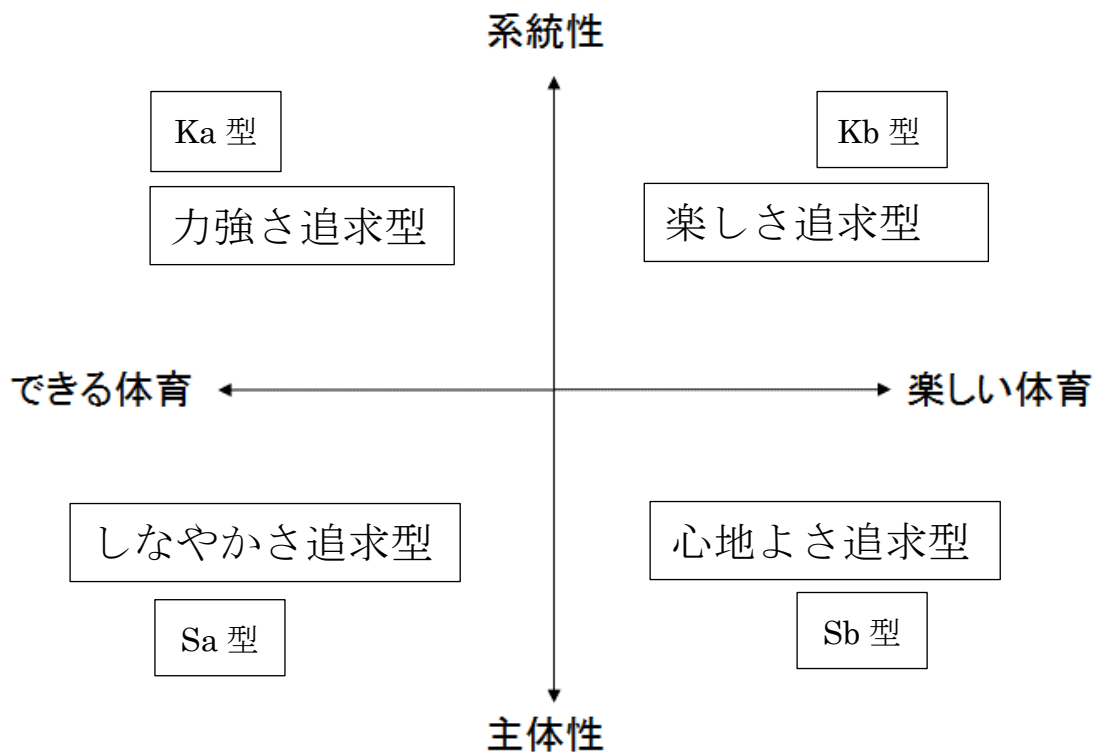


図 2301 幼児の運動能力の類型

## 第4節 力強さ追求型

### 1. 小林寛道の研究内容「幼児の発達運動学」

小林（1990）は、幼児の運動能力向上の手立てという点からみると、心拍数を例にとり、「強い運動刺激を一日のうち数回は、短時間で良いので身体が経験することが必要である」（p.196）と述べ運動生理学の観点から、運動量の確保や、適切なアドバイスが幼児の運動能力の向上に影響すると述べている。

「ほんの少し走り方を教えるだけで、子どもたちの走フォームは、驚くほど改善される場合があります。（p.285）とし、幼児に指導することによる運動能力の効果を述べている。

幼児の身体の発達については、運動生理学の観点から心拍数・肺活量・最大酸素摂取量などを用いて運動能力を捉えている。幼児の運動指導については、幼児の有酸素運動の観点から「大人のように疲労感を持たず、動き続けられるような体の機能があるということは、この時期大いに動くことが必要ですよ、という発育段階のステージを象徴するものと考えられます。」としている。幼児がどのような運動をどの程度行うべきかについて述べている。例えば、持久走についての記述は、次の通りである。「5分間走の走行中には、最高心拍数の98%を越える高い心拍水準が4分間にわたって持続していることが分かる。」という記述がある。心拍数を基準に持久能力を測り、その結果を生かすことを示唆している。その他にも肺活量、最大酸素摂取量といった基準を使って幼児の運動能力を検討している。この小林の考えは、「幼児運動指針」にも生かされている。文部科学省「幼児運動指針ガイドブック」（2014）の幼児期における運動の意義「(1) 体力・運動能力の基礎を培う・姿勢を維持し体を支える力や運動を続ける能力が向上する」の項目に「日頃から体を動かすことは、結果として緩やかに持久力や心肺機能を高めることにもつながります。力いっぱい体を動かして遊んだり、続けて体を動かして遊んだりする中で、筋力や持久力を発達に対する適度な刺激を与えることが大切です。」（p.14）という記述がある。

## 2. 柳沢プログラム

柳澤（2007）は、「子どもが楽しく運動に親しめるよう、遊びの中に段階を追った指導を取り入れて行っております。そして、跳び箱や鉄棒といった「出来る」「出来ない」がハッキリと分かる課題をクリアすることで、子どもは達成感を感じて次の課題へ自主的にチャレンジしていくのです。」（p.3）と述べ、運動教材を系統的に指導していくことについて述べている。

### 第5節 たのしさ追求型

高橋（1994）は、体育の目標を構造化し、楽しい体育に必要な3つの目標を挙げている。体育の具体的目標を、技能目標（上手になる）、認識目標（わかる）、社会的行動目標（守る・かかわる）とし、その上で情意目標（楽しさ体験）に繋がることを示している。高橋は「情意目標（楽しさ体験）は重視されなければならない。しかし、これは常に目指すべき方向目標であっても、中心的な学習になりえない。中心的で具体的な内容になるのは、運動技術であり、これに関連した社会的行動や認識である。」と述べている。現在もこの考えは体育学習に大きな影響を与えていると思われる。運動目標の項目としては、学び方、楽しさ、技能、社会的態度の4つが挙げられる。それらの項目としては、以下の通りである。（表 2501 授業評価診断基準）

昭和53年小学校学習指導要領の運動に関する内容については、この楽しさ追求型に含まれると思われる。

表 2501 授業評価診断基準（高橋健夫「体育の授業を創る」 p 235 より引用）

項目名	5	4	3	2	1
Q1 楽しく勉強	3.000～2.740	2.739～2.632	2.631～2.416	2.415～2.308	2.307～1.000
Q2 明るい雰囲気	3.000～2.565	2.564～2.450	2.449～2.221	2.220～2.107	2.106～1.000
Q3 丈夫な体	3.000～2.857	2.856～2.771	2.770～2.600	2.599～2.515	2.514～1.000
Q4 精一杯の運動	3.000～2.689	2.688～2.583	2.582～2.372	2.371～2.267	2.266～1.000
Q5 心理的充足	3.000～2.797	2.796～2.710	2.709～2.537	2.536～2.451	2.450～1.000
たのしむ (情意目標)	15.000～13.487	13.486～13.065	13.064～12.221	12.220～11.799	11.798～5.000
Q6 工夫して勉強	3.000～2.369	2.368～2.244	2.243～1.995	1.994～1.871	1.870～1.000
Q7 他人を参考	3.000～2.680	2.679～2.577	2.576～2.372	2.371～2.270	2.269～1.000
Q8 めあてを持つ	3.000～2.194	2.193～2.049	2.048～1.759	1.758～1.614	1.613～1.000
Q9 時間外練習	3.000～2.347	2.346～2.137	2.136～1.718	1.717～1.509	1.508～1.000
Q10 友人・先生の励まし	3.000～2.484	2.483～2.344	2.343～2.064	2.063～1.924	1.923～1.000
学び方 (思考・判断)	15.000～11.737	11.736～11.183	11.182～10.076	10.075～9.523	9.522～5.000
Q11 運動の有能感	3.000～2.086	2.085～2.001	2.000～1.832	1.831～1.748	1.749～1.000
Q12 できる自信	3.000～2.437	2.436～2.338	2.337～2.141	2.140～2.043	2.042～1.000
Q13 自発的運動	3.000～2.428	2.427～2.333	2.332～2.144	2.143～2.050	2.049～1.000
Q14 授業前の気持ち	3.000～2.517	2.516～2.399	2.398～2.163	2.162～2.045	2.044～1.000
Q15 いろいろの運動の上達	3.000～2.622	2.621～2.524	2.523～2.328	2.327～2.230	2.229～1.000
できる (運動目標)	15.000～11.881	11.880～11.490	11.489～10.709	10.708～10.319	10.318～5.000
Q16 自分勝手	3.000～2.545	2.544～2.450	2.449～2.261	2.260～2.167	2.166～1.000
Q17 約束ごとを守る	3.000～2.798	2.797～2.709	2.708～2.532	2.531～2.444	2.443～1.000
Q18 先生の話聞く	3.000～2.703	2.702～2.598	2.597～2.388	2.387～2.283	2.282～1.000
Q19 ルールを守る	3.000～2.892	2.891～2.824	2.823～2.688	2.687～2.620	2.619～1.000
Q20 勝つための手段	3.000～2.921	2.920～2.838	2.837～2.673	2.672～2.591	2.590～1.000
まもる (社会的行動目標)	15.000～13.707	13.706～13.343	13.342～12.616	12.615～12.253	12.252～5.000
合計得点	60.000～50.309	50.308～48.830	48.829～45.873	45.872～44.395	44.394～20.000

数値については、各項目に児童が（はい・どちらでもない・いいえ）に回答しはい3点、どちらでもない2点、いいえ1点と配点し、その平均値を上記の表にあてはめ、5から1の得点化にするものである。

## 第6節 しなやかさ追求型

### 1. 小学校学習指導要領 体づくり運動「体ほぐし」

文部科学省（2013）「小学校保健教育参考資料『生きる力』を育む小学校保健教育の手引き」には次のように体ほぐしの運動の目標について記述されている。

#### 目標

・体ほぐしの運動は、いろいろな手軽な運動や律動的な運動を行い、体を動かす楽しさや心地よさを味わうことによって、自分の体の状態に気付き、体の調子を整えたり、仲間と豊かに交流したりする運動である。

（下線 著者）

学校体育実技資料「体づくり運動」第7集には、「手軽な運動や律動的（リズムカル）な運動を行い、体を動かす楽しさや心地よさを味わうことによって、自分の体の状態に気付き、体の調子を整えたり、仲間と豊かに交流したりすることができることをねらいとして行われる運動です。特に心や体の変化への気付きを大切にします。」としている。（p.18 -20）（平成12年 文部省）

体への気付きとは、自分の体によって感じ取っているものを教師が意図的に子どもに気付かせることである。また、一緒に運動をする仲間の息づかいや表情等から、仲間の体の様子にも気付かせることができる運動である。

学習指導要領低学年の「体ほぐし」の運動内容には、「心と体の変化に気付く」とある。体を動かすと気持ちがよいことや、力いっぱい動くと汗が出たり心臓の鼓動が激しくなったりすることなどに気付くことである。」としている。

「体の調子を整えるとは、運動を通して、日常生活での身のこなしや体の調子を整えるとともに、心の状態も軽やかにすることである。」と記述されている。さらに、教科の目標には、「心と体を一体としてとらえ」という表現がある。心身とも健全な発達のためには、心と体を一体として捉え、体ほぐしの運動によって、心の健康が運動と密接に関連していることなどを理解することを示していると考えられる。体ほぐし運動は、体づくり運動「心と体の関係に気づくこと、体の調子を整えること、仲間と交流したり、体力を高めたりするために行われる運動である。」（文部科学省 小学校学習指導要領解説 体育編

p.13)とあり、運動能力には、筋肉の緊張のみではなく、自分の心と体に気づくことが必要であることを述べていると思われる。

## 2. つるまき体操

天野（2000）は、つるまき体操の原則として次の4点を挙げている。

### (1) リラックスの感覚

「体を解放することが、人間のすべての働き（精神も）にとって絶対に必要な前提条件です。（中略）情報の受け入れ、伝達、反応には、筋力の緊張が少なく力を抜いて解放された液体的な状態の感覚が、生きている人間の“基礎感覚”として実に重要です。」（p.16）

### (2) イメージ

「解放されたからだは、イメージによって集中統一されて動きます。イメージは、からだの動きの『いのち』です。」（p.17）運動するにあたって、どのように動くのかを自分が第三者の目で見られる、そのような意識の必要性を述べている。

### (3) バランス能力

「動きの原動力は『重力+筋力』が基本です。筋力を主動力として使わないことによって、人間の動きにとって重要なきっかけや微調整のための専念できます。」（p. 17）呼吸・タイミングを生かした泳ぎを例にとって説明がなされている。力を抜くことをきっかけにして、浮く、沈むときにキックをする。このように脱力すること（重力に身を任せる感覚）を運動の起点としている。

### (4) リズム

『はじめにリズムありき』すべての動きはリズム運動であるといえます。（中略）人間のからだと生活（言語）がリズムを生み、リズムを育てます。」（p.18）リズムを自分の外に置かず、自分の身体の中にあることを述べている。このように従来の運動が筋肉の緊張を強いる部分があることを否定してはいないが、それにとらわれない運動能力の方向性を示している点が、体ほぐし運動と共通している。また、体ほぐし運動と比較すると、リズムについての記述があることが注目される点である。

## 第7節 ここちよさ追求型

### 1. 原田碩三の研究内容

原田（1997）は、幼児への「快の支援」を行い園児との信頼関係を構築して彼らの情緒を安定させることから始めた。」（p.154）とし、快の支援として次の4点を挙げている。

- (1) 行動の四禁 動かない、近づかない 手や口をださない 背を向けない
- (2) 言葉の四禁 指示・命令・禁止・二者択一をしない
- (3) 四上手 観察・聞き・共感・誘導と引き下がり上手
- (4) 四つの喜び 活動した・伸びた・考えた・みんなでやった

原田（1997）は「保育者が動いていたのでは、観察できないだけでなく、園児の助長を不安定にし、群を崩壊させる。保育者が1.5m以内に近づくと、園児が圧迫感を持ち、群れができないとか群れが崩壊するだけでなく、園児が見えない。」（p.155）と述べている。さらに、「幼児との信頼関係を築き、幼児の心の安定を図り、園児が仲間をつくり、仲間と遊んで身体的機能を発達させ（中略）リーダーを中心に活発な役割あそびが展開されていくのを辛抱強く待つ。」（p.171）とし、積極的に子どもに関わるのではなく、観察することにより、幼児の心を安定させ、幼児との信頼関係を優先している。幼児の主体性を重要視していると思われる。運動能力については、体格と連動させ、20m走、立ち幅跳び、硬式テニスボール投げを例示している。

### 2. 幼児期運動指針

文部科学省 幼児期運動指針普及用パンフレットには、次のように記述されている。「この指針は、運動習慣の基盤作りを通じて、幼児期に必要な多様な動きの獲得や体力・運動能力の基礎を培うとともに、様々な活動への意欲や社会性、創造性などを育むことを目指すものです。幼児にとっての運動は、楽しく体を動かす遊びを中心に行うことが大切です。また、体を動かすことには、散歩や手伝いなど生活の中での様々な動きを含めます」（p.1）としている。様々な活動への意欲や社会性、創造性などを育むことは、幼児の主体性を目標としていると思われる。

## 第8節 まとめと本論文の視点

これまで本論文で扱った幼児に関わる運動能力について、幼児の運動能力の類型化を用いて、系統性と主体性、できる体育と楽しい体育を軸に、整理・区分を行い、そこから本論文の幼児の運動能力の視点を明らかにしたいと考えた。各運動の考え方について、「図 2301 幼児の運動能力の類型化」に、それぞれの運動能力の考え方、捉え方を整理して分類したものが「図 2801 幼児の運動能力類型化Ⅱ」である。

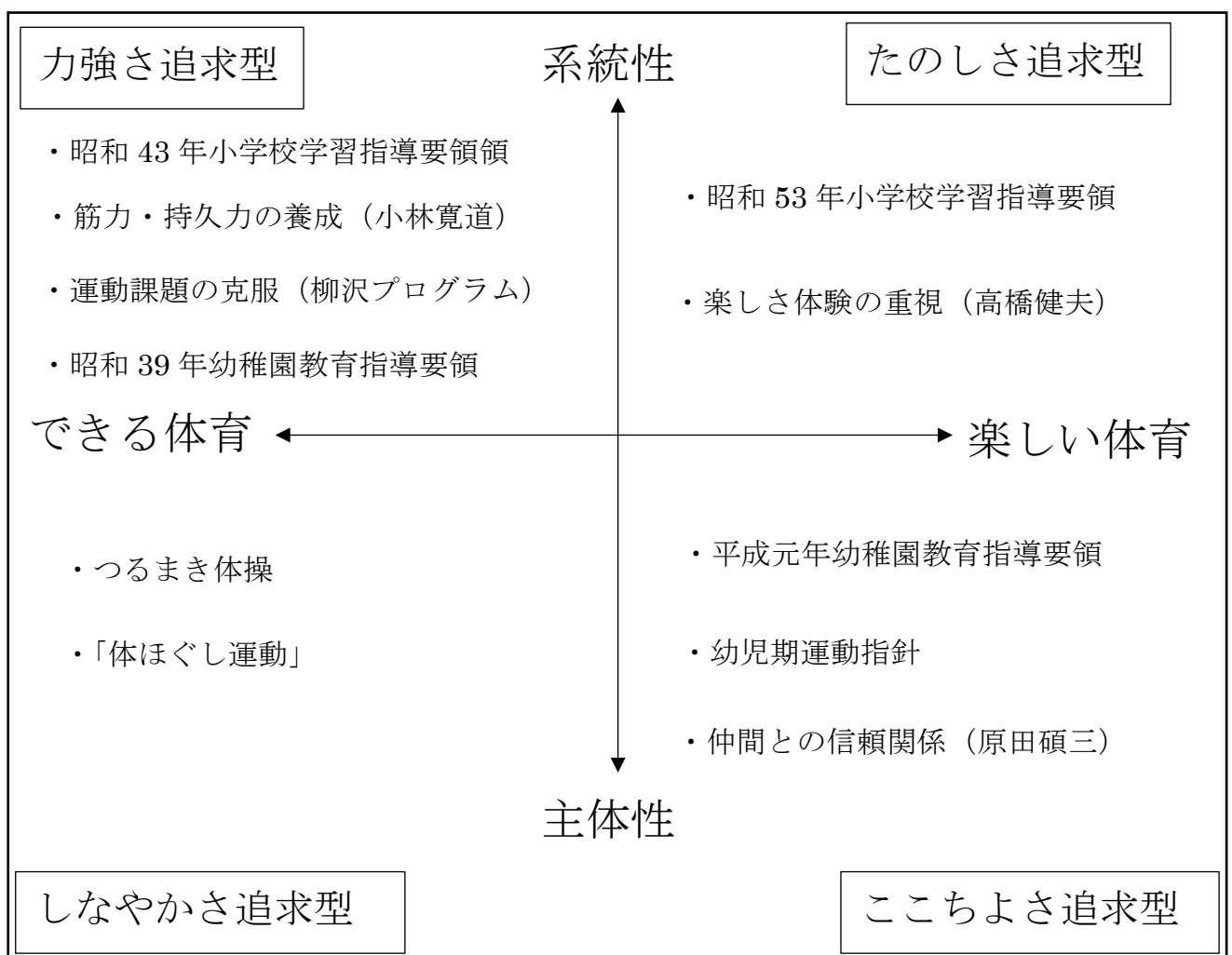


図 2801 幼児の運動能力類型化Ⅱ

それぞれの運動能力と考え方、捉え方の意図を著者が判断し、各類型に配置した。明確に区分できない部分や重複するものもあるが、敢えて 4 類型に配置したものである。上記の各類型をまとめると次のようになる。（表 2801）



表 2801 運動の類型化区分の名称

型	名称	内 容
Ka型	力強さ追求型	保育者は子どもの身体各部分の目に見える外的な行動とその技能の系統的な指導を追求する型 投げる運動では、手や腕の動き、体重の移動を含む足のステップの動きの指導を追及する考え方
Kb型	楽しさ追求型	身体活動や技能よりも子どもの活動での楽しさを重視する型 保育者が子どもの成長に必要と考える活動に導き、楽しさに重点をおく考え方
Sb型	しなやかさ追求型	子どもが持つ身体観が土台となり、子どもの運動能力が育つという型 幼児がリラックスし、イメージを持ち、柔軟に動いているという感覚の育ちが軸となる考え方
Sa型	こちよさ追求型	子どもの自発的な身体活動を育てることをもとにする型 保育者の緩やかな支援の下、幼児同士が群れる中で自発的な運動をすることにより、運動能力を高めていくという考え方。

## 第9節 運動能力についての新たな方向 内なるリズム

運動課題に応じて、それぞれ運動課題には、独自のリズムがある。三木（2009）は、リズムが人間にいかに関与しているかについて、次のように述べている。「リズムの現象は、新たな視野の下で性の根源的形象として見直され、静のダイナミズムを貫く原理として注目されている。」（p.18）「我々は、それを意識するまでもなく、リズム性に深く浸透された世界を生きている。寄せては返す渚の小波、潮の満ち引き、四季の変遷といった自然界のリズム、人間・動物・植物の成長曲線、心臓の鼓動と呼吸の波動、覚醒と睡眠の交替（日周リズム）、病の時節的な到来といった生命体のリズム、あるいは音響、形態、色彩のリズム、日常生活における調子の波の繰り返し、ライフサイクルの変遷、さらには文化や歴史の基層に脈動し続けるリズムなど」（p.18）と人を取り巻く様々なリズムの存在を指摘し、人へのリズムの影響の大きさを指摘している。

三木（2005）は、「どんな運動でも、あるまとまりをもつ動きには、その動き固有のリズムというものを持っています。たとえ循環運動の動きであったと

しても、走るリズム、泳ぐリズム、なわとびのリズムなど、そこにも異なる動きのリズムを感じ取ることができます。非循環運動でも、ボールを投げるリズム、けるリズム、回転をするリズムなど、それぞれ固有の動きのリズムが生み出されます。この固有の動きのリズムをよく観察すると、それぞれに動きの基本リズムというものがあることが分かります。」と運動のリズムについて述べている。(p.98)

運動に取り組む際、スムーズにその運動に取り組むことができる子どもがいる一方、なかなかその運動ができない、あるいは取り組むことができない子どもがいることは事実である。同じ運動であっても、運動する様子は、子どもそれぞれによって異なっている。そのリズムが異なる要因は、体力・筋力・経験値など様々な要素が考えられるが、ヒトには固有のリズムがあることを三木は述べていると思われる。

清水(1996)は、「大脳の辺縁系では、多くの場合、リズムを用いて情報を処理するのですが、まずこの辺縁系が先に動き出してから、新皮質が働くという構造になっているようです。辺縁系での処理は、単純な処理なので処理速度が速い。それに対して本当に深い部分、いわば頭を使わない、より身体的な動きというものには、辺縁系が処理するリズムを基調とした脳の働きが大きく関わっているのではないかと考えています。」(p.177) 清水は、リズムが人間の活動の本源にあり、それは大脳の、より原始的な部分に因るものであることを示唆している。本来、人間にはリズムに基づいた身体的活動があると思われる。

このような自分の中に本来備わっているリズムは、本論文では、子どもそれぞれが持つリズムであり、外的な様々な行動に表れる。この外的なリズムを内なるリズムと定義することとする。

## 第3章 本論文の課題と方向

### 第1節 本論文の課題

幼児の運動能力の考え方・捉え方の類型化を行うことにより、力強さ追求型・たのしさ追求型・ここちよさ追求型・しなやかさ追求型の4つに類型を設定した。これらは、幼児の運動能力を育むという点から、できる体育・楽しい体育の2者択一、系統的重視・主体的重視の2者択一であるかのように思われる。あるいは、正反対の考え方であるかのように捉えられている。しかし、幼児の運動能力を育む観点から各類型の内容をみると、それぞれの類型は、幼児の運動能力を育む重要な内容を含んでいることが分かる。力強さ追求型は、系統的に運動を捉え、目標への段階的課題が明らかにされている。たのしさ追求型は、運動の持つ楽しさに触れることにより、幼児がより意欲的に運動に取り組もうとする意欲を喚起することができる。ここちよさ追求型は、幼児の思いや発達段階を踏まえて、幼児同士の関係や保育者との信頼関係を培うことにより幼児の運動能力を育むことができる。しなやかさ追求型は、幼児が運動するイメージを持つこと、他者の運動しているイメージを意識することにより、どのように動いたらよいのかが分かり、運動能力を育むことに繋がっていく。このように、それぞれの類型の持つ幼児の運動能力を育む内容を生かす視点はないのだろうか。本論では、内なるリズムが、これらを生かす視点としての可能性を持つのではないかと考えている。この点を本論文の課題として、研究を進めることとする。

### 第2節 本論文の目的

幼児の運動能力を育むためにどのような視点で運動能力を捉えればよいのか、更に、幼児が運動能力を育むためには、保育者はどのように関わっていくのかについて検討を加える。力強さ追求型・たのしさ追求型・ここちよさ追求型・しなやかさ追求型の4つの幼児の運動の考え方・捉え方の類型化に基づき、幼児の運動能力との関連を調査する。その結果を踏まえて、内なるリズムの幼児の運動能力を育む可能性について検討を加えることを目的とした。さらに、その結果を踏まえて、幼児の運動能力を育む運動プログラムの試案を提案する。

### 第3節 本論文の仮説

幼児の運動の類型化により示された運動の捉え方・考え方について、それぞれ幼児の運動能力との関連を検討する。

#### 1. 力強さ追求型により幼児の運動能力を育む可能性がある。

力強さ追求型は、系統的に幼児の運動能力を捉えている。力強さ追求型は、今までの蓄積されたデータがあり、それに基づいて、幼児一人一人の運動能力の個性を捉えることができる。そのため、幼児の運動能力についての課題が明らかになり、保育者の課題克服への支援により力強さ追求型は、運動能力を育む可能性があると思われる。

#### 2. たのしさ追求型により幼児の運動能力を育む可能性がある。

たのしさ追求型は、運動の楽しさに幼児が触れることの重要性を示している。よって、情意的な内容である、幼児の運動への自信（運動有能感）・被受容感（認められること）と運動能力の関連、幼児の運動の好き嫌いとの関連を調査することにより、たのしさ追求型による幼児の運動能力を育む可能性を検討する。

#### 3. しなやかさ追求型・こちよさ追求型により幼児の運動能力を育む可能性がある。

しなやかさ追求型では、幼児が運動へのイメージを持つことやこちよさ追求型では、主体的に運動に取り組むことが重要であると示されている。

よって、ラダー運動を実施し、幼児に様々なステップを経験させ、運動のイメージを持たせることにより、しなやかさ追求型と運動能力を育む可能性を検討する。また、ラダー運動の環境を整えて、幼児が主体的に運動に取り組めるように環境を整えることにより、幼児が主体的にラダー運動に取り組む環境を整えることにより、こちよさ追求型と運動能力を育む可能性を検討する。このように、ラダー運動の取り組みにより、しなやかさ追求型・こちよさ追求型の2つの型について幼児の運動能力を育む可能性を検討することとする。

## 第4章 幼児の運動能力と運動有能感・被受容感の関連（調査Ⅰ）

### 第1節 調査Ⅰの研究の目的

調査Ⅰでは、幼児の運動能力と幼児の自己評価（運動有能感・被受容感）との関連を検討した。先行研究では、運動能力と自己評価の関連については、結果が様々である。

幼児の運動能力と運動有能感については、中澤ら(2009)は、実際の運動能力2種目（ドリブル・ケンケン）と運動有能感・被受容感との相関を研究している。その結果、男児は被受容感と運動能力の相関を認めている。女児は実際の運動能力との関連は認められなかったことを報告している。また、実際の運動能力の高低群比較・運動有能感の高低群比較においては、有意な差が見られたことを報告している。

岩崎ら(2006)は運動能力（走・跳・投）と運動有能感・被受容感との相関を調べている。その結果、「運動有能感と運動能力との相関を見ると、全体では低い相関が認められた。」としている。また、「25m 走は年長児・年中児・男児・女児ともに、それぞれの有能感、被受容感との相関がみられた。」と報告している。また、岩崎らは「5歳児後半の男児は、運動能力と運動有能感に相関が見られ、女児は25m 走のみ相関が見られた。」と報告している。川田ら(2011)は、年長児前半を対象に調査を行い、「運動能力調査項目5項目中4項目について運動有能感との相関が見られた。」と報告している。この様に、先行研究調査結果については、運動能力と運動有能感の関連についての結果に相違がある。

運動能力の項目内容は、走・跳・投の基本的運動能力を検討の項目とした。自己評価は、運動有能感及び、被受容感を検討の項目とした。また、調査Ⅰでは、運動有能感にリズム感の関連要因としてスキップを加えた。

調査Ⅰの目的は、自己評価（運動有能感・被受容感）が運動に対する自信と捉え、運動有能感・被受容感と幼児の運動能力との関連を検討することにより、運動の類型化・たのしさ追求型により、幼児の運動能力が育まれる可能性について検討を加えることである。

## 第2節 量的運動能力基準・質的運動能力基準

### 1. 量的運動能力基準

中村ら(2011)は、運動能力を評価する方法として以下の方法を提示している。

- (1) 運動能力を、運動能力テストのパフォーマンスにより量的に評価する方法
- (2) 運動課題を設定し、その達成数をとらえて、達成度を評価する方法
- (3) 動作様式の質的な変容過程を、観察的に評価する方法 (p.2)

(1)、(2) の評価方法は量的・度数を用いて評価することにより、多くの先行研究・資料と比較でき、幼児の現状や今後の方針などの方向性を明らかにできる有用性がある。一方、幼児の体格的な要因により運動の動作様式(運動の仕方)に関わらず、量的な優劣が決まることもあると思われる。運動能力については、前述した通り、量的運動能力と質的運動能力がある。量的運動能力基準とは従来の運動能力テストに代表されるメートル・秒などの単位による評価基準である。運動能力を測る基準としては有効である。比較資料も多く、個人の能力を評価するために有益であるが、その基準は個体差、身長、体重などが反映されやすく、フォームが優れていても量的評価基準では評価されない面がある。また、量的評価では、どこに課題があるかを保育者は見極めることが難しい点があると思われる。

### 2. 質的運動能力基準

質的運動能力基準は、運動の発達に着目し、運動の一連の動きにおいてポイントとなる評価基準を明示し、現在の幼児の発達段階を評価するものである。質的運動能力基準によれば、現段階の幼児の発達段階を踏まえて、より合理的なフォームに近づけるためにはどのような課題があるかについて保育者が知ることが出来る。質的運動能力基準についての研究は、中野ら(1993)、中村ら(2011)、文部科学省(2011)「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」がある。質的運動能力については、佐々木ら(2014)の研究がある。更に、文部科学省委託事業「子どもの発達段階に応じた体力向上プログラムの普及啓発」には、教育現場への質的運動能力評価についての普及を目的とした「アクティブ チャイルド プログラム」が日本体育協会より発行されている。ここには走・投・跳の3種目について動画を

元に評価ができるように記述されている。

金・松浦（1988）は、運動能力の量的変化と質的变化の関連を検討している。走・跳・投運動については関連が高いと報告している。幼児の運動の発達を正確に捉えるには両面からの検討が必要であることを指摘している。

有能さについて Harter（1978）は、「有能さの認知とは、子どもが有能になろうとするなかで、自主的に乗り越えようとし、よりよく行動しようとする内発的動機づけと深い関係があり、（中略）子どもが内発的に動機づけられれば動機づけられるほど、子どもの有能感は大きくなると思われる。」と述べている。岡澤祥訓ら（1996）は、研究対象を小学生から大学生とし、運動有能感は身体的な優位さとしての「身体的有能さの認知」だけではなく、「統制感」「被受容感」の三因子で構成されていることを明らかにしている。本論文においては、「身体的有能さの認知」岡澤らの言う「被受容感」について検討を加えている。統制感について、Harter&Pike は言及していない。本稿では、研究対象が年長児であり、一部の幼児は統制感を意識していることも考えられるが、全員への調査項目とはなりにくい項目であると考え、調査項目には加えなかった。

### 第3節 調査Iの仮説

幼児の運動能力の類型化・たのしさ追求型と幼児の運動能力との関連を調査することを目的とする。運動有能感・被受容感は、運動能力への自信や他者から認められることに繋がっている。よって、運動有能感・被受容感と幼児の運動能力との関連を調査することにより、たのしさ追求型が幼児の運動能力を育む可能性について実証的に検討する。

仮説：幼児の運動有能感・被受容感と幼児の運動能力は関連があり、たのしさ追求型により、幼児の運動能力が育まれる可能性がある。

## 第4節 調査Iの研究方法

先行研究では運動能力と運動有能感・被受容感について、相関によりその関連を検討してきた。そこで、運動能力と運動有能感・被受容感について、一部、その関連が明らかにされてきた。

本論文では、 $\chi^2$ 検定により、運動能力と運動有能感・被受容感の関連をより明らかにしたい。さらに、重回帰分析により、運動能力と運動有能感・被受容感の関連を検討する。

### 1. 予備調査について

(1)調査対象：調査対象児：大阪市内A幼稚園年長児 11名（男児 6名、女児 5名）

倫理面に関する配慮として、保護者に対し、用紙に研究の趣旨を提示し、この調査への協力は自由であること、調査結果は研究のみに使用されること、保護者より特に申し出がなければ、同意とみなされることを説明する文書を配布した。調査においては、対象校の園長と教職員の同意を得て実施した。

(2)調査時期：2014年7月18日

(3)調査方法

①運動能力調査 A幼稚園、園年間行事の一環として5月に実施

②運動有能感調査・被受容感調査共に、個人面接にて7月18日に実施

(4)調査内容

①運動能力調査文部科学省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書 運動能力調査 調査実施要領」(p.98-105)に準じて行った。

・25m走

・両足連続跳び越し

・立ち幅跳び

・ボール投げ

②運動有能感調査項目（4項目）

・鉄棒が上手にできる

・速く走ることができる



- ・ボールを上手に投げることができる
- ・スキップが上手にできる

岡沢哲子（1996）によって作成された 2 因子 10 項目（p.68）から運動遊びの 4 項目を採用した。岡沢の縄跳びの項目は、リズム感を問う項目として、スキップ（Harter、S.&Pike R（1984）による論文中にある項目）に変更した。縄跳びは、幼児の得意という判断に個人差がある。リズムや技能に差があっても、得意と答える可能性があると思われる。スキップはできる、できないについての判断が、幼児本人にも判断しやすく、得意・得意でないについて判断しやすいと思われる。よって、縄跳びの項目をスキップに変更した。

#### ③被受容感調査（3 項目）

- ・先生ががんばれと応援してくれる
- ・友だちががんばれと応援してくれる
- ・友だちがあそぼうとってくれる

被受容感については、岡澤祥訓ら（1996）の「被受容感」の研究結果を参考にした。岡澤ら（1998）による

と、被受容感は「運動場面で教師や仲間から自分が受け入れられていれているという認知」（p.148）と述べている。本稿では、運動場面が研究対象となっている。よって、同じく岡澤ら（1996）「運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究」のなかで被受容感の因子分析により、負荷率の最も高い「友だちがあそぼうとってくれる」を選択した。さらに教師から自分が受け入れられているについては「先生ががんばれと応援してくれる」、仲間から受け入れられているについては「友だちががんばれと応援してくれる」を調査項目とした。

調査項目に関しては、必要最小限の項目数とし、調査対象児への負担を軽くすることを心がけた。

#### ④調査における図版について

運動有能感・被受容感調査は、調査者が作成した図版を用いて実施した。この図版は 2 枚を一組（図 4401）として、その下に大小の二つの円が描かれて

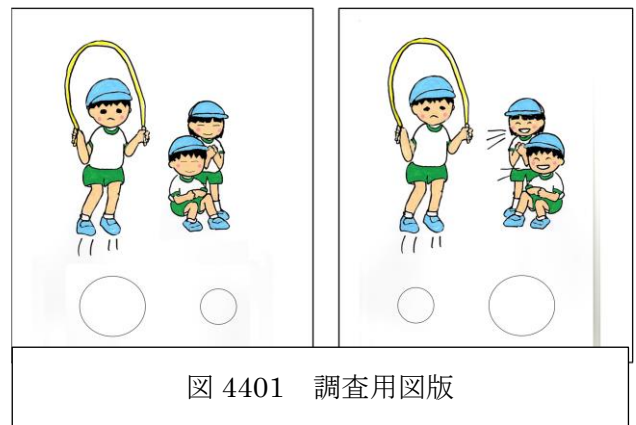


図 4401 調査用図版

いる。調査対象児はまず、自分に合った絵を選び、その後、円の大小を選択する。図 4401 は被受容感「友だちが応援してくれる」の図版である。

#### (5) 予備調査結果

この調査に先立ち、前年度に予備調査を行った。

その結果は以下の通りである。

- ・男児は、「運動能力 25m走」と「友だちからの励まし」に相関がある。
- ・女児は、運動能力「ボール投げ」を除いて、運動能力と被受容感について相関がある。

運動能力についての男児上位群・下位群の比較については、運動有能感・被受容感とも関連は見られなかった。この結果については、男児は運動能力と比較して、運動有能感が高いためであると思われる。

女児は高い運動能力を示しており、運動能力について女児上位群・下位群の比較については、運動能力高低位群における運動有能感の差が有意であった。同様に被受容感の差も有意であった。

#### (6) 本調査に向けて

以下の点について考慮し、本調査を実施した。

- ①調査対象幼児の人数を増加。(11名から153名に増加)
- ②有能感、被受容感の質問については、描画を調査対象児に提示せず、口頭で質問をする。予備調査では、描画を調査対象幼児に示して有能感・被受容感について質問した。しかし、この運動有能感調査は、調査対象児が調査実施時、最初に説明を受け、絵の解釈をし、質問項目を考え、自己を振り返って考えるという操作が回答までに伴っている。予備調査の質問方法は、調査対象児には煩雑な作業があり、回答が難しいのではないかという印象を得たため変更した。

## 2. 本調査について

### (1) 調査対象

調査対象児：合計年長児 145 名（男児 72 名、女児 73 名）

H 県西部子ども園 1 園、O 府北部の保育所 1 所、子ども園 2 園 計 1 所 3 園  
倫理面に関する配慮として、用紙に研究の趣旨を提示し、この調査への協力は自由であること、調査結果は研究にのみ使用されること、同意しない場合、

調査用紙の同意しない旨を記述し提出を求めた。期限までに同意しない文書の提出がない場合は、調査に協力するとみなされることを明示する保護者対象の文書を配布した。調査においては、対象校の園長と教職員の同意を得て実施した。

(2) 調査時期：2015年7月から8月

(3) 調査方法

①運動能力調査 ・各園所で、園年間行事の一環として5月から7月に実施

②運動有能感調査・被受容感調査共に、調査対象児への個人面接にて7月中旬に実施

(4) 調査内容

①運動能力調査 文部科学省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書 運動能力調査 調査実施要領」(p.98-105)に準じて行った。

調査項目については予備調査に同じ

②質問内容の理解判定について

描画を使わず、口頭での質問形式に変更したため、言葉による内容理解が出来るかどうかについて設問を設定した。口頭で話をして、その内容についての2枚の絵より、適切な絵を選択させるものである。

③調査の実際

ラポール形成後、調査者は「今日はこれからここにある絵を使って私とゲームをしましょう。このゲームは「お話はどっちの絵かな」というゲームです。私はこれから〇〇さん（調査対象児）に絵を見せます。これからお話しするのは、どちらの絵のことですか？分かったら教えてください。『犬は猫より大きいです。』どちらの絵ですか？」

④運動有能感調査（4項目）

調査項目については予備調査に同じ

⑤運動有能感調査例（この調査については、個別面談調査を実施。被験者の回答は2回の2件法・・・1回目は得意か得意でないかを選択し、次にその回答について、その程度や頻度を選択する。）

「〇〇さんは今、運動場を走っています。走るのは得意ですか？得意ではない

ですか？」

1.得意と答えた場合、「とても得意ですか。まあまあ得意ですか？」と質問した。

2.得意ではないと答えた場合、「全然得意ではないですか、少しは得意ですか？」と質問した。同様に、他の項目の聞き取りを行い、その答えに応じて得点化を行った。

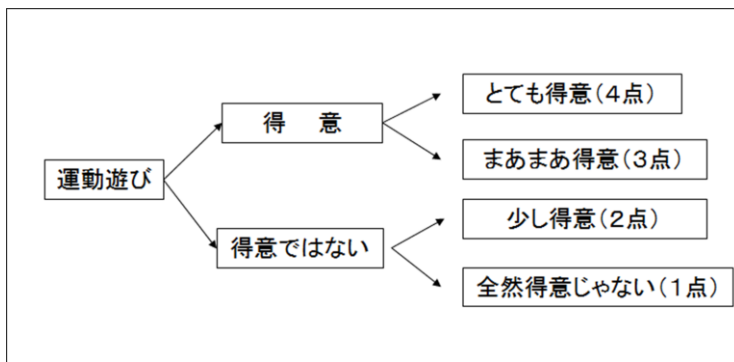


図 4402 2回2件法の構造図

上記の質問様式は、吉田ら（1998）の質問様式を参考に設定した。

⑥被受容感調査（3項目）

項目・得点については予備調査に同じ。

⑦被受容感調査例（この調査については、個別面談調査を行った。）

調査の具体例は予備調査に同じ

得点については予備調査に同じ

調査項目に関しては、必要最小限の項目数とし、調査対象児への負担を軽くすることを心がけた。

## 第5節 結果

### 1. 運動能力・運動有能感・被受容感の得点について

調査対象児全体と男女別の運動能力・運動有能感・被受容感各得点の平均値、標準偏差（SD）を表 4501 に示す。

表 4501 については、横軸は、運動能力・運動有能感・被受容感それぞれの得点の平均・標準偏差（SD）を示している。縦軸は、調査対象児全体（男女）・男児・女児の区分を示している。

区分	運動能力 (最大得点 25点)		運動有能感 (最大得点 16点)		被受容感 (最大得点 12点)	
	平均点	SD	平均点	SD	平均点	SD
全体	3.095	0.93	3.217	0.875	3.197	0.759
男児	2.979	0.91	3.256	0.851	3.251	0.808
女児	3.214	0.95	3.177	0.897	3.143	0.702

### 2. 運動能力高低群による運動有能感・被受容感の平均値について

	運動能力	運動有能感(平均)				被受容感(平均)			
		走る	鉄棒	ボール投げ	スキップ	友声援	先生声援	友遊ぼう	
高群	n=人 割合(%)	99 68	3.44	3.18	2.96	3.59	3.26	3.12	3.37
低群	n=人 割合(%)	46 32							

表 4502 の縦軸は「運動能力の高低群」を示している。運動能力の高低群は対象児全員の各種目（25m走・幅跳び・両足連続とび・ボール投げ・体支持）の運動能力の得点を合計し、平均値（3.11）を算出した。その平均値を基準に高低群に分けた。（運動能力の評価については、文部科学省「幼児の運動能力調査の得点表」による。）

横軸は、運動有能感下位尺度（走る・鉄棒・ボール投げ・スキップ）・被受容感下位尺度（友だちの声援・先生からの声援・友だちからの遊ぼうの声掛け）について運動能力高低群に分け、その平均値を示した。

運動能力高低群により、運動有能感、被受容感を比較すると、運動有能感の

下位尺度（走る・鉄棒・ボール投げ・スキップ）は、高群の平均値が低群より高くなっているが、被受容感（友だちからの遊ぼう）については、運動能力高群の平均値（3.37）が、低群の平均値（3.38）より低くなっている。

### 3. 男児・女児の運動能力と有能感・被受容感との相関について

表 4503 は、相関係数を示している。縦軸は運動能力・運動有能感・被受容感の順である。横軸は縦軸に準じている。

表4503 運動能力 運動有能感 被受容感 順位相関行列

	25m走	ボール投	両足連続体支持	幅跳び	走る	鉄棒	ボール投	スキップ	友声援	先生声援	友遊ぼう	
25m走	1.0000	0.3949	0.4204	0.3529	0.5157	0.1181	-0.0100	-0.0646	0.0381	0.1370	0.0311	-0.0807
ボール投げ	0.3949	1.0000	0.4100	0.1594	0.3753	0.1896	0.1616	-0.0877	0.0330	0.0911	0.0759	0.0684
両足連続跳び	0.4204	0.4100	1.0000	0.2940	0.3759	0.2150	0.1117	0.0679	0.0773	0.1301	0.0811	0.1599
体支持	0.3529	0.1594	0.2940	1.0000	0.3540	-0.0097	-0.0095	-0.0050	-0.0047	0.0371	-0.0463	-0.1344
幅跳び	0.5157	0.3753	0.3759	0.3540	1.0000	0.3612	0.0079	0.0646	0.1822	0.1288	0.0082	0.0131
走る	0.1181	0.1896	0.2150	-0.0097	0.3612	1.0000	0.1347	0.2929	0.3543	0.2661	0.0360	0.2895
鉄棒	-0.0100	0.1616	0.1117	-0.0095	0.0079	0.1347	1.0000	0.0045	0.1755	-0.0316	0.0533	0.0673
ボール投げ	-0.0646	-0.0877	0.0679	-0.0050	0.0646	0.2929	0.0045	1.0000	0.0768	0.3493	0.1449	0.2495
スキップ	0.0381	0.0330	0.0773	-0.0047	0.1822	0.3543	0.1755	0.0768	1.0000	0.1317	0.0042	0.2342
友声援	0.1370	0.0911	0.1301	0.0371	0.1288	0.2661	-0.0316	0.3493	0.1317	1.0000	0.3263	0.2936
先生声援	0.0311	0.0759	0.0811	-0.0463	0.0082	0.0360	0.0533	0.1449	0.0042	0.3263	1.0000	0.1783
友遊ぼう	-0.0807	0.0684	0.1599	-0.1344	0.0131	0.2895	0.0673	0.2495	0.2342	0.2936	0.1783	1.0000

表4504 順位相関係数の検定 [上三角:P値/下三角:\*P<0.05 \*\*P<0.01]

	25m走	ボール投	両足連続体支持	幅跳び	走る	鉄棒	ボール投	スキップ	友声援	先生声援	友遊ぼう	
25m走	-	0.0000	0.0000	0.0000	0.0000	0.1617	0.9064	0.4447	0.6523	0.1040	0.7134	0.3395
ボール投げ	**	-	0.0000	0.0600	0.0000	0.0238	0.0547	0.2991	0.6969	0.2808	0.3693	0.4189
両足連続跳び	**	**	-	0.0012	0.0000	0.0188	0.2263	0.4630	0.4036	0.1585	0.3809	0.0825
体支持	**	**	**	-	0.0001	0.9087	0.9110	0.9526	0.9556	0.6609	0.5846	0.1109
幅跳び	**	**	**	**	-	0.0001	0.9314	0.4834	0.0465	0.1610	0.9291	0.8873
走る	*	*	*	**	**	-	0.1063	0.0004	0.0000	0.0012	0.6671	0.0004
鉄棒				**	**	-	0.9571	0.0347	0.0347	0.7063	0.5239	0.4215
ボール投げ				*	**	**	-	0.3583	0.0000	0.0821	0.0025	0.0025
スキップ				*	**	*	*	-	0.1144	0.9596	0.0046	0.0046
友声援				**	**	**	**	**	-	0.0001	0.0003	0.0003
先生声援				**	**	**	**	**	**	-	0.0319	0.0319
友遊ぼう				**	**	**	**	**	**	**	*	-

表 4504 は、順位相関係数の検定結果、p 値の有意差（：\*p<0.05 \*\*、p<0.01）を示している。

表 4503、4504 より、運動能力と他の変数（運動有能感、被受容感）については、相関係数によると「ボール投げ」と「走る」、「両足連続とび」と「走る」、「幅跳び」と「走る」、「幅跳び」と「スキップ」に相関が見られる。被受容感については相関がみられなかった。

### 3. $\chi^2$ 検定結果

表4505 全対象児 運動能力の高低群と運動有能感・被受容感高低群比較

		運動能力			P値
		低群(人)	高群(人)	合計(人)	
運動有能感 「走る」	低群	11	8	19	0.0086 **
	高群	35	91	126	
「鉄棒」	低群	10	24	34	0.7406
	高群	36	75	111	
「ボール」	低群	15	30	45	0.780
	高群	31	69	100	
「スキップ」	低群	7	8	15	0.1891
	高群	39	91	130	
被受容感					
「友声援」	低群	5	13	18	0.7007
	高群	41	86	127	
「先生声援」	低群	9	17	26	0.7266
	高群	37	82	119	
「友遊ぼう」	低群	6	5	11	0.0907
	高群	40	92	132	

\*: P<0.05 \*\*: P<0.01

相関係数により、一部、運動能力と運動有能感に相関がみられた。さらに、対象児全体、男女別に分けて  $\chi^2$  検定を行い、運動能力への関連のある運動有能感・被受容感の再検討を行った。

運動能力の高低群と運動有能感得点の高低群、被受容感得点の高低群との比較を行い、運動能力との関連を検討した。表 4505 は、運動有能感、被受容感と運動能力との関連について  $\chi^2$  検定を行い、その結果について示したもので



ある。横軸は、幼児の運動能力を 5 尺度で評価し、その評価に基づいて高低 2 群に区分した。運動能力の高低群は、対象児全員の運動能力得点（25m 走、幅跳び、両足連続跳び、ボール投げ、体支持）を合計し、その平均値（3.11）を基準に高低群に分けた。（運動能力の評価については、文部科学省「幼児の運動能力調査の得点表」により算出したものである。縦軸は、幼児の運動有能感・被受容感について 4 尺度で自己評価したものである。運動有能感、被受容感については 4 尺度になっており、その得点の 1、2 点と 3、4 点に分け、1、2 点を低群、3、4 点を高群とした。

$\chi^2$  検定の結果、（表 4505）によると運動能力と運動有能感の「走る」では、高低群間の差が有意であった。相関係数の検討からも運動有能感「走る」は相関がみられたことより、運動能力への関連が示唆される結果となった。これ以外、運動能力と運動有能感、被受容感について  $\chi^2$  検定による高低群間の有意な差は見られなかった。

**表4506 男児 運動能力の高低群と運動有能感・被受容感高低群比較**

運動有能感		運動能力			P値
		低群(人)	高群(人)	合計(人)	
「走る」	低群	7	2	9	0.0142 *
	高群	22	41	63	
「鉄棒」	低群	8	13	21	0.8085
	高群	21	30	51	
「ボール」	低群	5	9	14	0.6981
	高群	24	34	58	
「スキップ」	低群	2	4	6	0.7172
	高群	27	39	66	
被受容感					
「友声援」	低群	5	6	11	0.7037
	高群	24	37	61	
「先生声援」	低群	9	8	17	0.2232
	高群	20	35	55	
「友達遊ぼう」	低群	5	2	7	0.077
	高群	24	41	65	

\*: P<0.05 \*\*: P<0.01

表4507 女児 運動能力の高低群と運動有能感・被受容感高低群比較

運動有能感		運動能力			P値
		低群(人)	高群(人)	合計(人)	
「走る」	低群	4	6	10	0.1783
	高群	13	50	63	
「鉄棒」	低群	2	11	13	0.4571
	高群	15	45	60	
「ボール」	低群	10	21	31	0.1192
	高群	7	35	42	
「スキップ」	低群	5	4	9	0.0144 *
	高群	12	52	64	
被受容感					
「友声援」	低群	0	7	7	0.1253
	高群	17	49	66	
「先生声援」	低群	0	9	9	0.0775
	高群	17	47	64	
「友達遊ぼう」	低群	1	3	4	0.9336
	高群	16	53	69	

\*: P&lt;0.05 \*\*: P&lt;0.01

さらに、運動能力と運動有能感、被受容感について  $\chi^2$  検定を行った男女別 (表 4506) (表 4507)。

その結果、運動能力と運動有能感・被受容感の高低群の差が有意であったものは以下の通りである。

- ・対象児全体：運動能力と運動有能感「走る」
- ・男児：運動能力と運動有能感「走る」
- ・女児：運動能力と運動有能感「スキップ」

表4508 運動能力に影響を与える要因の影響度

要因	運動能力	
	$\beta$	有意確率
運動有能感「走」	0.2177	0.0085 **
調整済みR2:		0.041
R:		0.217
R2:		0.047

重回帰分析ステップワイズ法      \*: P<0.05    \*\*: P<0.01

## 5. 重回帰分析結果

更に運動能力に運動有能感・被受容感がどの程度、関連しているかについて、説明を加えるため、運動能力を目的変数、運動有能感・被受容感を説明変数とし、重回帰分析を行った。投入された説明変数は $\chi^2$ 検定の結果、関連があることが示唆された運動有能感「走る」、運動有能感「スキップ」である。

その結果、回帰式の有意性（分散分析）が見られた目的変数（運動能力）についての結果のみを示している。決定係数が0.047と小さいため、運動有能感「走る」が幼児の運動能力と関連する可能性が考えられる。（表 4508）

## 第6節 考察

### 1. 幼児の運動能力と運動有能感・被受容感の相関について

表 4503 より、運動能力と他の変数（運動有能感、被受容感）については、相関係数により「ボール投げ」と運動有能感「走る」、「両足連続とび」と運動有能感「走る」、「幅跳び」と運動有能感「走る」、「幅跳び」と運動有能感「スキップ」に相関が見られた。被受容感については相関がみられなかった。

運動有能感「走る」については、「ボール投げ」「両足とび」「幅跳び」に相関がみられた。運動有能感「走る」、つまり、「走る」ことへの自信は、運動能力への関連が示唆される結果となった。幼児は「走る」ことについて、他の運動能力の種目より、普段の生活の中で意識しやすい運動である。また、幼児は走ることについては、友だちとの遊びの中で、「僕はあの子より速い、あの子には負ける。」と言った会話が聞かれることから、ある程度、客観的に自分の能力を他者と比較できているのではないかと思われる。よって、運動能力の高い幼児は走ることに自信があると思われる。運動能力と被受容感との直接の関

連が見られなかったことについては、他の要因（運動の好き嫌い、リズム等）との関連を考慮する必要があるのではないかと思われる。この点については、調査Ⅱで検討を加えることとする。

## 2. $\chi^2$ 検定について

相関係数により、一部、運動能力と運動有能感に相関がみられた。さらに、運動能力と運動有能感・被受容感との関連を確認するため、対象児全体と男児・女児別に $\chi^2$ 検定を行った。

運動能力の高低群と運動有能感得点の高低群、被受容感得点の高低群との比較を行い運動能力との関連を検討した。表 4505・表 4506・表 4507 は、運動有能感と被受容感、運動能力との関連について $\chi^2$ 検定を行い、その結果について示したものである。

$\chi^2$ 検定の結果、運動能力と運動有能感「走る」について、高低群の差が有意であった。相関係数の検討からも運動有能感「走る」については相関がみられたことから、運動能力への関連が示唆される結果となった。これ以外は、運動能力と運動有能感、被受容感について、 $\chi^2$ 検定では有意性が見られなかった。また、表 4502 によると、被受容感「友が遊ぼう」の項目は、運動能力高群が低群より数値が高い結果となっており、更に運動能力と被受容感については、差の有意性が明らかになりにくいと思われる。運動有能感・被受容感とも、幼児の回答がより弁別される回答方法が必要であると考えられる。

## 3. 重回帰分析

幼児の運動能力に運動有能感・被受容感が関連しているかについて、説明を加えるため、幼児の運動能力を目的変数、運動有能感・被受容感を説明変数とし、重回帰分析を行った。投入された説明変数は $\chi^2$ 検定の結果、関連があること示唆された運動有能感「走る」、運動有能感「スキップ」である。

その結果、表 4508 には、目的変数（運動能力）について回帰式の有意性（分散分析）が見られたものについて重回帰分析の結果を示している。運動有能感「走る」については、運動能力に関連する要因としての可能性が示唆される結果となった。スキップは、リズムが関連している運動である。リズムが幼

児の運動能力を育む可能性があることをしめしていると思われる。決定係数が0.047と小さく十分な説明が出来る値ではなかった。

運動能力と運動有能感の関連は一部が明らかになった。ただし、重回帰分析により、運動能力に関連する要因として、運動有能感・被受容感を検討したが、運動有能感・被受容感と幼児の運動能力との関連する結果は得られなかった。

よって、「仮説：幼児の運動有能感・被受容感と幼児の運動能力は関連があり、たのしさ追求型により、幼児の運動能力が育まれる可能性がある。」は一部支持された。

また、調査を実施している際、説明をしている時に幼児は、「僕、走るん好きやで、でも、ボール投げは嫌い」といった会話があった。今回の調査における運動有能感調査についての対象児は、回答の判断基準を質問中の運動種目の好き嫌いとしているのではないかと思われる。よって、調査Ⅱにおいて、幼児の運動の好き嫌いと運動能力との関連について検討することとする。

## 第5章 幼児の運動能力と運動の好き嫌いとの関連（調査Ⅱ）

### 第1節 運動の好き嫌いについて

幼児が運動遊びと関わっていく態度の育成について、文部科学省「幼児期運動指針『幼児における運動の意義』」の記述に、「遊びから得られる成功体験によって育まれる意欲や有能感は、体を活発に動かす機会を増大させるとともに、何事にも意欲的に取り組む態度を養う。」とされている。この意欲については、運動の好意的な態度、運動の好き嫌いに関連があると思われる。

運動の好き嫌いは、生まれつきというわけではなく、人的環境や物理的環境が関連していると思われる。また、それに伴って体験や経験により形成されていくものと思われる。幼児の運動の好き嫌いについての研究には、古川ら（2012）のものがある。そこには、「運動嫌いの子どもの特徴は、『運動が得意だ』『運動をして汗をかくのが気持ちいい』『体育で友達と仲良くなった・協力した』『体育で運動がうまくなった』などの運動や体育に対する良い経験や良い印象を持っている子どもが少なく、『家族でよく運動する』『家族が運動することが好きだ』など家族の運動への愛好度も低いことが明らかになった。」と（p.113）報告している。小佐野ら（1996）が幼児・学童期の保護者に対して自分の子どもころの好き嫌いについて調査をしている。その結果、「子どもの頃運動が好きだった親ほど、現在でも運動好きであり、子どもと一緒に体を動かす機会が多く、幼児の運動能力も高い傾向にあることなどが明らかになった。」（p.37）と報告している。このように、運動の好き嫌いは、運動することに関わる社会的態度などへの様々な影響が考えられ、幼児の運動能力を向上させることにも、少なからず影響していると思われる。

古川ら、小佐野らの研究の対象は保護者であり、直接、幼児に運動遊びの好き嫌いを聞いてはいない。本論文では、運動有能感・被受容感について、幼児からの直接、回答を得る方法で調査を行った。よって、この運動の好き嫌いについても同様の方法で調査を行うこととした。

## 第2節 調査Ⅱの研究の目的

幼児の運動能力の類型化のたのしき追求型と幼児の運動能力との関連を調査することを目的とする。幼児の運動の好き嫌いが、幼児の運動能力と関連があるかについて検討することは、たのしき追求型が運動の楽しさを内容として包含しているため、たのしき追求型が幼児の運動能力を育む可能性を検討することができると思われる。

## 第3節 研究の仮説

幼児の運動の好き嫌いとは幼児の運動能力の関連を検討することにより、運動の楽しさを含んだたのしき追求型が、運動幼児の運動能力を育む可能性について実証的に検証することができると思われる。

仮説：幼児の運動の好き嫌いとは幼児の運動能力は関連があり、たのしき追求型により、幼児の運動能力を育む可能性がある。

## 第4節 調査方法

### 1. 予備調査について

(1)調査対象：被験者、大阪市内 O 幼稚園年長児 11 名（男児 6 名、女児 5 名）

倫理面に関する配慮として、用紙に研究の趣旨を提示し、この調査への協力は自由であること、調査結果は研究のみ使用されること、保護者より特に申し出がなければ、同意とみなされることを説明する文書を添付した。調査においては、対象校の園長と教職員の同意を得て実施した。

(2)調査時期：2015 年 10 月

(3)調査方法

①運動能力調査 O 幼稚園、園年間行事の一環として同年 5 月に実施済み

②運動の好き嫌い・運動有能感調査・受容感調査共に、面接にて同年 7 月実施

(4)調査内容

①運動能力調査文部科学省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書 運動能力調査 調査実施要領」（p.98-105）に準じて行った。

・25m走 ・両足連続跳び越し・立ち幅跳び ・ボール投げ

## ②運動の好き嫌い

・運動遊びは好きですかという質問により、調査 I (運動有能感調査)と同じく、4 尺度で評定を行う。(測定の手順については中澤らに準じて実施)。

### (5) 本調査に向けて

①調査対象幼児の人数を増やすこと。

②調査項目を対象児に実施するにあたり、運動の好き嫌いの質問の前に、スクリーニングテスト(質問内容の理解についての設問)を設けた。

## 2. 本調査について

(1)調査対象：被験者は H 県東部の私立子ども園 1 園、O 府北部公立幼稚園 1 園・子ども園 1 園・保育所 1 所合計 4 園所、年長児(男児 62 名、女児 66 名)合計 128 名であった。

倫理面に関する配慮として、用紙に研究の趣旨を提示し、この調査への協力は自由であること、調査結果は研究にのみ使用されること、同意しない場合、調査用紙の同意しない旨を記述し提出を求めた。期限までに同意しない文書の提出がない場合は、調査に協力するとみなされることを明示する保護者対象の文書を配布した。調査においては、対象校の園長と教職員の同意を得て実施した。

(2)調査時期：2015 年 11 月から 12 月

### (3)調査方法

①運動能力調査項目文部科学省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書 運動能力調査 調査実施要領」(p.98-105)に準じて行った。

②質問内容の理解判定について(スクリーニングテスト)

調査者は被験者が口頭による質問内容を理解しているかどうかを確かめるためにスクリーニングテストを行った。最初に図版を見せながら、「犬は猫より大きいです。どちらの絵のことですか？おじさんに教えてください。」と言い、被験者に 2 枚の絵を提示し、正しいと思う絵を選択させた。同じく色の違う円を示して同様の質問を行った。正しく選択できなかった 17 名は被験者から除外した。



### ③運動の好き嫌いについての質問

運動遊びは好きですかと質問し、肯定的な回答には 2、否定的な回答には 1 とし数量化を行った。

### ④運動有能感調査 予備調査に同じ

運動の好き嫌い調査実際の調査例（個別面談調査）中澤ら（2009）の内容を参考にして実施した。（p.139）

ラポール形成後、調査者は「今日はこれからここにある絵を使っておじさんとゲームをしましょう。このゲームは「お話はどっちの絵かな」というゲームです。おじさんはこれから〇〇さん（被験者）に絵を見せます。これからお話しするのは、どちらの絵ですか？分かったら教えてください。」次に、「〇〇さんは今、運動場を走っています。走るのは好きですか？好きではないですか？（得意と答えた場合）、とても好きですか。まあまあ好きですか？」と質問した。得意ではないと答えた場合は全然得意ではないですか、少しは得意ですか？と質問した。同様に、他の質問の聞き取りを行った。次に、その答えに応じて得点化を行った。得点は各項目、4 段階評定（1-4）で、得点が高い方が運動有能感・被受容感が高いことを示す。

### ⑤統計解析

本研究では、運動の好き嫌い、運動能力について、相関係数により関連を検討した。

## 第 5 節 結果

被験者の運動能力調査の結果は表 5501 に示した通りである。

表 5501 運動能力調査得点

運動種目	25m走(秒)	ボール投げ(cm)	両足連続跳び(秒)	体支持(秒)	幅跳び(cm)
n	125	126	104	126	105
平均	6.49	532.54	5.32	48.83	100.2
標準偏差	0.49	184.87	1.12	33.08	18.26

表 5502 は、体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書（2011）による運動能力調査結果との得点比較である。同調査による得点化については、幼児の運動能力調査の得点表及び総合評価による。（同書 p.100-111）

表5502 運動能力全国平均との比較

運動種目	25m走(秒)	ボール投げ(m)	両足連続跳び(秒)	体支持(秒)	幅跳び(cm)
男児	2.95	2.85	3.00	3.12	2.90
男児全国調査平均	3.17	3.10	3.29	2.98	3.15
女児	3.28	3.43	3.45	3.08	3.24
女児全国調査平均	3.06	3.17	3.44	3.00	3.22

全国平均の同調査の 3 年目の運動能力結果と比較した。表 5502 によると、被験者は男女とも 5 種目中 3 種が全国平均を上回っている。上回っていない種目についても僅差である。よって、被験者全体としては、運動能力については優れていると思われる。ただし、体支持、ボール投げについては標準偏差によるとばらつきが大きく、運動能力の差が見られる。

運動の好き嫌いとは幼児の運動能力との相関関係をみると、表 5503 では、運動の好き嫌いとは運動能力 25m 走がやや相関がみられる結果となっている。

表5503 運動の好き嫌いとは各運動能力との偏相関行列

	運動好嫌	25m走	ボール投げ	両足連続跳び	体支持	幅跳び
運動好嫌	1.0000	-0.2227	-0.1518	-0.1512	-0.1510	-0.0500
25m走	-0.2227	1.0000	0.3204	0.1496	0.2656	0.3420
ボール投げ	-0.1518	0.3204	1.0000	0.4394	0.1412	0.1721
両足連続跳び	-0.1512	0.1496	0.4394	1.0000	0.1386	0.1966
体支持	-0.1510	0.2656	0.1412	0.1386	1.0000	0.1093
幅跳び	-0.0500	0.3420	0.1721	0.1966	0.1093	1.0000

表 5504 は、運動能力に関わる要因間の偏相関係数を示している。運動の好き嫌いとは運動能力については、強い関連は見られない結果となった。

表5504 運動の好き嫌いとは各運動能力との偏相関行列

	運動好嫌	25m走	ボール投げ	両足連続跳び	体支持	幅跳び
運動好嫌	1.0000	-0.1693	-0.0386	-0.0937	-0.0857	0.0494
25m走	-0.1693	1.0000	0.2493	-0.0664	0.2044	0.3038
ボール投げ	-0.0386	0.2493	1.0000	0.4040	0.0165	0.0072
両足連続跳び	-0.0937	-0.0664	0.4040	1.0000	0.0760	0.1433
体支持	-0.0857	0.2044	0.0165	0.0760	1.0000	0.0084
幅跳び	0.0494	0.3038	0.0072	0.1433	0.0084	1.0000

## 第6節 考察

調査Ⅱにより、運動の好き嫌いについて、検討を加えた。運動能力と運動の好き嫌いとの関連について相関係数の結果（表 5504）からは強い関連が見られなかった。よって、仮説「幼児の運動の好き嫌いとは幼児の運動能力は関連があり、たのしさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性がある。」については、支持されなかった。

今日的な保育の課題として、自ら運動を楽しむ幼児を育てることは重要な課題となっている。現行の幼稚園教育要領「健康」内容の取扱いには、「十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること」と記述されている。自ら体を動かすには、運動に対して好意的な態度の形成が必要である。

本調査のように、幼児に直接、運動の好き嫌いの回答を求めたものは少ない。保護者から幼児の様子について回答を得たものには次の報告がある。笹川スポーツ財団の子どものスポーツライフデータ（4～9歳のスポーツライフに関する調査報告書（2013年）によると、未就学児は好意的態度を示した割合が92.6%を示したことを報告している。更に、未就学児は、いっぱいしているけどもっとしたい46.6%、いっぱいしているので今のままでよい23.0%と回答している。（p.69）運動能力と運動の好き嫌いとの関連は調査していないが、運動が好きと答えた幼児は、運動量が多く、活動的であることが予想される。この研究は、保護者の考えを通じて運動の好き嫌いを捉えている結果である。中島ら（2006）は、幼児の特性として、「幼児の素朴楽天主義一年月の経過とともに望ましくない特性は、とても望ましい特性へと自然に変わるだろうという信念」（p.239）と幼児の特性について述べている。本論文では、運動能力と運動の好き嫌いが関連していない結果となったことについては、運動能力が劣る子であっても、時間が経てば、できるようになるという楽天的な考えがあることにより、運動能力が低い幼児も運動が好きであると答えているのではないと思われる。

## 第6章 幼児の運動能力と内なるリズムとの関連（調査Ⅲ）

### 第1節 調査Ⅲの研究内容

#### 1. チビラダーのリズム運動への活用

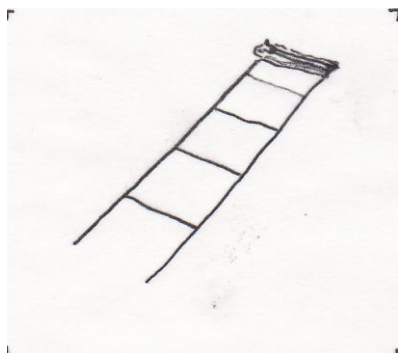


図 6101 測定および練習に使用したチビラダー全長 400×巾 37cm(1 コマ/35×35cm) ている。」(p.21)

原田（2000）は、「ラダー運動は神経系トレーニングの中のアジリティー能力を促進させる運動用具として、青少年や競技者のトレーニングに広く使用されている。アジリティー能力とは、単に敏捷性ではなく、頭（脳）で考えて意識化した新たな動き（随意運動）を反射的に行えることであり、ラダーを用いるトレーニングは、その動きの回路を頭にインプットさせることが第一目標といわれている。」(p.21)

蒲ら（2003）によると、「かつて子ども達が遊んだケンパ遊びからは、身体をリズムカルに巧みに使うリズム感やバランス感覚などの神経系能力が育まれたと考えられる。そこで筆者らは、ケンパ遊びにヒントを得て(中略)様々なステップ操作を幼児に体験させることが出来る遊具としてアジリティーラダー（ラダー）に着目した。」(p.13-14) と記述している。

山縣ら（2010）は、様々なステップを体感させ、バランス・リズム・タイミングを身に付けるためにラダー運動のプログラムを作成している。本研究においても幼児のリズム感を推定する運動としてラダー運動を活用することにした。

蒲ら（2003）は、幼児を対象に、ラダーを用いたステップと運動能力の関連について次のように報告している。「ステップ操作能力と相関が認められた運動能力は、男児では『25m走』と『ソフトボール投げ』であったが、女児ではなかった。」(p.10) と報告している。

富田ら（2014）は、幼児のリズム感に着目し、エアロビ運動を行い、事前 4 月、事後(9 月)に変則的な両足連続跳び（跳ぶリズムが変化するように課題を設置）により、リズム感の評価を行っている。その結果、4 月と 9 月の調査結

果には有意な差が見られなかったことを報告している。

宮口ら（2010）は、幼児を対象に、実験群と比較群を設け、ラダー運動の効果を検証している。その結果、20m走、反復横跳び、ジグザグ走に与える影響があること、20m走のタイムの伸び率が高くなったことを報告している。

## 2. リズムについての先行研究

三木（2005）は、「実際にうまくできる動きは、力を入れる感をあらかじめ予感して準備（予感的先取り）しておき、それによってタイミングよく力を入れています。また、動きを瞬間的に再認識したり、情動的な先読みをして動き全体の力動的修正をしたりします。」（p.97）と述べている。これは、運動する前に、既にその運動特有のリズムを感じ取ることができれば、その運動がうまくできることを示唆していると思われる。

木村ら（1998）は、ロボット工学の分野で歩行について述べている。「生体内部には神経振動子<sup>（注1）</sup>と呼ばれるリズム発生機構があり、これが動物の周期的活動（呼吸・心鼓動・移動運動など）に深く関わっていることが明らかになってきた。神経振動子は、外部の振動と同期して自らの振動を変化させる「引き込み現象」を起こす特徴を持っている。不整地における変化を神経振動子により自分のリズムに引き込むことができる」（p.110）としている。これは、拍子の変化を捉え、自分のリズムに引き込むことができると運動をうまくできることにつながることを示唆していると思われる。

### 注<sup>1</sup>「神経振動子」

橋本（2016）は「神経振動子とは、人や動物の歩行運動や呼吸といったリズムミックスな運動生成に用いられていると考えられているもので、リズムを生成する神経回路網を数式によってモデル化したもの。入力された周期的な信号に対して同調（引き込み）することが知られており、非常に容易に外部の事象に対して同期する機能を持つことで知られています。」と人間の持つリズムについてロボット工学の分野から言及している。

## 第2節 調査Ⅲの目的

幼児の運動類型化の内、こちよさ追求型・しなやかさ追求型が幼児の運動能力を育む可能性について検討することを目的とした。こちよさ追求型は、幼児が主体的に運動に係わることが求められる。この調査では、ステップの指導のため、週に2度、15分間、調査者が幼児に指導を行った。それ以外の時間は、保育者により廊下や運動場に設置されたラダーを自由に使って、幼児が自分で遊びながらラダー運動を行っていた。

しなやかさ追求型の内容については、幼児は、ラダーのステップを自分で確認しながら、自分のペースで運動する様子が見られた。幼児自身がラダーのステップをイメージし、運動に取り組んでいたことからしなやかさ追求型の運動の様子と捉えた。

## 第3節 調査Ⅲの仮説

ラダー運動に取り組み、様々なステップを経験することにより、幼児の運動能力は育まれ、幼児の主体的な取り組みや、ラダーのステップをイメージして運動することから、こちよさ追求型・しなやかさ追求型は、幼児の運動能力を育む可能性があると思われる。

仮説：ラダー運動によるステップと幼児の運動能力は関連があり、こちよさ追求型・しなやかさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性がある。

## 第4節 調査Ⅲの研究方法

### 1. 研究方法

#### (1) 調査対象：被験者

○府北部 M 幼稚園年長児 93名（男児50名、女児43名）

○府北部 H 幼稚園年長児 31名（男児16名、女児15名）

○府北部 H 保育園年長児 23名（男児13名、女児10名）

合計147名（男児79名、女児68名）

倫理面に関する配慮として、用紙に研究の趣旨を提示し、この調査への協力は自由であること、調査結果は研究にのみ使用されること、同意しない場合、調査用紙の同意しない旨を記述し提出を求めた。期限までに同意しない文書の

提出がない場合は、調査に協力するとみなされることを明示する保護者対象の文書を配布した。調査においては、対象校の園長と教職員の同意を得て実施した。

(2) 調査時期：2016年2月から3月

(3) 調査方法

(4) 運動能力測定項目

・25m走　・立ち幅跳び　・テニスボール投げ

運動能力調査項目文部科学省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書 運動能力調査 調査実施要領 p.98-105」に準じて行った。

(5) ラダー運動

宮口ら（2010 b）の調査項目・方法により実施(p.4)

表 6401 ステップの種類

1	歩行	1マスに対し1歩ずつのステップで、前進する。
2	かけ足	1マスに対し1歩ずつのステップで、かけ足で前進する。
3	横向きダッシュ	1マスに対し2歩ずつのステップで横向きに進む。
4	グーパージャンプ	1マスごとに、両足を閉じる・開く動作を行い、前向きにジャンプして前進する。
5	こびとスキップ	1マスで1回ずつ、できるだけ速く細かいスキップをしながら前進する。
6	ジグザグジャンプ	ラダーの一方の側の縁をまたぎ、次のマスに進むとき、ジャンプして逆側の縁をまたぐ、という動作を連続してジグザグに前進する。
7	ひねりジャンプ	横向きになり、ラダーの一方の縁をまたぐ位置からスタートし、ジャンプして身体を180度回転させながら、次のマスの縁をまたぐ位置に着地する。この動作をできるだけ速く連続していく。
8	シャッフル	1マスで中・中とステップを踏んだら、次のステップは1つ先のマスの外側を踏み、その逆の足から中・中のステップを踏む。中・中・外のリズムでできるだけ速く前進する。
9	サンバステップ	横向きになり、1マスで1歩ステップしたら、次はマスの手前の外側で2歩ステップする。この動作をできるだけ速く連続して、ラダーに沿って進む。

## (6) 調査実施手順

### ステップ調査方法

9種目のステップを事前に園児に説明し、指導者が測定前に模範を示した。1週間に1回、教諭を中心にラダーの練習を行った。2週間後、判定の機会を設け、各教諭、主任、調査者により評価を行った。更に2週間後、最終判定を前回と同様の判定者で行った。



## (7) 成就判定方法

評価は3段階とした。「ラダーのマス最後までスムーズにリズムカルに失敗しないのでできる場合」を「3」「失敗しながらも最後までできる場合」を「2」「ステップが全くできない場合」を「1」として得点化し、判定した。判定者は各担任教諭、主任、調査者とした。

## (8) 運動能力測定

対象児の質的運動能力調査及び撮影は2016年2月から3月に実施した。本研究においては、「走運動」、「跳運動」（以上2種目、移動系動作）、投運動（以上1種目、操作系動作）の3種類とした。

## (9) 運動能力測定方法

実施方法は、文部科学省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書 運動能力調査 調査実施要領」（p.98-105）に準じて行った。

・25m走：「30mの直線を全力で走る。25m通過するまでの時間を1/10秒単位で測る」。

・立幅跳：「踏切線より両足をわずかに離して立ち、両足同時に踏み切り、できるだけ遠くへ跳ぶ。」

・ボール投げ：「制限ラインを踏んだり踏み越したりすることなく、助走なしで、利き手の上手投げで遠くへ投げさせる。」

測定は幼稚園内の園庭及び室内で実施した。必要に応じて隣接する小学校校庭、公園においても実施した。

## 2. 運動能力質的評価基準の設定

運動能力測定実施時において、全幼児の「走運動（25m走）」、「跳運動（立幅跳び）」、「投運動（テニスボール投げ）」を側方より、デジタルビデオカメラを用いて撮影した。記録された映像を観察し、動作の評価を実施した。各動作の評価は中村ら（2011）による基本的動作様式の発達による評価法（p.17）と佐々木ら（2014）による観察評価法の観点（p.4）を参考にして設定した。なお、各運動様式について重要と思われる重心の位置についての考察を加えて、新たな評価基準を作成した。重心の位置については久保ら（2006）による先

行研究を参考にして設定した。

久保ら（2006）は、理学療法の見解より次のように述べている。「姿勢・動作において身体重心位置を把握することは重要であるものの実際には重心位置は不可視的であり、経験的に推測されていることが多い。（中略）身体重心点と上半身と下半身重心点の midpoint とは近似しており、臨床所見の観察点としての有効性が示唆された。」（p.112）としている。運動には重心の移動が伴う。その動きに視点を当てることにより、さらに明確に質的運動評価が出来ると考え、全体印象に重心を評価の観点に加えた。（図 6401）

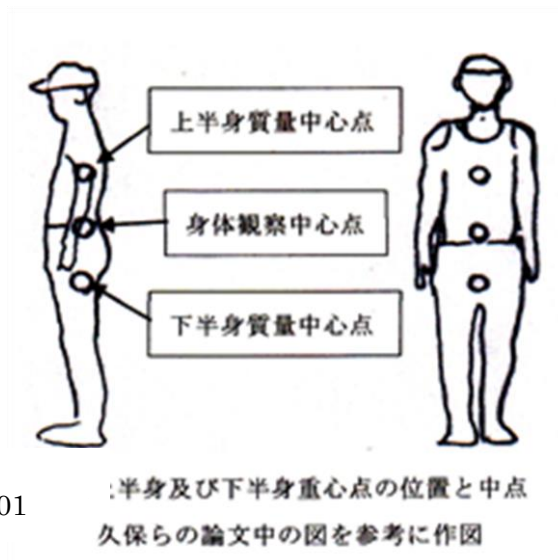


表 6402 質的運動観察基準について

	中村ら	佐々木	本研究
走る	<p>発達段階に応じた得点の基準</p> <p>①両腕のスイングがない。</p> <p>②前方で腕をかくような動きや左右の腕のバランスのとれていない消極的なスイング動作がある</p> <p>③回復期後半の大腿の引き上げにつながる十分な足の蹴り上げがある。</p> <p>④両肘の屈曲が十分に保持された、大きな振動での両腕のスイングがある。</p> <p>⑤膝が十分に進展し、水平方向にキックされている。</p>	<p>全体印象（3段階評価）</p> <p>力強く地面をキックし、前方にスムーズに進んでいる。</p> <p>部分観点（2段階評価）</p> <p>①膝がよく上がっている</p> <p>②歩幅が大きい</p> <p>③腕（肘）は適度に曲がり、前後に大きく振られている。</p>	<p><b>全体印象</b>（3段階評価）</p> <p>重心が進行方向に傾いている。</p> <p>力強く地面をキックし、前方にスムーズに進んでいる。</p> <p><b>部分評価</b>（2段階評価）</p> <p>については佐々木に同じ</p>
投げる	<p>発達段階に応じた得点の基準</p> <p>①上体は投射方向へ正対したままである。</p> <p>②投射する側の腕と肩を後方へ引き上げ、反対側へひねる。</p> <p>③投射する腕と同じ側の脚のステップがある。</p> <p>④投射する腕と反対側の客のステップがある。</p> <p>⑤準備局面でワインドアップ動作を伴う。</p>	<p>全体印象（3段階評価）</p> <p>全身を使って力強くボールを投げている。</p> <p>部分観点（2段階評価）</p> <p>①ステップ脚（投げ腕と反対側）が前に出る</p> <p>②上半身をひねって、投げ腕を後方に引いている。</p> <p>③軸脚からステップ脚に体重が移動している。</p> <p>④腕をムチのように降っている。</p>	<p><b>全体印象</b>（3段階評価）</p> <p>全身を使って力強くボールを投げている。</p> <p>重心が後方から投射方向へ移動している。</p> <p><b>部分評価</b>（2段階評価）</p> <p>については佐々木に同じ</p>

跳ぶ	<p>発達段階に応じた得点の基準</p> <p>①両腕はぶらさげた状態のまま で、ほとんど動作がない。あるいは両腕を跳躍方向と反対に、 後方へと振る。</p> <p>②両腕を後方へ引き上げ、肩を 緊張させてすくめる。</p> <p>③肘が屈曲する程度に、両腕を わずかに前方へ振り出す。</p> <p>④肘をほぼ進展しながら、両腕 を前方に振り出す。</p> <p>⑤バックスイングから、両腕を 前上方へ大きな動作で振り出 す。</p>	<p>全体印象（3段階評 価）</p> <p>両足で前方に力強く跳 んでいる。</p> <p>部分観点（2段階評 価）</p> <p>①膝と腰をよく曲げて 跳ぶ準備をしている。</p> <p>②腕を後方から前方へ タイミングよく振って いる。</p> <p>③離地時に身体全体を 大きく前傾している。</p> <p>④両足で身体の前方に 着地している。</p>	<p>全体印象（3段 階評価）</p> <p>両足で前方に力 強く跳んでい る。</p> <p>重心の上下の振 幅がある。</p> <p>部分評価（2段 階評価）</p> <p>については佐々 木に同じ</p>
----	--	--	---

### 3. 質的運動能力評価の方法

評価項目（観察の着眼点）は動作ごとに、「全体印象」と身体的部分や各部位の動作様式による「部分観点」により構成されている。「全体印象」は、「よくできている：3点」「できている：2点」「できていない：1点」の3段階で判定した。部分観点は、「できている：2点」「できていない：1点」の2段階で判定した。判定者は、小学校教諭（地域の体育研究部に所属）とした。

判定カウンターの信頼性を確保するため、事前に動作のチェックやカウンターの仕方を2名が理解した上で、撮影された動作を用いてビデオ観察を繰り返し行い、それぞれの動作について2名で協議及び確認を行った。この評価の信頼性については、佐々木ら（2014）がこの運動観察方法の実用性について検証を行っている。調査対象を小学校教諭、保育従事者、保育及び体育専門課程の学生、大学院生らとし、幼児の種々の動きの録画映像について観察評価を実施し

た。

その結果、いくつかの動きによっては、評定が難しくても部分観点を意識することにより、観察評定が有効であることや、動きを繰り返し観察することにより評定が安定してくることが明らかにされている。よって、本論文の判定者は、事前に動作のチェックやカウントの仕方の理解、撮影された動作を用いてビデオ観察を繰り返し実施したことにより一定の信頼性があると思われる。

## 第5節 結果

表6501 3拍子のリズムと各運動の平均得点との相関

	3拍子平均値	走平均値	幅平均値	投平均値
3拍子平均値	-	0.0365	0.0442	0.2247
走平均値	*	-	0.0030	0.3954
幅平均値	*	**	-	0.0633
投平均値				-

[上三角:P値/下三角:\*,P<0.05 \*\*P<0.01]

表 6501 は、各項目の得点の平均値によりによるとシャッフル・サンバのリズムによる各ステップ運動の平均により相関係数を求めた結果である。3 拍子の平均は走・幅運動の平均との関連が認められた。

### 1. 質的運動能力（走）とリズム（ラダー運動による）の関連

表6502 3拍子のリズム得点(シャッフル・サンバステップの反応時間)と走運動能力との相関 [上三角:P値/下三角:\*,P<0.05 \*\*P<0.01]

	シャッフル	サンバ	歩こう	走ろう	横向き ダッシュ	こびとス テップ	ジグザグ ジャンプ	ぐーば ジャンプ	ひねり ジャンプ	全体印象	膝	歩幅	肘
シャッフル	-	0.00	0.02	0.62	0.83	0.00	0.00	0.00	0.00	0.71	0.13	0.10	0.05
サンバ	**	-	0.07	0.66	0.01	0.00	0.00	0.00	0.07	0.01	0.00	0.03	0.02
歩こう	*		-	0.00	0.05	0.18	0.77	0.04	0.13	0.34	0.91	0.04	0.22
走ろう			**	-	0.00	0.37	0.01	0.89	0.83	0.01	0.06	0.85	0.27
横向きダッシュ		**		**	-	0.00	0.00	0.46	0.02	0.42	0.08	0.65	0.14
こびとステップ	**	**			**	-	0.00	0.02	0.17	0.29	0.03	0.62	0.17
ジグザグジャンプ	**	**		**	**	**	-	0.00	0.02	0.05	0.15	0.12	0.03
ぐーばジャンプ	**	**	*			*	**	-	0.24	0.31	0.04	0.00	0.86
ひねりジャンプ	**				*		*		-	1.00	0.36	0.90	0.97
全体印象		**		*			*			-	0.00	0.00	0.00
膝		**				*		*		**	-	0.12	0.00
歩幅		*	*					**		**		-	0.02
肘	*	*					*			**	**	*	-

表 6502 によると、走能力の各項目ともリズムの何れかに相関が認められた。特に、サンバステップについては、走能力の全項目に相関が認められる。走能力とリズムとの相関が認められる結果となった。

## 2. 質的運動能力（跳）とリズム（ラダー運動による）の関連

表 6503 によると、跳能力の「全体印象」「腕振り」「前傾」の各項目は、リズムの何れかに相関が認められた。3 拍子のリズム（シャッフル・サンバ）と跳運動（全体印象）との関連が見られた。

表6503 3拍子のリズム得点(シャッフル・サンバステップの反応時間)と跳運動能力との相関 [上三角:P値/下三角:\*P<0.05 \*\*P<0.01]

	シャッフル	サンバ	歩こう	走ろう	横向きダッシュ	こびとステップ	ジグザグジャンプ	ぐーぱジャンプ	ひねりジャンプ	全体印象	準備	腕振り	前傾	両足着地
シャッフル	-	0.00	0.02	0.62	0.83	0.00	0.00	0.00	0.00	0.04	0.16	0.08	0.22	0.89
サンバ	**	-	0.07	0.66	0.01	0.00	0.00	0.00	0.07	0.04	0.21	0.06	0.12	0.81
歩こう	*		-	0.00	0.05	0.18	0.77	0.04	0.13	0.01	0.11	0.03	0.62	0.74
走ろう			**	-	0.00	0.37	0.01	0.89	0.83	0.36	0.88	0.68	0.96	0.77
横向きダッシュ		**		**	-	0.00	0.00	0.46	0.02	0.74	0.16	0.46	0.83	0.47
こびとステップ	**	**			**	-	0.00	0.02	0.17	0.01	0.37	0.08	0.00	0.67
ジグザグジャンプ	**	**		**	**	**	-	0.00	0.02	0.01	0.35	0.01	0.01	0.32
ぐーぱジャンプ	**	**	*			*	**	-	0.24	0.10	0.75	0.01	0.13	0.98
ひねりジャンプ	**				*		*		-	0.02	0.12	0.19	0.18	0.69
全体印象	*	*	**			**	*		*	-	0.00	0.00	0.00	0.00
準備										**	-	0.01	0.02	0.01
腕振り			*				**	*		**	**	-	0.00	0.17
前傾						**	*			**	*	**	-	0.02
両足着地										**	**		*	-

## 3. 質的運動能力（投）とリズム（ラダー運動による）の関連

表6504 3拍子のリズム得点(シャッフル・サンバステップの反応時間)と投運動能力との相関 [上三角:P値/下三角:\*P<0.05 \*\*P<0.01]

	シャッフル	サンバ	歩こう	走ろう	横向きダッシュ	こびとステップ	ジグザグジャンプ	ぐーぱジャンプ	ひねりジャンプ	投全体印象	ステップ足	ひねり	体重移動	ムチ
シャッフル	-	0.00	0.02	0.62	0.83	0.00	0.00	0.00	0.00	0.61	0.08	0.13	0.98	0.56
サンバ	**	-	0.07	0.66	0.01	0.00	0.00	0.00	0.07	0.49	0.77	0.44	0.76	0.12
歩こう	*		-	0.00	0.05	0.18	0.77	0.04	0.13	0.20	0.00	0.30	0.82	0.94
走ろう			**	-	0.00	0.37	0.01	0.89	0.83	0.44	0.01	0.35	0.79	0.49
横向きダッシュ		**		**	-	0.00	0.00	0.46	0.02	0.33	0.17	0.66	0.09	0.59
こびとステップ	**	**			**	-	0.00	0.02	0.17	0.46	0.07	0.35	0.66	0.19
ジグザグジャンプ	**	**		**	**	**	-	0.00	0.02	0.25	0.79	0.05	0.47	0.35
ぐーぱジャンプ	**	**	*			*	**	-	0.24	0.26	0.95	0.59	0.66	0.43
ひねりジャンプ	**				*		*		-	0.71	0.74	0.39	0.29	0.43
投全体印象										-	0.00	0.00	0.00	0.00
ステップ足			**	**						**	-	0.00	0.00	0.01
ひねり							*			**	**	-	0.00	0.00
体重移動										**	**	**	-	0.00
ムチ										**	**	**	**	-

表 6504 によると、投能力「ステップ足」「ひねり」の項目がリズムの「歩こう」「走ろう」「ジグザグジャンプ」と関連が見られた。3 拍子のリズムと挑運動との関連は見られなかった。

## 第 6 節 考察

### 1. 質的運動能力とリズム感

幼児の質的運動能力とラダー運動を通して、内なるリズムと質的運動能力との関連を検討した。その結果、「走能力」「跳能力」共、ラダー運動との関連が認められた。ラダー運動は、リズムを伴った運動である。特に、走運動は質的運動能力の項目とラダー種目の項目との相関が数多くみられた。「走運動」は、他の 2 種目と比較して運動としての経験が多く、リズムとの関連が明確になりやすいと思われる。蒲ら (2003) は、年長児 13 名を対象にラダー運動と運動能力との関連を検討している。その結果、「ステップ操作能力と相関が認められた運動能力は、男児では「25m 走」と「ソフトボール投げ」であったが女児ではなかった。」(p.22) としている。

更に、ラダー運動の普及を目的とした特定非営利活動法人日本 SAQ 協会は、1998 年から 2001 年にかけて、群馬県 H 町において、町内全小学生を対象に 3 年間にわたりラダー運動に取り組んだ。その結果、50m 走、立ち幅跳び、反復横跳びに効果があったことを協会ホームページに報告している。この様に、リズムと運動能力については本研究結果と同じく、「走運動」との関連が認められている。

本論文では、表 6502 より、ラダー運動によるリズムのある動きは、走運動に関連があることが示唆される結果となった。

「跳運動」は「両足着地」以外はラダー運動のいずれかと関連が認められた。渡辺ら (1976) は「上肢、下肢を組み合わせた同時、または交互叩打動作から、手および足の協応を発達段階的に検討し、次のような知見を得た。」とし、「手および足を同時叩打する場合、手と足が協応しうるのは、同側肢は 7 才、異側肢は 11 才であり、・・・」(p.127) と報告している。よって、年長児では、跳動作をタイミングよく上下肢を協応させることは難しいことが予測される。その点、「走運動」より相関のあるラダー運動種目が少ないのではないかと考

えられる。その点を踏まえても、跳運動もリズムのある動きとの関連は認められる結果となった。

「投運動」については、他の2種目と比較して評価点の平均が有意に低くなっており、他の2種目と比較して「歩こう」・「走ろう」と「ステップ足」との関連のみが認められた。ステップ足は投げるための踏み出すタイミングの動作である。投動作の初動動作が、普段の生活の中で身につけている移動のリズム「歩こう」・「走ろう」と関連していることが推測される。文部科学省（2011）「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」（p.152）の集計結果をみても、調査3年目において投げた動作は約70%が5段階評価において1と2の低い評価となっている。

## 2. リズムの変化への対応

ラダー運動の「シャッフル」「サンバ」は、他のラダー運動が2拍子であることと異なり、3拍子である。相関をみると、「シャッフル」「サンバ」は他のラダー運動との相関が多く認められる。また、「走運動」は3拍子の「サンバ」との相関が多く認められる。

畠山（2007）は日本人の心地よい「感じ」として次のように記述している。「われわれ日本人は2拍子ないし4拍子を好む傾向があるのではないだろうか。そのため、私たちは律文に対し、4拍子の律白や、組句といったリズム感覚を無意識のうちに見出して、『心地よい感じ』覚えやすいリズム感といったものを得るのだろうと思う。」（p.145）と述べている。

幼児も無意識のうちに2拍子のラダー運動がやりやすいと感じとっているとされる。リズムのある「横向きダッシュ」、「こびとステップ」は、他のリズムとの相関が多くみられる。

走運動をみるとサンバステップのラダー運動の相関がすべての走運動の項目に認められる。シャッフルのラダー運動も3拍子であるが、サンバステップに比べて、動きのリズムが遅くなる傾向がある。サンバステップのラダー運動はリズムカルに進行しやすいと思われる。2拍子ではないリズム（サンバステップ）にうまく対応した幼児は、走運動の動きがよいことが示されている。本来、心地良いリズムではない3拍子への対応がスムーズに行うことができることに



運動能力を育むことへの示唆があると思われる。

この点については、2拍子から3拍子へのリズム変化と運動能力の関連を考  
える必要があると考える。

よって、調査Ⅲの仮説 ラダー運動によるステップと幼児の運動能力は関連  
があり、ここちよさ追求型・しなやかさ追求型により、幼児の運動能力を育  
む可能性がある。との仮説は、一部、支持された。

この結果は、ここちよさ追求型・内的活動主義が幼児の運動能力を育む可能  
性を示唆していると同時に、ラダー運動による内なるリズムが幼児の運動能力  
を育む要因ではないかとの可能性も示している。

第7章では、ラダー運動による運動プログラムを実験群・統制群に分けて実  
施し、その効果を比較、検証する。内なるリズムの幼児の運動能力を育む可  
能性について検証する。

## 第7章 リズム運動プログラムと内なるリズムとの関連（調査Ⅳ）

### 第1節 運動プログラムについて

運動プログラムの介入による研究は、加賀谷（2008）が、鬼ごっこ遊びの介入を行っている。出村（1993）は、ボール投げの動作について介入した研究を行っている。いずれも量的運動能力についての研究であり、質的運動能力による事前事後の比較を行っている研究ではない。松寄（2013）は、運動プログラムの介入と量的・質的運動能力調査を実施している。質的運動能力については身体運動能力の高い幼児は、動きを質の点からも運動能力を獲得していることを報告している。しかし、運動の量・種類によるプログラムであり、運動のどのような要因により質が高まったかについては触れていない。本調査では、3拍子中心のリズム運動プログラムを設定し、運動指導の介入を行い、質的運動能力評価との関連を検討する。

### 第2節 調査Ⅳの研究の目的

ラダー運動の3拍子への幼児の取り掛かりの時間（引き込み）をより短くするために、3拍子のリズムによるステップ練習の取り組みを行う。それにより、幼児が、幼児それぞれの内なるリズムを意識することができる。その経験によって、質的運動能力が育まれることについて検証することを目的とする。

### 第3節 調査Ⅳの仮説

ラダー運動に取り組み、様々なステップを経験することにより、幼児の運動能力は育まれ、幼児の主体的な取り組みや、ラダーのステップをイメージして運動することから、ここちよさ追求型・しなやかさ追求型は、幼児の運動能力を育む可能性がある。調査Ⅳでは、実験群・統制群により、ここちよさ追求型・しなやかさ追求型は、幼児の運動能力を育む可能性を比較検討することにより、仮説を検証する。

仮説：ラダー運動によるステップと幼児の運動能力は関連があり、ここちよさ追求型・しなやかさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性がある。

## 第4節 調査Ⅳの研究方法

### 1. 調査対象：被験者

○府北部 M 幼稚園年長児 110名（男児 61名、女児 49名）

H県東部 T 保育所年長児 25名（男児 12名 女児 13名）

○府北部 H こども園年長児 15名（男児 10名、女児 5名）

○府北部 Y 保育所年長児 20名（男児 12名、女児 8名）

○府北部 N 保育所年長児 10名（男児 6名、女児 4名）

合計 180名（男児 101名、女児 79名）

実験群（計 70名）8月の1ヶ月間、週2回、15分程度、ラダー運動を実施。

（・○府北部 H 公立こども園年長児 15名・○府北部公立 Y 保育園年長児 20名・○府北部公立 N 保育園年長児 10名・H県東部公立 T 保育所年長児 25名（男児 12名 女児 13名）

統制群（計 110名）調査期間中は、夏休み期間中で園での教育課程の影響がほとんどない状況

（○府北部 M 幼稚園年長児（男児 61名、女児 49名）

倫理面に関する配慮として、用紙に研究の趣旨を提示し、この調査への協力は自由であること、調査結果は研究にのみ使用されること、同意しない場合、調査用紙の同意しない旨を記述し提出を求めた。期限までに同意しない文書の提出がない場合は、調査に協力するとみなされることを明示する保護者対象の文書を配布した。調査においては、対象校の園長と教職員の同意を得て実施した。

### 2. 実験群について

(1) 研究調査時期：2016年7月から8月

(2) 実験プログラムの概要

質的運動能力測定をラダー運動に取り組む前に第1回目測定実施（8月上旬）。  
ラダー運動実施後に第2回目測定実施（9月上旬）

(3) 質的運動能力測定項目

- ・25m走 ・立ち幅跳び ・テニスボール投げ ・捕球
- ・ドリブル ・前転 ・平均台

運動能力調査項目文部科学省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書 運動能力調査 調査実施要領」(p.98-105) に準じて行った。

#### (4)運動プログラム (ラダー運動)

ラダー運動は調査者が各保育所を週 2～3 回程度、指導を行った。

各保育所は子どもが自主的に練習をする場面が見られた。

宮口ら (2010 b) もラダー運動の実施期間は 1 か月間としている。その期間、週 3 回程度、運動遊びの準備運動としてラダー運動に取り組んでいる。「1 か月後には動作も洗練され、スムーズでリズムカルな動作へと変容した。」としており、ラダー運動以外の動きへの影響 (月齢による成長) という点から考えても、この一か月の期間は適切であったと思われる。

#### (5) ラダー運動の内容

宮口ら (2010 b) の調査項目・方法により実施

※ラダー運動実験期間中、前半はステップに慣れるため主に、3 拍子のステップ (シャッフル・サンバステップ) 以外のステップを実施。後半は主に 3 拍子のステップを実施した。

ステップの内容は、表 6401 に同じ

### 3. 統制群について

(1) 調査時期：第 1 回目 2016 年 7 月下旬 第 2 回目 9 月上旬

#### (2) 調査の概要

質的運動能力測定を 2 回、実施。

#### (3) 質的運動能力測定項目

実験群に同じ

- ・25m走 ・立ち幅跳び ・テニスボール投げ ・捕球 ・ドリブル
- ・前転 ・平均台

運動能力調査項目 (文部科学省「幼児の運動能力調査」に準じて実施)

#### (4) 質的運動能力 観察的評価基準

調査Ⅲに同じ。調査判定については、小学校教諭 2 名による判定・評価を行った。評価が異なる場合、2 名で協議の上、評価した。

## 第 5 節 結果

**表 7501 観察的評価における全体印象の「good」評価の割合**

		走運動	跳運動	投運動	ドリブル
本論	実験群	77.3	72.9	50.6	60
	統制群	81.7	39.4	39.4	59.5
佐々木	男児	82.6	65.2	69.6	39.1
	女児	73.2	46.3	24.4	36.6

表 7501 は全体印象 good（観察的評価による 1～3 点中、2. 3 の得点）の比較である。佐々木ら（2014）は男児 23 名・女児 41 名に分けて平均値を算出している。本論文においては、実験群・統制群共に第 1 回目の質的運動能力の平均値としている。本論文は、男女を区分していないため男女合わせた平均値である。跳運動については、実験群が運動会にその種目を練習しており、高得点になったものと思われる。ドリブルについては、実験群・統制群ともに運動会種目として練習をしているため同様に、高得点になったものと思われる。その他の種目については、佐々木ら（2014）の男女の平均値の中に実験群・統制群の平均値が入っており妥当な数値であると思われる。

**表 7502 各種目におけるプログラム実施群 実施前後の比較**

運動種目	事前			事後			t	ES
	n	M	SD	n	M	SD		
走運動	268	1.638	0.606	268	1.866	0.584	6.3097	0.3833 **
跳運動	344	1.596	0.568	344	1.797	0.576	5.3940	0.3511 **
投運動	351	1.462	0.548	351	1.658	0.542	4.6727	0.3610 **
ドリブル	210	1.476	0.572	210	1.948	0.949	7.1216	0.6029 **
捕球	70	2.414	0.691	70	3.657	0.796	9.9824	1.6785 **
前転	69	2.435	0.653	69	3.261	0.965	7.1914	1.0103 **
平均台	71	2.310	0.623	71	3.423	1.051	8.9335	1.2970 **

注)M:平均値、SD:標準偏差、ES効果量 p\*<0.5 pp\*\*<0.1

表 7502・7503 は、ラダー運動導入前後の統制群・実験群各質的運動能力調査の結果を示している。実験群はすべての種目とも事前調査の結果と比較して

有意に運動能力が向上した。統制群は事前・事後を比較すると平均台を除いて、すべての種目において、平均値が下がる結果となった。統制群の走運動については、有意に平均値が下がっていることが示された。

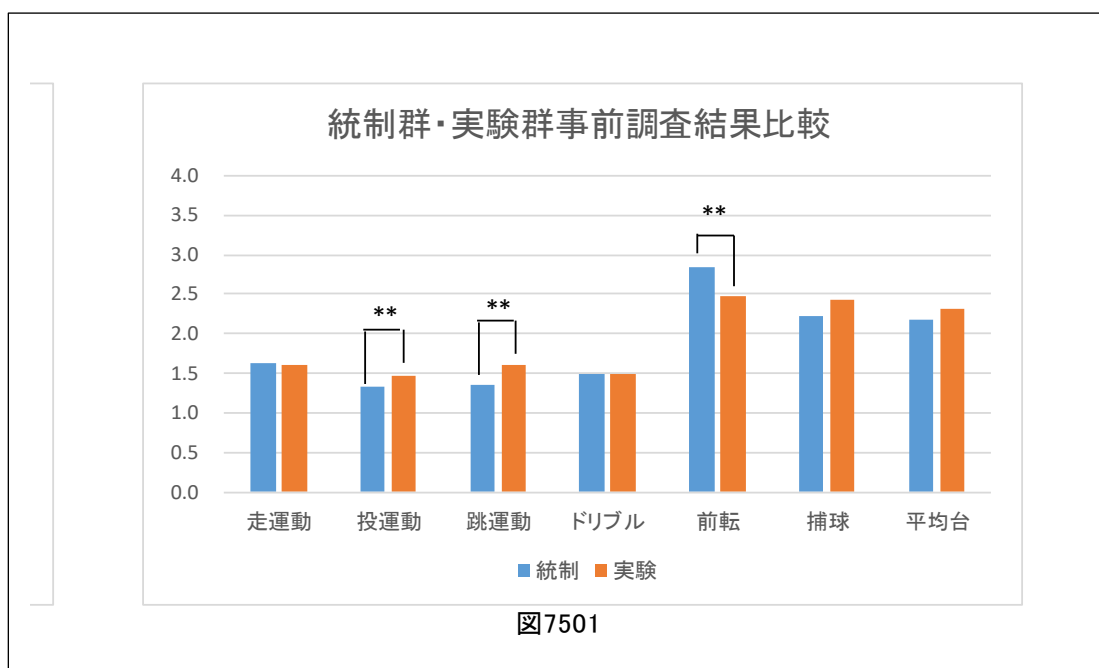


図7501

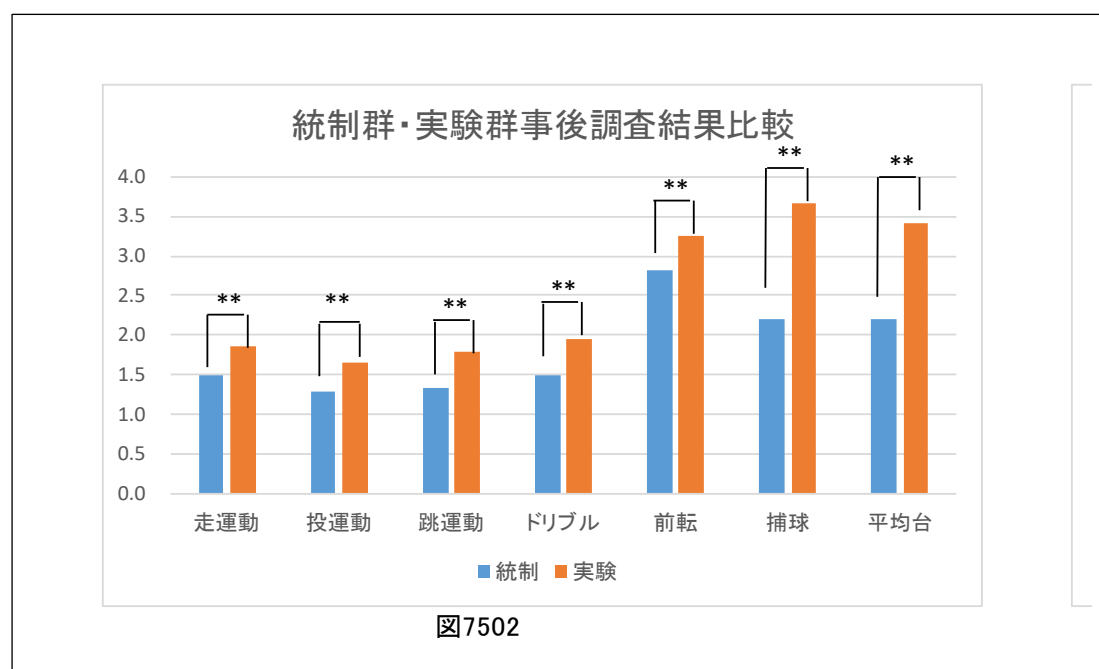


図7502

図 7501 は、統制群・実験群 プログラム実施前の質的運動能力についての平均値の比較である。事前の調査では、t 検定の結果、投能力・超能力は実験群が有意に優れていることが示された。前転については、統制群が有意に優れていることが示される結果となっている。図 7502 は、運動プログラム実施後の各質的運動能力平均値の 2 群の比較である。全 7 種目とも実験群の質的運動能力が有意に優れていることが示された。

表7504 各種目におけるプログラム実施群 実施前後月齢比較

運動種目	4月~7月生まれ				8月~11月生まれ				12月~3月生まれ							
	n	M	SD	t ES	n	M	SD	t ES	n	M	SD	t ES				
走運動	事前	84	1.536	0.610	4.873	0.5881 **	100	1.730	0.617	3.752	0.3187 **	84	1.631	0.576	2.321	0.2641 *
	事後	84	1.881	0.568		100	1.920	0.580		84	1.786	0.603				
跳運動	事前	102	0.345	0.588	3.329	0.3805 **	137	1.591	0.563	3.315	0.3377 **	104	1.596	0.566	3.236	0.3924 **
	事後	102	0.304	0.551		137	1.781	0.565		104	1.827	0.614				
投運動	事前	105	1.343	0.497	4.289	0.6124 **	145	1.538	0.589	1.546	0.1804	101	1.475	0.521	2.64	0.3983 **
	事後	105	1.657	0.534		145	1.641	0.561		101	1.683	0.528				
ド/ダブル	事前	63	1.556	0.642	4.594	0.5857 **	84	1.488	0.549	6.111	0.7202 **	63	1.381	0.521	6.387	0.8006 **
	事後	63	1.937	0.669		84	1.905	0.613		63	1.857	0.669				
捕球	事前	21	2.476	0.750	5.061	1.4605 **	28	2.393	0.685	7.336	1.8045 **	21	2.381	0.669	4.934	1.7925 **
	事後	21	3.667	0.913		28	3.607	0.685		21	3.714	0.845				
前転	事前	20	2.450	0.686	2.238	0.6465 *	28	2.500	0.638	6.0883	1.2763 **	21	2.333	0.658	4.384	1.0988 **
	事後	20	3.000	1.026		28	3.464	0.881		21	3.238	0.995				
平均台	事前	22	2.409	0.590	5.266	1.4163 **	27	2.259	0.656	6.399	1.5026 **	22	2.273	0.631	3.743	0.9979 **
	事後	22	3.591	1.054		27	3.519	1.014		22	3.136	1.082				

注) M: 平均値、SD: 標準偏差、ES: 効果量 p\* < 0.05 pp\*\* < 0.01



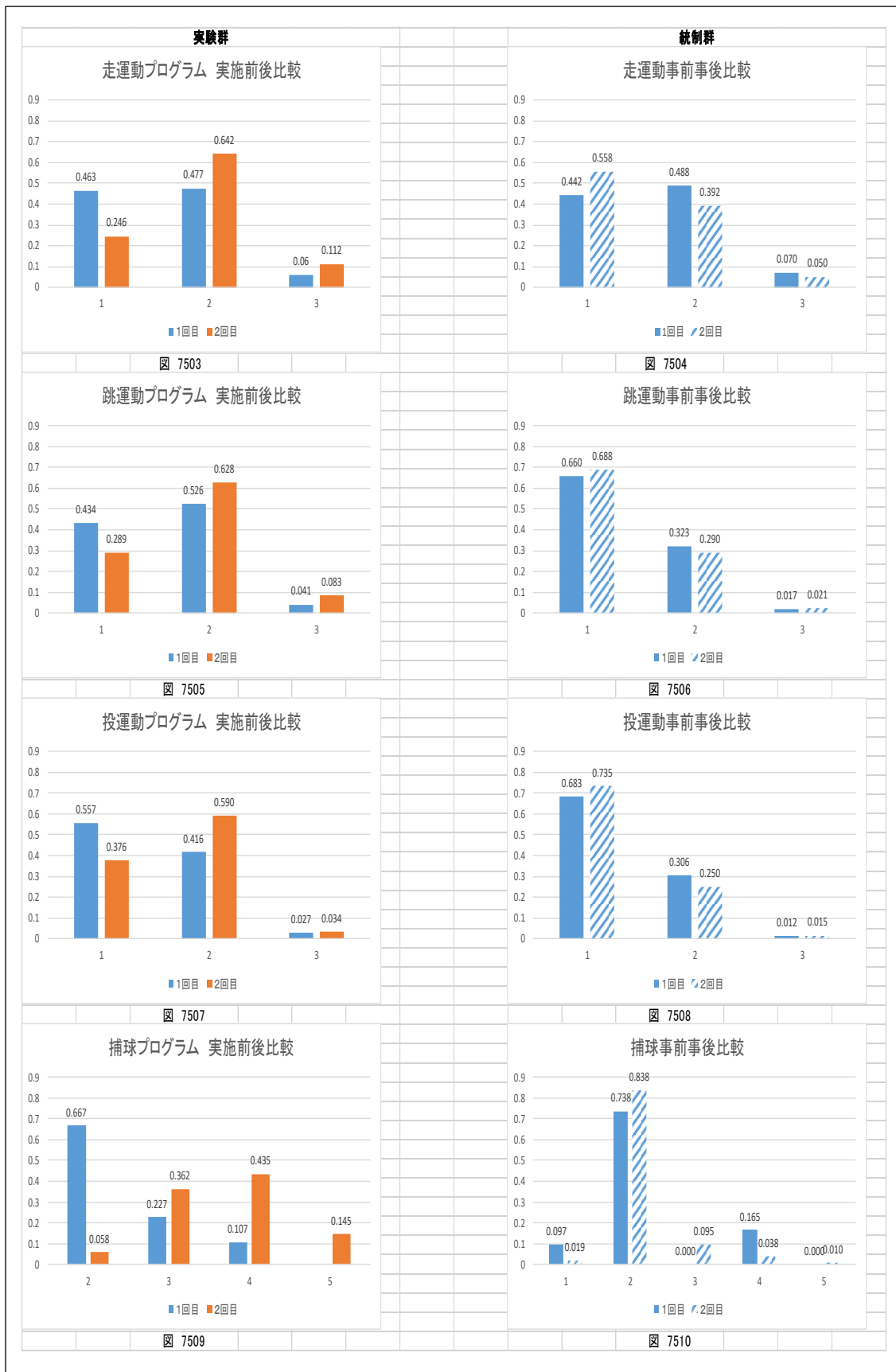
表 7504 は、実験群における月齢を 3 群（4 月～7 月・8 月～11 月・12 月～3 月）に分けて各運動能力の事前事後の質的運動能力の平均値比較を行った結果である。8 月～11 月投運動を除いて、他のすべての質的運動能力の向上が見られる結果となった。向上率は（向上した種目÷全種目×100）95%となった。

表7505 各種目におけるプログラム実施群 実施前後月齢比較

運動種目	4月～7月生まれ					8月～11月生まれ					12月～3月生まれ				
	n	M	SD	t	ES	n	M	SD	t	ES	n	M	SD	t	ES
走運動	128	1.586	0.591	1.338	0.1166	185	1.297	0.481	0.128	0.8985	132	1.523	0.586	1.392	0.1315
事後	128	1.517	0.597			185	1.292	0.479			132	1.447	0.570		
跳運動	145	1.434	0.525	0.515	0.0502	185	1.449	0.560	3.363	0.3042 **	165	1.206	0.420	2.103	0.1754 *
事後	145	1.462	0.578			185	1.286	0.477			165	1.285	0.479		
投運動	145	1.441	0.551	2.296	0.2028 *	185	1.297	0.481	0.128	0.0113	165	1.273	0.447	0.686	0.0683
事後	145	1.331	0.541			185	1.292	0.479			165	1.242	0.444		
ドリブル	29	1.931	0.753	0.215	0.0433	37	1.730	0.693	0.388	0.0760	33	1.636	0.699	0.421	0.0936
事後	29	1.966	0.865			37	1.676	0.747			33	1.576	0.614		
捕球	30	2.233	0.858	1.140	0.2427	37	2.189	0.877	0.584	0.1541	33	2.303	0.847	1.314	0.3400
事後	30	2.433	0.817			37	2.081	0.493			33	2.091	0.292		
前転	28	2.929	0.979	0.176	0.0382	37	2.865	0.887	0.560	0.1170	32	2.719	0.772	0.150	0.0352
事後	28	2.964	0.922			37	2.757	0.983			32	2.750	1.016		
平均台	28	2.250	0.645	0.205	0.0558	38	2.211	0.577	1.071	0.2057	33	2.061	0.348	1.359	0.3487
事後	28	2.286	0.659			38	2.105	0.453			33	2.242	0.663		

注) M: 平均値、SD: 標準偏差、ES: 効果量 p\* < 0.5 pp\*\* < 0.1

表 7505 は、統制群における月齢を 3 群（4 月～7 月・8 月～11 月・12 月～3 月）に分けて、各運動能力の事前事後の質的運動能力の比較を行った結果である。質的運動能力の平均値が有意に向上した種目は、12 月～3 月生まれの群、跳運動のみであった。21 項目中、向上した種目は合計で 1 種目となった。向上率は（向上した種目÷全種目×100）5%となった。



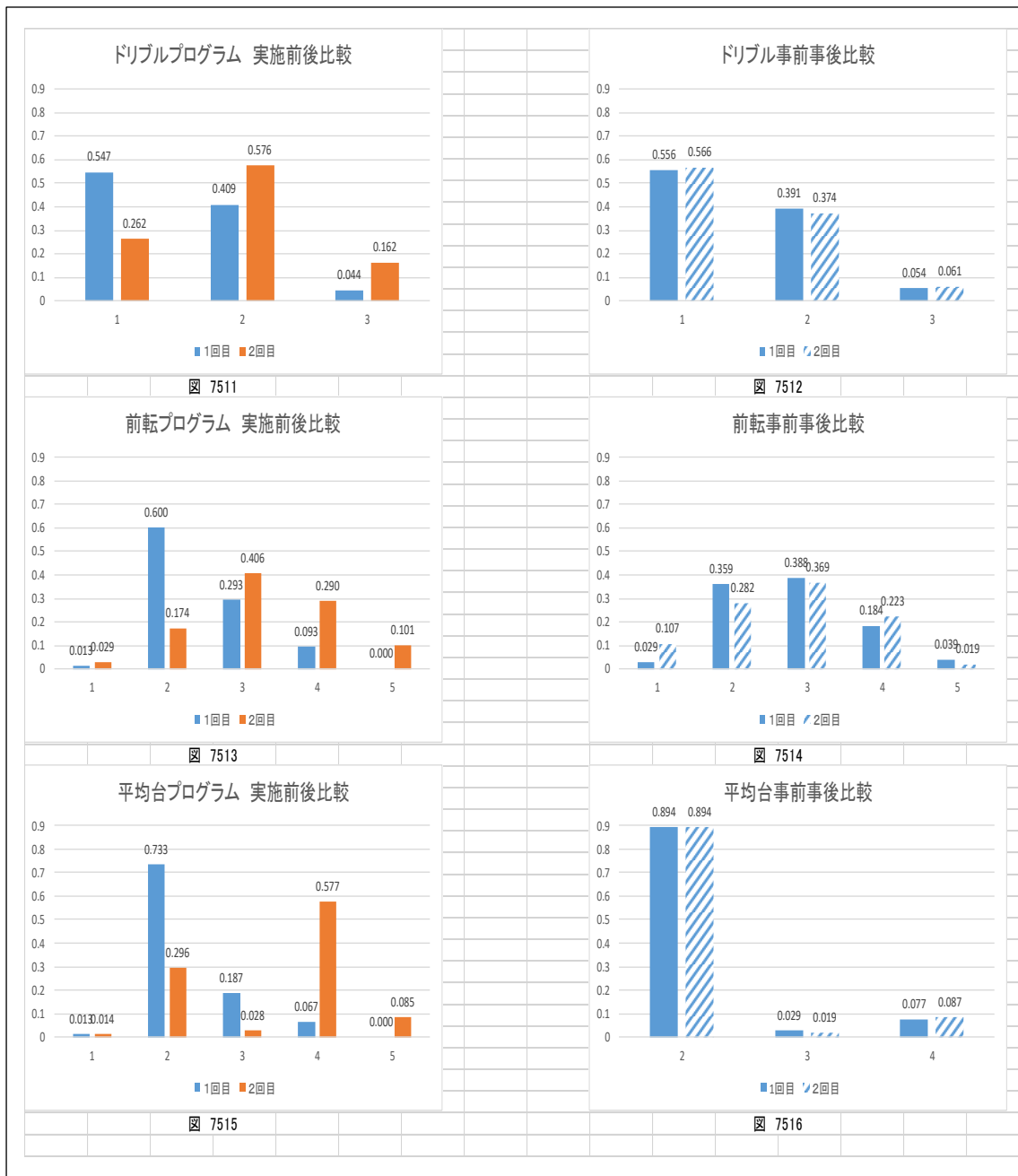


図 7503 から図 7516 は、実験群・統制群について事前（1 回目）事後（2 回目）の各種目、質的運動能力の平均値を比較したものである。実験群は評価が高い右側への移行が見られる。統制群は殆ど変化が見られない結果となっていることが分かる。

## 第6節 考察

幼児の内なるリズムについて、ラダー運動を活用し、3拍子のリズムに着目して検討を加えた。宮口ら（2010 b）は、ラダー運動の効果について次のように述べている。「幼児の場合、神経系機能の発達が目覚ましいことに加え、ツール（ラダー運動）への興味や、ゲーム性に富んだ運動の面白さにより、自然に体を動かすためラダー運動の効果が期待できる。」（p.2）

本論文では第6章の結果「ラダー運動によるステップと幼児の運動能力は関連があり、ここちよさ追求型・しなやかさ追求型により幼児の運動能力を育む可能性がある、との仮説は、一部、支持された。」を踏まえて、ラダーによる運動プログラム実施群（実験群）とプログラム非実施群（統制群）を設定し、運動プログラムの質的運動能力との関連について検討した。宮口ら（2010 a）は、ラダー運動の実践的な効果として、主に走運動への影響を検討している。その結果、走運動についての効果が認められたことを報告している。本論文では、表 7502 によると、実験群は、すべての種目において有意に質的運動能力が向上した。

運動プログラムが短期間（およそ1か月）であることを考えると成長等の要素を考えても、運動プログラムの影響により質的運動能力が向上した可能性があると思われる。効果量に注目すると、捕球（1.67）・平均台（1.29）・前転（1.01）ドリブル（0.60）の順に高かった。

統制群・実験群の事前の運動能力比較から統制群は前転が優れており、実験群は投動作・跳動作が優れていることが示されている。しかし、事後を比較すると実験群がすべての運動種目において平均値が向上した。ここでも、内なるリズムが質的運動能力に影響する可能性が示される結果となった。投動作についての先行研究では、投動作はそのためのプログラムを実施する必要があることが報告されている。ラダーによる運動プログラムでは、そのような内容は含まれていないため、リズムが投動作に影響を与えている可能性を示す結果となった。

表 7504 は、幼児を月齢で3グループ（4月～7月・8月～11月・12月～3月）に分けて実験群の事前事後の比較を行った結果を示している。実験群は、ほぼすべての項目について平均値が向上し、有意差も認められる結果となった。

(8月～11月・投動作を除く)内なるリズムのプログラムは月齢に関係なく運動能力の向上に影響する可能性を示すものである。表 7505 は、統制群を月齢で 3 グループに分け、事前事後を比較した結果である。21 項目 (3 グループ×7 種目) 中、1 種目において平均値が向上した。この結果は、成長による自然な運動能力の向上を示していると思われる。

図 7503 から図 7516 は、上記の内容を視覚化したものである。実験群は、各運動能力種目の平均値を向上させていることが示されている。一方、統制群は、事前事後を比較すると殆ど変化が認められないことが分かる。今回、統制群の幼児は、夏季休業中のため、家庭で過ごした時間が殆どであったと推測される。よって、実験群と統制群との運動能力の差が生じたことが予想される。

このようにラダーによる運動プログラムは、運動能力に影響を与える可能性が示される結果となった。本調査の仮説：ラダー運動によるステップと幼児の運動能力は関連があり、ここちよさ追求型・しなやかさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性がある、については、仮説がほぼ、支持されたとと思われる結果となった。

この結果を受けて、次章では、内なるリズムに基づいた幼児運動プログラムの試案作成を行うこととした。

## 第8章 内なるリズムを生かした運動プログラム試案内容の提案

### 第1節 幼児の運動能力向上の国・自治体の取り組み

#### 1. 文部科学省幼児の運動能力向上による取り組み

文部科学省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」の事業の内容として次の記述がある。「全国21市町村の実践地域を指定し、各教育委員会が中心となって実践協議会を設置して、単に体力向上を図るだけでなく、幼児の望ましい生活習慣の形成、運動習慣の改善や定着化等を図ること、また幼児の運動や体力に関する大人（保護者や保育者）の意識の改善を図ることを目的として、実践活動を展開した。」(p.2)とし、70園、約5000人を対象に調査を行っている。体力向上の取り組みを内容によっては3年にわたって実施している。

幼児の動作・遊びについては、・子どもたちに基本的動作を身につけさせたい・もっと積極的に遊びに取り組みたい・すぐにでも取り組みたい・もっと大勢の友達ともっと遊ばせたいの、4つのテーマを設定し、実践活動が行われ、運動能力が向上したとする結果が報告されている。

#### 2. 豊岡市の保育・教育スタイルの提言

豊岡市教育委員会子ども教育課が中心となって運動遊びのプログラムを全市の保育所・幼稚園で実施している。運動遊び事業の目的は、「できた時の喜び、達成感や満足感を自信につなげ、挑戦する気持ちや意欲を育てるとともに、友達同士でコミュニケーションをとりながら楽しく遊ぶことで前頭葉を活性化させ、抑制力や人を思いやる気持ちを育むという「心」と「体」の健やかな育成を目指す運動支援です。」(豊岡市運動遊び事業)としている。

具体的運動あそび例

(1) 毎日、一定の時間、短縄跳び、サーキット (2) 園庭でのかけっこやリレー、鬼遊び (3) 鉄棒運動、跳び箱など

豊岡市の取り組みの特徴は、市内の公私立の幼稚園・保育所・こども園、全てを対象に取り組みを実施している点である。

また、運動プログラムを実施するにあたり、指導する側の研究としては、次



の研究が挙げられる。柳田（2008）は、5領域と比較して、運動遊びに関する指導が重要視されていないとし、「幼児における運動遊びは、幼児の運動欲求に任せ、自発的に行わせるものであり、体系化した運動指導の必要はないという考えが幼稚園教諭には強いことが示唆される。」（p.24）と述べている。

新井・中西（2012）は、「運動指導について保育者は運動遊びの基本的な動き方を学習して動感（キネステーズ）発生から動感形成に至る能力を獲得すること。さらにそれらの運動の「運動構造」を理解した上で「動き方のコツ」を自身のキネステーズとして認識することで、より生き生きとした言葉による実践的な指導が可能になる。」（p.61）と述べている。ともに、運動遊びについて幼児への指導介入の必要性を示唆している内容となっている。また、保育の現場においては、言葉による指導による運動動作へのイメージを伝えることも示唆していると思われる。

中井・川下（2003）らは、4人の現職教諭を対象に運動遊びの指導論について研究している。その結果「運動あそび場面における教師の意思決定過程は、実践的知識とともに指導信念である運動遊びに対する個人レベルの指導論によって、その判断と決定が左右されており、教師の指導理念—実践的知識—意思決定—教師行動という教師の実践的思考と実践的力量的の構図が本事例を通じて改めて確認できたことになる。」（p.9）と報告している。このように、運動プログラムについては、保育者は、幼児の運動能力を育む意図を持って幼児と関わることが運動能力を考える上で必要であると思われる。

## 第2節 運動プログラム内容試案の提案

第7章において、内なるリズムは幼児の運動能力を育む可能性が示された。また、ここちよさ追求型・しなやかさ追求型ばかりでなく、力強さ追求型・たのしさ追求型についても、内なるリズムを基に運動プログラムに加え検討した。（表 8201）これは、力強さ追求型・たのしさ追求型においても、内なるリズムでそれぞれの運動の考え方・捉え方を見直すことにより、幼児の運動能力を育むための重要な要素とすることができる可能性があるのではないかと考えたからである。よって、運動プログラムについては、4つの幼児の運動の型を含め、第2章の図 2801 幼児の運動能力類型化Ⅱに基づいて、内なるリズムを

生かす視点から再構成を行い、運動プログラムの試案の作成を行った。この試案は、投運動のプログラム試案内容となっている。各主義について6項目（①子どもが行う外的行動の特徴の捉え方 ②自己コントロール ③内なるリズム ④保育者による子ども理解の特徴 ⑤保育者の支援の特徴 ⑥評価）で区分し、検討を加えた。

表 8201 運動プログラム内容区分表

運動プログラム内容（投げる）						
	Sa 力強さ追求型	Sb 楽しさ追求型	Ca しなやかさ追求型	Cb こちよき追求型	プログラムに生かしたい点	まとめ
の子どもが行う特徴的行動の捉え方	A			C		
自己コントロール						
内なるリズム						
保育者による子ども理解の特徴	B			D		
保育者の支援の特徴						
評価						

※ データの都合により表 8201 は A から D の 4 区分により表記する。

表 8201 A

	Sa 力強さ追求型	Sb 楽しさ追求型	Ca しなやかさ追求型
子どもが行う外的行動の特徴の捉え方	運動の結果から幼児の運動能力に気づく 具体例：見事なフォームで遠くへ投げる子 身体各部分の動きの方向を意識する ・ボールを放すタイミング ・腕の力の発揮とリラクセーション ・投動作のリズム について見る 小林「幼児の発達運動学」p.93	投げる運動をゲーム（シュートボール）を通じて楽しんでいるかに気づく *シュートボール：円形のゴールエリア内のコーンに手でボールをシュートして当てる ゲームを通じて投げる楽しさを味わう 力いっぱいボールを投げてシュートすることがを楽しむ。 ・作戦を考えたり、ルールを工夫してゲームを楽しむ 高橋「体育の授業を創る」p.96・99	運動のイメージを持っているかに気づく 目標を定めることなく、ボールで遊び込む、ボールに親しむ 具体例 ・ボールの上に寝転ぶ ・転がし合う ・ボールを送り合う 天野「ふれあい遊びからの出発」p.103
自己コントロール	意識していない	体験を通じて結果として楽しさという内面を意識している	イメージを豊かにすることにより自己コントロールする力、動作につなげる
リズム	結果として内なるリズムに結びついている	楽しさを味わうことで、結果として内なるリズムに結びついている	体操をすることで内なるリズムを感じとる ゆるるのばす力を抜く（リラクセス）
保育者による子ども理解の特徴	幼児が運動した結果から運動をいくつかの場面に分解して理解する。 ・ボールを前に投げられず、地面に叩きつけてしまう子（ボールを放すポイント） ・ボールがとんでもない方向へいってしまう子（踏み出す足の方向・重心の移動） ・ボールを持った手を肩先から突き放すように投げる子（肘の使い方） 「幼児の発達運動学」p.91.98	幼児がゲームを行っている様子から楽しさを理解する。 ・ゲームをする中で力いっぱいボールを投げる楽しさを味わうこと ・作戦・ルールを工夫する。 ・自己評価により、幼児の思いを知る 上記の幼児の様子から投げる技能を身につけているかを理解する。 高橋「体育の授業を創る」p.98	幼児がイメージをもって、運動しているかを理解する。 幼児がリラクセスイメージを持ち柔軟に動いている 天野「ふれあい遊びからの出発」p.18

表 8201 B

保育者の支援の特徴	部分観点に沿って、幼児の動きを読み取って指導をする。幼児の投げる身体活動の部分を見る ・足のステップ（投げる目標に向ける） ・腕の動き（鞭のように動く） ・体重の動き（踏み出した足に重心が移動する） ・肘の動き（目標に向かって手より前に出る） 小林「幼児の発達運動学」p.91	ボールゲームを通じて投動作を扱う。 よって、ゲームの方法・ルール・話し合い活動を通じて、保育者は投げる機会を増やす工夫をして、投げることへの指導も行う。 高橋「体育の授業を創る」p.99	従来のように、筋肉を量的に増量し、収縮力を部分的に増大させようとはしない。保育者は余分な力を抜くことによって「体ほぐしを行い、ちょうどよい力の入れ方を探る事」を支援する。 天野「ふれあい遊びからの出発」p.45
評価	運動の記録を取り、その結果に基づいて、より効果的に記録が伸びるように、練習をさせることにより運動能力が伸びていく。練習は、投げる技能の系統性を理解している ・運動の結果を重視している ・運動技能を系統的に取り上げている ・投げる運動を繰り返し練習させる 上記の特徴から 力強さ追求型とする課題 力強さ追求型は運動嫌いをつくらないか？ ・運動能力が高まらない子どもがあり、運動嫌いにさせてしまう点 ・運動能力向上の適切なポイントの理解ができるかという点	ゲームを通じて投げることの楽しさを味わわせることが投げる動作を向上させる点が見られている ・ゲームを通じて投げる運動能力を捉えているため、投げる運動を幼児に強いることがない（投げる練習をさせるなど） ・チームプレイであるため、幼児同士の協力や教え合いが期待できる ・自分の力に応じたゲーム内での役割がある 上記の特徴から たのしさ追求型とする課題 たのしさ追求型は、楽しければよいと考え、能力を高めることに意識が向かないのではないか？ ・保育者がそのゲームに適切な目標を持っていないと、ただ遊ばせていることになりがちである点 ・運動能力向上の適切なポイントの理解ができるかという点 ・楽しさに重心を置き、できなくてもよいという可能性がある点。	従来の運動能力の捉え方では細かく指導された。しかし、細かく指導されることにより投げられるようになるのではなく、自分で投げることに気が付いていくことへの示唆がある。 ・幼児が自分のしたいこと（投げる）と内なるリズムが結びつく ・自分で投げることに気づいていく（緊張・弛緩） ・目標に縛られない 上記の特徴からしなやかさ追求型とする課題 しなやかさ追求型は、それぞれの目標があり、自己満足してしまうのではないか？ ・運動能力の伸びが評価しにくい ・自己コントロールを運動の伸びに応じて適切なものにしていく点 ・内なるリズムと運動のリズムをとのようすり合わせていくのか ・適切なイメージを持っているかが分かりにくい

表 8201 C

Cb ここちよさ追求型	プログラムに生かしたい点	まとめ
<p>幼児が信頼関係を築く中で投げることに気づいて自ら運動能力を高めていく様子に気づく。                      具体例                      まりつきができると繰り返し練習をして、どの程度の力がつくと、どれくらい弾むかを体得する。その能力が発達すると、それらをもっと確かなものにするためにその能力を自発的に繰り返し使用する                      原田「幼児健康学」p.170</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・記録をとり、それを運動能力の向上にいかしているか</li> <li>・ゲームをそれぞれが楽しんでいるか</li> <li>・運動のイメージを持っているか</li> <li>・子ども同士で投げる動作への気づきがあり、それをさらに高めようとしているか</li> </ul>	<p>幼児の生活の中で運動を楽しめる環境作りを心がけることにより、様々な場面で異なったリズムを経験する事ができる。更に、保育者が内なるリズムと運動のリズムとの調和を支援することにより、運動能力が向上する様子が見られる</p>
<p>体験を通じて快感情という内面を意識している</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運動のイメージをもつこと</li> <li>・運動の楽しさ、快感情は必要</li> </ul>	<p>イメージが豊かになることで運動することのコツに気が付き、自ら目標をもつことで、内なるリズムを培うことにつながる。運動の楽しさ・快感情を体験する事はイメージを豊かにすることにつながる。</p>
<p>幼児が自分で能力を高めていく中で結果として内なるリズムに結びついている</p>	<p>結果として内なるリズムに繋がっていくが、運動能力を身につけさせるには当初から内なるリズムを意識する必要がある</p>	<p>内なるリズムは運動能力を高めるためには必要なものである</p>
<p>幼児同士が群れの中で高まり合っていく様子を理解する。                      共通の興味をもった2, 3人に伝えてやれた喜びで心を満たす、伝えあいになるように、表情・身振りでリーダーが輩出し、役割あそびに発展する。                      原田「幼児健康学」p.171</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児の運動の様子を運動のポイントに絞って知る</li> <li>・幼児に適切なゲームを行わせ、その中で運動の楽しさを味わっているかを知る</li> <li>・イメージすることで動きがつかみやすい</li> <li>・幼児の生活の様子から集団が育っているかを知る</li> </ul>	<p>運動している幼児には内なるリズムがある。保育者は、それを意識しておく必要がある。更に、幼児が運動を内なるリズムをつなげるために、子ども同士の関係やゲームの工夫、運動の系統的な理解が必要である</p>

表 8201 D

<p>幼児が雲田気で、目で、身振りで、言葉で関わってという合図を送ってきたときには、快く支援をスタイミングよく退き下がる                      原田「幼児健康学」p.156</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適切な動きができていない点を指摘し練習させる</li> <li>・投げることを含むゲームを工夫することにより、幼児が楽しんで取り組めるようにする</li> <li>・力の緩急を身につけさせる</li> <li>・集団の成長を読み取り適切なアドバイスを</li> </ul>	<p>保育者が内なるリズムを意識することで、幼児が運動をしている場面で運動に適したリズムになっているかに気づくことができる。さらに、運動がよりスムーズにできるよう、保育者が運動のリズムのポイントに気づき、内なるリズムへの指導ができる。運動が楽しめる環境作り・ゲームの工夫をすることにより、幼児同士の信頼関係に留意し、お互いが内なるリズムに気づく支援をする。イメージを豊かにすることにより、内なるリズムに影響し運動がよりスムーズになるように支援する。</p>
<p>保育者と幼児との信頼関係の基づくことを前提にしている。                      ・幼児を観察しながら待って、この子の心身の動きを熟知して、見分けてからのサポート                      ・幼児は、本人が他の子の遊びに憧れてイメージして考えたり伝えあったりして、意欲的に実践し成功して喜びや満足感を得て、理解し、他の子に伝えて遊びの輪を広げていく 原田「幼児健康学」p.154                      上記の特徴からここちよさ追求型とする。                      課題                      ここちよさ追求型は、目的を設定しにくいいため、放任になってしまわないか？                      ・ねらいが明確にならず、放任になる結果となる可能性がある                      ・集団がどのように育つか計画できない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・力強さ追求型は運動を効率的に学ばせることができる</li> <li>・たのしさ追求型は、ゲームを通じて楽しみながら運動能力を高めることができる</li> <li>・しなやかさ追求型は自己コントロールと内なるリズムを結びつてくことが可能である</li> <li>・ここちよさ追求型は、集団の中で幼児の信頼関係を元にして運動能力を高める可能性がある</li> </ul>	

### 第3節 自己コントロール

運動における自己コントロールについては、「動作法」には次のような記述がある。動作法は、成瀬悟策（1985）を中心に開発されたものである。その目的は、脳性まひ児の運動障害の改善を目的として開発されたものである。星野（1997）は、動作法について次のように記述している。「身体が動くことと、身体を動かすこととを区別し、前者を身体の物理的な移動としての身体運動、後者を行動の主体者である人間の能動的・主体的活動としての動作と呼んだ。動作法では、随意運動を動作と定義し直したのである。」（p.206）としている。

「動作法の展開につれ、イメージにおけるリアリティーを重視するようになり、イメージのリアリティーを高める動作体験の重要性を主張するようになった。つまり、心の活性化には、先ず、身体を意図的に操作することが不可欠と見ているのである。」（p.212）としている。動作には、自己を認識し、身体を自分の意志で動かそうとすること、つまり自己コントロールが必要であることを述べている。さらに、その動かそうとする意図には、イメージが重要であることにも言及している。

三木成夫（1992）は、「運動の習熟、いわゆるコツの習得と呼ばれるものは、要するにその運動の原型（姿かたちの直覚的イメージ）を体得することに他ならない。」（p.193）と述べている。運動に習熟するには、その運動に対してイメージを持つことが示されている。これは、どのように動きたいのかという自己コントロールの一つの表れであると思われる。

三木四郎（2005）は、「身体の動かし方の学習とは、人間が世界（自然・ヒト・物）に対して身体によって応答していることを考えると、運動感覚能力（キネステーズ能力）としての『私はそのような動きに対して動くことができる』という身体を培っていくというものです。それによって、日常生活やスポーツ活動がより豊かになっていくというものです。体育における『身体性の教育』の基本的な考え方がここにあります。」（p.9）

「運動感覚能力とは、『私が動く感じ』であり、『今、ここ』で動くことができるという能力の先読みも同時に共有する能力のことです。」ここでは、運動感覚能力は、本論で扱う自己コントロールとほぼ、同様のものと考えられる。このように動きたいという意思があり、内なるリズムに繋がり、外的運動能力に

反映されるものである。さらに、三木四郎（2005）は、「いろいろな動きの感じを試しながら探りを入れて、実際に自分でやっているような動きの感じを思い浮かべて、『分かるような気がする』段階（探索位相）を経て、偶然にもやろうして動きが出来て、『できそうな気がする』段階（偶然位相）へと進んでいくこととなります。それによって、少しずつ『動ける身体』を獲得することができるようになるのです。このことは自分の身体で動き方のコツが『わかる』ことであり、同時に一つのまとまった動きのかたちが現れ、運動が『できる』ようになることを意味します。このできる喜びが内的衝動となって体育で自ら学ぼうとする意欲に繋がっていくのです。」（p.9）

このように、運動能力の発揮には、三木四郎（2005）のいう自分の身体で動きのコツがわかるという事は、動きをイメージして、身体を意識し、コツを身につけることができるという事であると思われる。つまり、自己コントロールとは、動きたいという主体的意思と身体を意識する事でイメージを持ち、そのイメージに近づけていくことであると考えられる。

#### 第4節 運動プログラムの内容（力強さ追求型を例にして記述）

##### 1. 子どもが行う外的行動の特徴の捉え方

運動の結果から幼児の運動能力に気づく。具体例：①見事なフォームで遠くへ投げ  
る。②あわせて、身体各部分の動きの方向を意識させる。③ボールを放すタイミング  
④腕の力の発揮とリラクセーション⑤投動作のリズムについて見ることなど。

##### 2. 自己コントロール

意識していない

##### 3. 内なるリズム

結果として内なるリズムに繋がっていくが、運動能力を身につけさせるには当初から内なるリズムを意識する必要がある。

##### 4. 保育者による子ども理解の特徴

幼児が運動した結果から運動をいくつかの場面に分解して理解する。具体例

ボールを前に投げられず、地面に叩きつけてしまう子（ボールを放すポイント）やボールがとんでもない方向へいってしまう子（踏み出す足の方角・重心の移動）、ボールを持った手を肩先から突き放すように投げる子（肘の使い方）という見方ができる。

## 5. 保育者の支援の特徴

部分観点に沿って、幼児の動きを読み取って指導をする。幼児の投げる身体活動の部分を見る。具体例：①足のステップ（投げる目標に向ける）や腕の動き（鞭のように動く）②体重の動き（踏み出した足に重心が移動する）③肘の動き（目標に向かって手より前が出る）このような点について支援が必要であるかを判断できる。

更に保育者はその観点を判断した上で、適切な動きができていない点を指摘し、練習するようにながすことや投げることを含むゲームを工夫することにより、幼児が楽しんで取り組めるようにすることが必要となる。

## 6. 評価

運動の記録を取り、その結果に基づいて、より効果的に記録が伸びるように、練習をうながすことにより運動能力が伸びていく。練習は、投げる技能の系統性を理解していることが必要となる。評価の特徴としては、運動の結果を重視している点、運動技能を系統的に取り上げていること、投げる運動を繰り返して練習させることによる技能の向上などが評価の観点となる。

## 7. 課題

力強さ追求型は運動嫌いをつくらないか、例えば、運動能力が高まらない子どもがあり、運動嫌いにさせてしまうのではないかあるいは、保育者が運動能力向上の適切なポイントの理解ができるかどうかなどが挙げられる。

## 第5節 運動プログラムの保育での活用

このプログラムを用いて、どのように保育の現場において生かすことができるかについては、次のように考えている。

1. 幼児の運動の様子を内なるリズムの観点で観察することにより、幼児の課題を明らかにする。(しなやかさ追求型)
2. 運動に親しんでおり、楽しく運動できている子には、より適切な運動のリズムになるよう、自己コントロールを促すアドバイス（声やタイミング）により、内なるリズムを意識させるように支援する。(力強さ追求型)
3. 投げることに自信がなく、仲間とも交流できていない子には、投げる自己コントロールを意識させるために、ボールに親しむためのプログラム（しなやかさ追求型）と共に仲間との信頼関係を構築するため、敢えて支援することなく、仲間との交流を優先させ、投げることへの幼児自身の成長を待ち、適切な場面を捉え、投げる内なるリズムを意識させる。(ここちよさ追求型)
4. 投げる運動に親しんでいない幼児については、仲間との交流を深めるため、保育者は積極的に支援を行いう。ボールゲームを通じて、投げる楽しさを味わわせることにより、投げる内なるリズムを意識させる。作戦や、ルールを守ることにより、よりボールゲームが楽しめることを体験させる。(たのしさ追求型)

このように内なるリズムを運動遊びの視点とすることにより、二者択一やどちらかの運動の型を否定することなく、様々な運動の考え方を生かすことができる可能性があるプログラムとなっている。

幼児のリズム運動プログラムについては、奈良女子大学文学部附属幼稚園幼年教育研究会による「動きのリズム年間指導計画」（1966）が作成されている。本論文の内なるリズムも意識しており、動きのリズムとして身体運動をプログラムし、年間計画として表している。幼児の動きをパターン化し、それを年齢に応じて指導するものとしている。幼児の動き、リズム、空間の使いからなどをイメージさせるなど丁寧な実践がうかがえるプログラムとなっている。今後の内なる運動プログラムの作成に参考にしたいと考えている。



## 第9章 結論

### 第1節 各章の内容

#### 1. 序章

- (1) 本論の問題の所在
- (2) 運動プログラムの例をしめし、問題の所在との関わりを示す。

#### 2. 第1章 幼児の運動能力の現状

- (1) 幼児の運動能力は走、跳、投とも向上している傾向であること
- (2) 幼児の運動能力に関連する環境、構造、評価・測定方法、運動の自己評価、運動有能感・被受容感との関連

#### 3. 第2章 運動能力についての教育・保育の4つの考え方

##### (1) 小学校43年指導要領と52年の指導要領体育目標の比較

- ① 43年の学習指導要領は「運動による教育」と呼ばれ、運動を通じて、体力、運動能力や社会的態度の育成を図ることが目標とされたこと
- ② 52年の学習指導要領は「運動の教育」と呼ばれ、運動の持つ特性に触れ運動を楽しむことが目標とされたこと

##### (2) 39年幼稚園教育要領と平成元年教育要領の比較

- ① 39年幼稚園教育要領は、幼児に対して幼児の経験や活動を組織し、あらかじめ教育の在り方を設定し、各領域が示す「ねらい」から経験や活動を保育者が選択し配列することより、系統主義の特徴がある。
- ② 平成元年幼稚園教育要領は、環境構成が保育者の最も重要な役割である、具体的な活動の選択と展開は、環境の関わりを通じて幼児が主体的に行うものであること、心情・意欲・態度を培うことが幼稚園教育の具体的目標であることより、児童中心主義の特徴がある。

##### (3) 幼児の4つの運動類型

- ①系統性—主体性
- ②できる体育—楽しい体育

その軸で区切られた4つの区分にその内容より以下の命名を行った。

(1) 力強さ追求型

能率的、効率的に技能の獲得を図る型

(2) しなやかさ追求型

運動へのイメージを持ち、自分の身体の動きと関連づける型

(3) たのしさ追求型

技能の系統的な積み上げを重視するのではなく、子どもの発達や活動における楽しさを重視する型

(4) こちよさ追求型

幼児の自由な活動の中から繰り返し、自発的に運動をすることで技能を高める型

#### 4. 第3章 本論文の課題と方向

(1) 本論文の目的

幼児の運動能力を育むためにどのような視点で運動能力を捉えればよいのか、更に、幼児が運動能力を育むためには、保育者はどのように関わっていけばよいのか、4つの幼児の運動の考え方・捉え方の類型化を基にして、幼児の運動能力を育む可能性について実証的に検討を加える。さらに、その結果を踏まえて、幼児の運動能力を育む運動プログラムの試案を提案する。

(2) 本論文の仮説

幼児の運動の類型化により示された運動の捉え方・考え方について、それぞれ、幼児の運動能力との関連を調査することにより、各類型が幼児の運動能力を育む可能性について検証した。

①調査Ⅰ 仮説 幼児の運動有能感・被受容感と幼児の運動能力は関連があり、たのしさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性がある。

②調査Ⅱ 仮説 幼児の運動の好き嫌いとは幼児の運動能力は関連があり、たのしさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性がある。

③調査Ⅲ Ⅳ 仮説 ラダー運動によるステップと幼児の運動能力は関連があり、こちよさ追求型・しなやかさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性がある。

### (3) 本論文の構成

#### 5. 第4章 幼児の運動能力と運動有能感・被受容感との関連

調査Ⅰ 仮説 幼児の運動有能感・被受容感と幼児の運動能力は関連があり、たのしさ追求型により、幼児の運動能力が育む可能性がある。

結果は次の点である。

- (1) 男女とも運動能力と運動有能感「走る」に関連がみられたこと
  - (2) 女児は、運動能力と運動有能感「スキップ」に関連がみられたこと
- よって、仮説は一部支持された。

#### 6. 第5章 幼児の運動能力と運動の好き嫌いとの関連

調査Ⅱ 仮説 幼児の運動の好き嫌いとは幼児の運動能力は関連があり、たのしさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性がある。

その結果、

- (1) 幼児の運動能力と運動の好き嫌いは関連が見られなかった。
- よって、仮説 幼児の運動の好き嫌いとは幼児の運動能力は関連があり、たのしさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性があるは支持されなかった。

#### 7. 第6章 幼児の運動能力と内なるリズムとの関連

調査Ⅲ 仮説 ラダー運動によるステップと幼児の運動能力は関連があり、こちよさ追求型・しなやかさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性がある。

その結果、

走運動が3拍子のリズムと関連があった。3拍子のリズムに早く対応できた幼児は運動能力が高いことが示された。

よって、仮説 ラダー運動によるステップと幼児の運動能力は関連があり、こちよさ追求型・しなやかさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性があるという仮説は、一部、支持された。

## 8. 第7章 リズム運動プログラムと内なるリズムとの関連

調査Ⅳ 仮説 ラダー運動によるステップと幼児の運動能力は関連があり、こちよさ追求型・しなやかさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性がある。

その結果、

(1) ラダー運動のプログラムを行った実験群は調査したすべての運動能力が向上した。統制群は、運動能力の平均台を除いて、向上しなかった。

(2) ラダー運動による内なるリズムを意識させる運動プログラムは、走・跳・投運動については、運動能力を育む可能性が示唆される結果となった。

実験群は、すべての種目において有意に質的運動能力が向上している。幼児を月齢で3グループ（4月～7月・8月～11月・12月～3月）に分けて実験群の事前事後の比較を行った結果を示している。実験群は、ほぼすべての項目について平均値が向上し、有意差も認められる結果となった。

よって、仮説 ラダー運動によるステップと幼児の運動能力は関連があり、こちよさ追求型・しなやかさ追求型により、幼児の運動能力を育む可能性があるについては、仮説が支持された。

## 9. 第8章 内なるリズムを生かした運動プログラム試案内容の提案

運動プログラム試案内容の提案を行った。4つの幼児の運動主義を含め、第2章の図 2801 幼児の運動能力類型化Ⅱに基づいて、内なるリズムを生かす視点から再構成を行い、運動プログラムの試案の作成を行った。この試案は、投運動のプログラム試案となっている。各主義について6項目（①子どもが行う外的行動の特徴の捉え方 ②自己コントロール ③内なるリズム ④保育者による子ども理解の特徴 ⑤保育者の支援の特徴 ⑥評価）で区分し、検討を加えた。

## 10. 第9章 結論

## 第2節 内なるリズム運動プログラムの活用

保育者は、目の前の子どもにどのように接すれば、運動能力を育むことができるのか、迷いながら取り組むこともあるのではないだろうか。運動能力は、幼児一人一人違いがある。内なるリズムについても、それぞれの個性がある。文部科学省の「幼児期運動指針」も策定され、今後ますます、幼児の運動については注目される場所であることは想像に難くない。本論で提案した運動プログラムは、具体的な運動を示唆しているものではない。どのような運動能力の考え方においても、内なるリズムを基調として、取り込むことができるようにと考えている。

## 第3節 今後の課題

内なるリズムを生かした運動プログラムについては、今後、継続的に調査を行い、幼児の運動能力を育む可能性について、検証する必要がある。調査に協力して頂いた保育園において、年中組が継続してラダー運動に取り組んでいる。長期的な調査により、内なるリズムを生かした運動プログラムの効果検証を行う予定である。

幼児の運動能力には、星野（1997）は、動作法について次のように記述している。「身体が動くことと、身体を動かすこととを区別し、前者を身体の物理的な移動としての身体運動、後者を行動の主体者である人間の能動的・主体的活動としての動作とよんだ。動作法では、随意運動を動作と定義し直したのである。」（p.206）本論では、この行動の主体者である人間の能動的・主体的活動としての動作、随意運動を自己コントロールとした。この自己コントロールは、運動能力には必要となる。内なるリズムと共に検討を加える必要がある。本論文においては、自己コントロールについて、特に、検討を加えていない。一部、ラダー運動において、イメージさせる場面があった。ドナルドステップ、ジグザグステップ、こびとステップなど幼児がステップをイメージしやすいように命名し、調査に活用した経緯がある。自己コントロールについては、次の先行研究がある。

田中（2006）は、人物描画法を用いて、幼児の Body Image を表象し、運動能力との関連を調査している。画用紙に頭、首、胴など 15 部位を幼児に描か

せるものである。多く描ける幼児が **Body Image** がより形成されていると判定される方法である。その結果、「4 歳児の投能力の発達は、腕の部位が投動作に関与し、どのように動かせば遠くまでソフトボールを投げることができるのかをイメージしている。」「5 歳児は、走能力の発達は、腕を含む胴や頭の上半身の部位が走動作に関与し、どのように動かせば速く走ることができるのかをイメージしている。」と報告している。(p.14) このようにイメージについて検討を加え、運動能力との関連を調査している研究がある。イメージを幼児から表象している点は、今後の研究（イメージがどのように内なるリズムと関連しているのか）の参考にしたいと考えている。

また、内なるリズムは、運動能力の向上にどのように関与しているかについて、検討を加える必要があると考えている。そのためには、内なるリズムによる幼児の運動能力の向上の過程を詳細に観察・研究する必要がある。今後の課題としたい。

## 引用文献

- ・ 穂丸武臣 野中壽子 花井忠征 村瀬智彦 藤井勝紀 (2001) 「愛知県における幼児の体格・運動能力の年代変化」 名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 vol.11 p.127-145
- ・ 新井迪夫 周東和好 (2002) 「運動嫌いに関する一考察」 淑徳短期大学研究紀要 Vol.42 p.17-31
- ・ 新井迪夫・中西 一弘 (2012) 「幼児体育指導者の動感認識に関する一考察」 淑徳短期大学研究紀要第 52 号 p.61-70
- ・ 飯塚恭一郎 (2010) 「幼児の体が動くための動機に関する一考察」 兵庫教育大学 幼年児童教育研究、Vol.22 p.67 p.67-75、
- ・ 出村慎一 (1993) 「幼児期におけるボール遠投に対する体力及び投動作の貢献度とその性差」 体育学研究 Vol.37 p.339-350
- ・ 岩崎洋子 杉原隆 猪俣春代 (1992) 「幼児の有能感と運動能力との関係」 日本体育学会大会号 (43A).252. 10-31
- ・ 岩崎洋子・朴淳香 (2006) 「幼児期の運動技能・運動能力と運動有能感・身体活動欲求との関連」 日本保育学会第 59 回大会論文集、p.158、
- ・ 岡沢哲子 (1996) 「幼稚園の運動遊び場面における運動有能感テストの作成」 スポーツ教育学研究 Vol.16 p.63-72
- ・ 岡沢哲子 (2004) 「保育者の言葉がけが幼児の遊び行動に及ぼす影響について有能感を高める試みを通してー」 日本保育学会大会発表論文集 (57), p.846-847
- ・ 小佐野由衣 澤田孝二 (2011) 「幼児期・学童期の身体活動の取り組みに影響する要因の分析」 山梨学院短期大学研究紀要 Vol.31 p.27-38
- ・ 石垣恵美子 玉置哲淳 島田ミチコ 植田明 (2002) 「新版幼児教育課程論入門」 建帛社 (p.4-7)
- ・ 岩崎洋子・杉原隆・猪俣春代・中村和彦・吉田伊津美・濱島隆幸・杉本信・鈴木康弘 (1992) 「幼児の運動有能感と運動能力との関係」 日本体育学会大会号 43A 252
- ・ 岩崎洋子 猪俣春世 吉田伊都美 (1998) 「幼児期の運動意識に関する研究

10：活動欲求・有能感の縦断的变化について」の本保育学会大会研究論文集 vol.51 p.584-585

- ・勝二博亮・田村睦子（2011）「知的障害児における基本運動の発達アセスメント」発達研究 Vol. 25 p.195-200
- ・勝二博亮（2012）「幼児期における基本運動の発達段階」発達研究 Vol. 26 p.63-72
- ・岡澤祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎（1996）「運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究」スポーツ教育学研究 Vol.16（2） p.145-155,
- ・神奈川県立体育センター事業部指導研究科調査研究班（2010）「幼児の運動能力測定総括—幼児の運動能力測定事業4年間のまとめ—」神奈川県立体育センター研究発表会 p.8-10
- ・河本肇（1985）「幼児の自己評価と行動基準の設定が歯みがき行動に及ぼす効果」教育心理学研究 Vol.33 No.4 p.307-314
- ・川田裕次郎他（2011）「幼児における体格・運動能力・保育者からの評価と運動有能感の関連」体育心理学会大会要 p.123
- ・蒲真理子 佐野新一 宮口和義 鶴沢典子（2003）「幼児期におけるアジリティーラダーを使用した遊びの検討」北陸大学紀要 Vol.27 p.13-23
- ・木村浩 秋山征一 桜間一彰（1998）「神経振動子を用いた四足ロボットの不整地動歩行と整地走行」日本ロボット学会誌 Vol.18 p.110
- ・久保祐子 山口光國 大野範夫 福井 勉（2006）「姿勢動作分析における身体重心点の視覚的評価の検討」理学療法学 Vol.33-3 p.112
- ・金美珍 小林正子 中村泉（2011）「幼児期の運動や運動遊びの経験が学童期の子供の生活・健康・体力に及ぼす影響」小児保健研究 Vol. 70（5） p.661
- ・近藤明彦（1994）「調整力テストとしての全身選択反応時間の測定とノルム作成の試み」慶応大学体育研究所紀要第 Vol.34 No1 p.1- 19,
- ・郷司文夫 出村慎一（1992）「行動観察に基づく幼児の運動成就テストの作成」体育学研究 Vol.37 p.123-134
- ・小林寛道 脇田裕久 八木規夫（1990）「幼児の発達運動学」 p.285・196
- ・桜井茂男 杉原一昭（1985）「幼児の有能感と社会的受容感の測定」教育心



理学研究 Vol. 33 p.237-242

- ・桜井茂男・杉原一昭（1985）幼児の有能感と社会的受容感の測定 教育心理学研究 Vol.33 No3 p.237-242
- ・笹川スポーツ財団（2013）「子どものスポーツライフデータ」4～9歳のスポーツライフに関する調査報告書 p.64-65 p.94
- ・佐々木玲子 石沢順子（2014）「観察的評価からみた幼児の基本的動作の習得度と評価の有効性についての検討」慶応大学体育研究所紀要 Vol.53-1 p.4 p.8 p1-9
- ・佐野淳：教師のための運動学（1996）「動きのリズムを見つける」、p.78-85 大修館書店
- ・塩田桃子（2007）「日本における幼児体育研究の動向と課題」大阪健康福祉短期大学紀要 Vol.5 p.61-69
- ・清水博（1996）「生命知としての場の論理」中公新書 中央公論社
- ・鈴木康弘（2003）「幼児期における運動遊びと心理的発達の関係」2003年度 文部科学省研究実績報告書
- ・特定非営利活動法人日本SAQ協会HP (<http://www.nisaq.com/jrtraining/haruna.html>)
- ・高德希（2014）「幼児期の走・跳・投動作の縦断的变化から見た基本艇動作の獲得について」奈良女子大学スポーツ科学研究 Vol. 16 p.12-29
- ・田中千恵（2006）「幼児期における body image の構造に関する研究—人物描画法と基本的な運動技能との関連から—」発達発育研究 Vol.31 p.8-14
- ・高橋健夫（1994）「体育の授業を創る」大修館書店 p.14
- ・中央教育審議会（2002）「子どもの体力向上のための総合的な方策について（答申案）体力の意義と求められる体力 次世代を担う子どもたちに求められる体力 運動をするための体力」（第24回）配布資料 資料5-2
- ・デビッド・L・ガラヒュー（2009）「幼少年期の体育 発達の視点からのアプローチ」杉原隆監訳 大修館書店 p.45
- ・富田寿人 音淵理江 松島亜紀（2014）「リズム運動を含んだ運動プログラムがおよぼす幼児のリズム感および体力への影響」静岡理工科大学研究紀要 Vol.22 p.51-56

- ・友添秀則 (2002) 「体育科教育学入門」 大修館書店 p.41-43
- ・内閣府平成 25 年度版子ども・若者白書 (2013) 「第 1 部人口第 2 章健康第 1 節発育」 p.5-8
- ・中井隆司・川下亜紀 (2003) 「運動遊び場面における幼稚園教諭の意思決定過程と個人レベルの指導論に関する研究」 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 Vol.11 p.1-10
- ・中澤潤 泉井みずき 本田陽子 (2009) 「幼児の有能感の認知と遂行との関連—幼児楽観性の視点から—」 千葉大学教育学部研究紀要 Vol.57 p.137-143
- ・中澤潤・泉井みずき・本田陽子 (2009) 「幼児の運動有能感の認知と遂行との関連—幼児楽観性の視点から—」 千葉大学教育学部研究紀要 57 p.137-143
- ・中島伸子 稲垣佳世子 「子どもの楽天主義 (2007) 望ましくない特性の変容可能性についての信念の発達」 新潟大学教育人間科学部紀要 人文・社会科学編 Vol.9(2) p.229-240
- ・中西智子 (2009) 「音楽リズムは、からだ・こえ・おと・タイミング・おんがくと視覚の総称」 チャイルド・サイエンス Vol.5 p.45-47
- ・中村和彦・武長理栄・川路冒寛・川添公仁・篠原俊明・山本敏之・山縣然太郎宮丸凱史 (2011) 「観察的評価による幼児の基本的動作様式の発達」 発育発達研究 Vol.51.p.2 p.17 p.5-11 p.15-17、
- ・日本学術会議 健康・生活科学委員会 健康・スポーツ科学分科会 (2008) 「子どもを元気にするための運動・スポーツ推進体制の整備」 (p.ii)
- ・Harter、S. : Effectance motivation reconsidered. Human Development: Vol.1 p. 34-64、1978
- ・古川麻衣 山谷幸司 笹生心太 (2012) 「運動嫌い・体育嫌いの実態と発生要因に関する研究 —小学生・中学生・高校生における「運動嫌い」と「体育嫌い」の関連性に着目して—」 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集 Vol.1 p.107—225、
- ・宮口和義 出村慎一 蒲真理子 鶴沢典子 (2010) 「幼児におけるラダー運動の成就度の年齢差・性差および走能力との関係」 スポーツパフォーマンス研究 Vol.2 p .4.7 p.1-11
- ・三木四郎 (2005) 「新しい体育授業の運動学」 p.22 p.97 p.98 明和出版

- ・文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説 体育編 p.10
- ・文部科学省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」第1章 調査結果の概要 p.1-6
- ・文部科学省「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」（2011）第3章調査実施要領と調査結果 p.7-8 p.102-103
- ・文部科学省（2012）「平成24年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果 調査の概要」 p.1-9
- ・文部科学省（2013）「小学校保健教育参考資料「生きる力」を育む小学校保健教育の手引き」 p.18-20
- ・文部科学省（2014）「幼児期運動指針ガイドブック」 p.22 p.49
- ・文部科学省（2014）「幼児運動指針」 p.2
- ・文部科学省 平成25年度幼児期の運動促進に関する普及啓発事業「実践事例報告書」発達の特性に応じた遊びを開発する「発達発育調査」川西市全幼稚園
- ・長谷川悦示（2015）「我が国の学習指導法の展開と学習指導モデルの概要」体育科教育学研究 Vol.31(2) p.34
- ・長谷川 勝一（2013）「幼児期の運動能力と群れ遊びの関係について」美作大学・美作大学短期大学部紀要 Vol.58 p.41-45
- ・原田碩三（1997）「新版幼児健康学」黎明書房 p.154.155.171
- ・原田康弘（2000）「随意運動を反射的に行うためのトレーニング」Training Journal Vol.122 No.7 p.21
- ・橋本稔（2016）「未来を担う着るロボットの開発」信州大学 博士課程教育リーディングプログラム「ファイバールネッサンスを先導するグローバルリーダー養成」  
<http://www.shinshuu.ac.jp/project/leading/future/development.php>
- ・畠山有紀子（2007）「日本語とリズム：現代における韻律」成城大学紀要 Vol.23 p.158-142
- ・星野公夫（1997）「動作法から見たスポーツ選手への心身の自己コントロール」体育学研究 Vol.42 p.205-214

- ・松寄洋子(2013) 「幼児への運動指導が身体能力の発達に与える影響」 2013年度白梅学園大学大学院子ども学研究科博士課程 学位論文
- ・三木四郎 (2005) 「新しい体育授業の運動学—子どもができる喜びを味わう運動学習にむけて—」 明和出版 p.9
- ・三木成夫 (1992) 「生命形態学序説」 p.193 うぶすな書院
- ・三木博 (2009) 「ヒトの生命と文化を貫くリズム」 月刊言語 2009年6月号 p.18-25
- ・宮口和義 出村慎一 杉浦宏季(2010a) 「幼児の走運動に対するラダー運動の効果」 体育測定評価研究 Vol.10 p.11-19
- ・宮口和義 出村慎一 蒲真理子 鵜沢典子 (2010b) 「幼児におけるラダー運動の成就度の年代差・性差および走能力との関係」 スポーツパフォーマンス研究 Vol.2 p.1-11
- ・村瀬智彦・出村慎一 (1990) 「幼児の運動能力評価法の検討—いわゆる『運動能力テスト』と合否判定テスト—との関係について」 「体育学研究」 Vol.35 p.207-217 日本体育学会
- ・森司朗 杉原隆 吉田伊都美 筒井清次郎 鈴木康弘 中本浩揮 (2011) 「幼児の運動能力における時代推移と発達促進のための実践的介入」 平成20～22年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B) 研究報告書課題番号 20300204
- ・八木規夫 小林寛道 脇田裕久 水谷四郎 (1986) 「幼児の短距離走能力と跳躍能力との関係」 日本体育学会大会号 37B p.226
- ・柳澤弘樹 (2007) 「幼児期の運動支援が前頭前野の発達に及ぼす影響～柳沢運動プログラムの実践を通して」 children research net p.3
- ・柳田信也 (2008) 「幼稚園教諭の運動遊びに関する指導理念の調査研究」 国際学院埼玉短期大学紀要 Vol.29 p.21-26
- ・山縣麻実 的地修 若吉浩二 (2010) 幼児・児童の運動学習に向けたリズム運動プログラムの作成 びわこ成蹊スポーツ大学 スポーツ開発・支援センター年報 Vol.7 p33
- ・山崎信也 川島佳子 清水敦彦 (1998) 「裸足教育による幼児の運動能力の発達」 足利短期大学研究紀要 Vol.18 (1) p.19-25

- 吉田茂 三木四郎 (1996) 「教師のための運動学」大修館書店 p.79-83
- 吉田千里 石黒浩 浅田稔 「手遊び課題における幼児のリズム変調とタイミング調整」日本心理学会 第74回大会 一般発表 p.1114
- 渡辺俊男 川原ゆり (1976) 「四肢動作にみられる協応能の発達」体力科学 Vol.25 p.118-128

## 謝 辞

本研究は、著者が大阪総合保育大学大学院後期博士課程在学中に、同大学院玉置哲淳教授のご指導のもとに行ったものである。

博士論文執筆に際し、研究の基本、方向づけから論文内容の詳細に至るまで、辛抱強く、私にご指導下さいました玉置哲淳教授に心より感謝申し上げます。研究だけでなく、真摯に物事に関わる姿勢を説いてくださいました。私自身の至らなさを実感することができたことは、今後の自分自身の生き方の糧になるものです。深く感謝申し上げます。瀧川光治教授には、私の研究上、至らない点について、副査として貴重なご助言、適切な支援をいただきました。深く感謝申し上げます。大阪成蹊大学副学長三村寛一教授には、副査として丁寧な査読をいただき、貴重なご示唆をいただきました。心より感謝申し上げます。

渡辺俊太郎准教授には、特に、研究の統計的内容について丁寧にご指導いただき、時には励ましていただきましたこと、心より感謝申し上げます。大方美香教授には、いつも温かいまなざしで研究を進める様子を見まもってくださいました。有難うございました。

調査研究にご協力いただきました幼稚園・保育所の園児の皆さん、教育委員会担当者様、園長先生、所長先生をはじめ、保育者の先生方、評価に協力いただいた小学校の先生方、保護者の方々には、お忙しい中、日程、時間など様々な配慮をいただきましたこと心より感謝申し上げます。私は、何よりも調査での園児との関わりがとても楽しみでした。

論文の校正については、豊能町立歴史資料館館長 小川静生先生にお世話になりました。何回も丁寧に論文を読んでくださいました。感謝申し上げます。

玉置研究室の修士課程や博士課程の皆様、博士課程同期の丸目さんには、様々な場面で、多くのご支援をいただきました。心よりお礼を申し上げます。

博士論文を書き上げられたことに対して、これまでお世話になったすべての方々に改めて謝意を表します。

最後に、院生生活を支えてくれた家族、妻と子どもたちに感謝したいと思います。家族の支えがなければとうていここまで来ることはできませんでした。本当にありがとう。